

---

# スキルハーツ！

mission No.149

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スキルハーツ！

### 【Nコード】

N2411L

### 【作者名】

mission No.149

### 【あらすじ】

ピアノの音から、その物語は始まる。  
学園と能力が織り成すファンタジー。  
は挿絵付きという意味です。

## 登場人物

ここは本作品の登場人物を紹介していくところです。何しろ、キャラが多くなると思うので。（整理といった方が正しいかもしれませんが）話がややこしくなってきたら用語とかも入れようかなあと考えてます。

新キャラが出たら順次更新していくつもりです。

あと、重要なネタバレは書きませんが、ある程度はネタバレになるかもです。

〈国立カルマ魔術学園・高等部生徒〉

破門 やぶら  
愛 あい

異能力コード・リズボルト「自身の左腕に貼付けられた大量の紙を

操ることができる」

備考・無神経の石頭。下の名前で呼ぶと怒る。

辻崎 つじさき  
和馬 かずま

異能力コード・なし

備考・イケメン優等生。破門の親友。

千宮 せんのみや  
桜 さくら

異能力コード・テレポート「一定範囲内ならばその中を自由に瞬間移動できる」

備考・チビで寡黙な三白眼。破門と同居。

> i 1 9 8 8 6 | 2 5 5 1 <

討窪 うちくぼ  
大和 やまと

異能力コード・マグネイド「黒球に当たった物体を自身の元に引き寄せることができる」

備考・金髪関西弁。よく破門に喧嘩を仕掛ける。

姫鉦 ひめなだ  
理香子 りかこ

異能力コード・マエストロ「あらゆる波動を操ることができる」

備考・0組の学級委員長。凜としているがちょっと変。

> i 1 9 8 8 8 | 2 5 5 1 <

ルイカ

異能力コード・枷負い「身体能力に優れるが、それがあまりに過剰なため、枷で抑制されている」  
備考・孤独な化け物。忌村グループのいじめを受けている。

〈国立カルマ魔術学園・高等部教員〉

あぶらひしじ  
油小路 吟斗

異能力コード・????

備考・威厳のない校長。よくメタモルフォーゼで少女に変化しているが、実際には年老いた爺さん。

マックス・トロール

異能力コード・????

備考・マッチョなオカマ。0組担任。

アリア・スタンガン

異能力コード・なし

備考・吟斗の説教役。吟斗に対して平気で平手を放つ。

猫糞 死生 (ねこばば しせい)

異能力コード・なし

備考・ネコ耳幼児な保険医。ラジオンスペルが使える、治癒能力に優れる。

〈その他〉

カルマ・ギルフォード

異能力・????

備考・能力者の祖とされる人物。テキストの概念を編み出す。自身の異能力を使って世界統一と世界平和をもたらした。カルマ魔術専門学校の創設者でもある。

## プロローグ ピアノの音

?????ピアノの音が聞こえた。その音は演奏のそれではなく、ただ単調な、ポーンという一音。

カルマの日記はこの一節から始まる。

まだ車などなかった時代。

まだ電話などなかった時代。

まだ『能力』が魔術と呼ばれていた時代。

人々は魔術とは何なのかを、突き止められずにいた。ただ漠然と、人の魔術による現象を、ただの物理的法則外の特例としてしか考えていなかった。

そんな時代の中、ある男によって世界統一は成された。

その男こそ、カルマである。

カルマは世界の言語を統一し、全世界共通の和平条約を締結させた。そういつたことが出来たのは、彼の、魔術に似た特異な力があつたからである。

彼はその異質な力を使い、魔術を解明しようとした。そうして発見されたのが、当時でいう魔術、現在でいう『能力』の根源的エネルギー、『テキスト』の存在。

テキストは、肉体を突き動かす本能と、精神を司る理性によって成り立ち、その器量は人それぞれである。

カルマはテキストを発見したことで、あらゆる魔術の本質を解明、分類した。そして、文明は急速に発展していった。

また、カルマは自身が解明した魔術の全貌を後生に残すため、魔術学校を設立し、若い人材に魔術の知識を教えた。そうしている内に、彼はあることに気がついた。

あらゆる魔術による事象は、自分が作り上げた体系から外れていないが、唯一自分の特異な力だけは、その体系に乗っ取っていないと。

しかしながら生徒の中にも、カルマの作った体系とは合わない力を持つ者が幾人かいた。

カルマはそういった異質な者達を使って研究、実験を繰り返し、新たな概念、『テキスト周波』を作り出した。

この時点でカルマは、魔術を『能力』、それを扱える者を『能力者』、異質な能力を備えた者を『異能力者』と呼び始めたのだ。

カルマが死んでから約五百年。カルマ魔術学園は今もその姿を残し、多くの能力者を輩出している。

現在、『能力』について本格的に扱う学校は能力学校もしくは能力学園と呼ばれているが、カルマ魔術学園だけは、当時の名残から改名はしていない。

高速で車やバイクが行き交う時代。

皆が携帯電話を持ち歩く時代。

魔術が『能力』と呼ばれる時代。

人々は魔術が元となる『能力』を、テキストを源にした人為的現象と定義した。

おそらく、カルマが聞いたピアノの音は、今も響き続けている。

## ブログ ピアノの音（後書き）

鈍足更新ですけど、読んでくれたら嬉しいですよ。  
よろしくお願いします。

## 第一話 金色の桜

朝の静寂たる部屋に、ノックの音が飛び込む。そして反応がないのを確認されると、その洋式の部屋のドアが開け放たれた。

「おい。起きろ。お前ら」

ドアノブを握りながら中年の男はその部屋の住人に声をかけた。その声が耳に入ったからか、一人の青年がノツソリと、ベッドから起き上がった。

「ん〜……ふわぁ……。おはようございます。先生」

「おはよう。おい、そのもう一人！ 起きろ」

現在、この空間には三人の人間がいる。起こしにきた先生と、起こされた生徒と、そして未だに眠る生徒。

「破門<sup>せふん</sup>。先生が起きろつてよ」

「ん〜。あと五分」

破門<sup>せふん</sup>と呼ばれる生徒は枕をだき抱えながら、その枕に顔を埋めた。しかし先生は無理矢理枕と布団を、破門から引き剥がして叫ぶ。

「起きなさい！」

\*\*\* \*\* \*

「まったたく」

先生が腰に手を当ててしかめっ面に軽く嘆いた。破門を起こすのにかれこれ20分も掛かったからだ。

「え〜。じゃあ部屋の新しい振り分けを報告する」

先生は、ピシッと地面から直立で立っている生徒と、猫背気味に眠たそうな表情を浮かべて腹を掻いている生徒の前で、A4サイズの紙の束を取り出した。

「名前を」

「辻崎つじさき 和真かずま。能力者です」

「志望は？」

「ガーディアンズです」

「え〜つと。辻崎で、ガーディアンズ。ああ。君は東棟第二宿舎の001号室だ」

「はい」

辻崎と先生のやり取りが終わると、しばしの沈黙が流れた。次の問答は破門と先生なものにも関わらず、どちらも声を発さなかったからだ。

「おい。破門。立ったまま寝るなよ」

「ううう。ああ〜」

「はあ……。君。名前と位相を」

破門は寝ぼけた面もちで目を半開きのまま答えた。

「破門……。愛……。異能力者……」

「破門ね。異能力者だから0組か。じゃあ東棟第一宿舍の149号室だ」

「りよ、りよーかい……。でふ」

破門は敬礼のように右手を頭の方を指すように掲げた。腰はフニヤフニヤだが。

「ふう。春休みなのに実家に帰らないなんて君達くらいだからな。部屋移動はあまり急がなくていいから。では、また」

辻崎は頭をペコリと下げ、先生の背中を見送った。パタンというドアの閉まる音の後、辻崎はなにやらニヤケだした。それに気づいた破門は、疑問符を打つ。

「辻崎、どうかしたか？」

「いやあ。俺らもとうとう高等部なんだなあって」

「そんなワクワクするか？ ふつー」

破門はベッドの方に向かって歩きながら会話した。

「そりやするよ！ だって高校生だぜ？ やつと実践的な能力を扱えるってんだから、興奮もするさ！」

「そーいうもんか？」

「異能力者のお前と違って、俺は能力を身近に感じてないの。中等部のときは理論しかやらないし」

「ふーん」

破門は若干温もりの残る布団を、自分の身にかけて。そして再び眠りにつこうとするが。

「駄目だ。身支度して、移動先で寝ろ！」

「え〜。やだよお。布団返せ〜」

「ほら、早くするぞ」

辻崎は洋風な押入からドラムバックを取り出し、自分の衣服や荷物を詰め始めた。破門はブーブー言いながらも、布団を押入の中へ畳んで入れた。

二人がいるこの部屋は、国立カルマ魔術学園の宿舎だ。魔術と名がついても、実際には魔術という名称を口にする者は老年の教員くらいなもので、大半の人は単に能力と呼んでいる。

「掃除もしていこう。新三年生がここを使うかもだからな」

「うへえ」

能力を持つ者を能力者。持たない者を無能力者。異質な能力を持つ者を異能力者という。

異能力者の判別は、能力の根元的エネルギーである『テキスト』が、一般的なテキストと血色が違うことでなされる。

部屋の掃除を続ける辻崎は、規則的な周期の『テキスト周波』を持つ『能力者』であるのに対し、破門は、不規則的な周期の『テキスト周波』を持つ『異能力者』。

「おい破門。歯ブラシ持っていくの忘れてるぞ」

「いやよ、んなの。新三に譲るわ」

「中古の歯ブラシなんていらねいだろ！」

異能力者は、一般的能力である火・水・風・土・雷系統以外の、特異な能力を扱える。

カルマ学園では、異能力者と能力者と無能力者のクラスを完全に区別している。

1～5組が能力者のみ。6～9組が無能力者のみ。そして0組なるものが異能力者のみ。

「げっ！」

「？ どうした破門？」

「いや、いやなんでも」

破門は、中等部の制服のブレザーに袖を通して隠れている辻崎から隠れつつ、「0点」と右端に書かれた解答用紙をクシャリと丸めた。

「なんで花瓶の中に……。ああそっか。自分で隠したんだっけ。辻崎に説教されないように……」

「なんだボソボソ喋って。早く掃除を終わらせようぜ」

辻崎の成績は至極優秀だ。常に高い学力を維持する無能力者の生徒にも引けをとらない、正真正銘の優等生。先生達からの評判も良い。

しかしながら、なぜそんな辻崎がとんでもなく阿呆な破門と同じ学校にいるのか、というと、カルマ魔術学園には入学試験が存在しないのだ。従って、入学希望者は全員合格になるシステムになっている。

「おい破門、ネクタイ曲がってるぞ」

「そっいつお前もブレザーのボタン取れてるぞ」

「これは卒業式の際に女子に取られたんだよ」

ただ、合格率百パーセントのカルマ学園に、入学希望者が殺到しない理由がある。

それは、カルマ学園が全ての学校よりも、『生徒の死亡率』が最も高いからである。

「あつ。ゴミだしに行くならついでにこれも頼む」

破門は、ポリ袋の中に自分の教科書やノート諸々を投げ込んだ。

辻崎はポリ袋の口を縛ろうとしているその手を止める。

「おいおい。いいのかよ。ただでさえ馬鹿なのに」

「いいんだ！ 早く捨てちまってくれ」

「つたく、勉強嫌いにもほどつてもんが……。ん？」

「あ」

「おい破門！ これは何だ！ テストは俺に全部報告しろと言ってる！」

辻崎はポリ袋に手を突っ込み、破門が捨てた教科書類に挟み撃ちにされた用紙を取り出した。そしてそれを破門に突きつけ、叫ぶ。

「また0点かよ！ だいたいお前は日頃の……」

「うへえ……」

\*\*\* \*\* \*

破門は中途半端に伸びたツンツン頭をクシャクシャと掻き、一息をついた。

「はあ……。疲れた」

「おい座ってないで、早く荷物運んじまうぞ」

辻崎の両肩には二つドラムバック＋縄でしばった布団。両手は教科書類で埋まっていた。

「いーじゃんかあ。先生も急がなくていいって言ってた!」

「早いに越したことはない。ほら立て」

破門は少しだけ考えて立ち上がる。ダルいなあ、と愚痴をこぼしながら辻崎にまとめてもらった荷物を担いだ。

破門と辻崎は中学生としての三年間を過ごした部屋を出た。そして、辻崎は両手の荷物を落とさないように、鍵を閉めながら言う。

「何か感慨深いものがあるな」

「そうかあ？ 俺は特に感じねえが」

鍵が閉まったことを確認すると、二人は宿舍棟の廊下を歩きだした。

破門が大きな欠伸をする。

「ちゃんと前見て歩け」

「んなこたあ分かって……おわっ!」

「きゃっ!」

ドン、という音とともに破門は廊下の曲がり角で女子にぶつかった。その女子は尻餅をつき、突然の出来事に少し涙目になっている。

「す、すみません」

「君、大丈夫？」

教科書を置き、破門そつちのけで辻崎は女子に手を差し出した。辻崎の手に、小さく白い、そして冷たい手が重なる。

「あ、ありがとうございます」

その女子はあまりに美貌だった。綺麗にパツチリと開く二重の瞳、スラリと流れるような輪郭、白い肌に汚れなど皆無で、地面と垂直に下りる黒髪は老朽している電球の光でも映えていた。

「辻崎。俺も立てな。手を貸しておくれ」

「お前は頑張れ」

「けっ！ 何だよ親友が困ってるのに！ 結局は女かチクショー！」

「一人で立てるじゃん」

「当たり前だバーロー！」

破門の叫び声は廊下中に響いたが、文句を言う者はいない。とうより、元々人がいない。

「……あれ。何かおかしくないか？」

「あ？ 俺の頭がってことかコラ」

「違うよ。先生もさっき言ってたろ」

「俺の頭がおかしいって!？」

「だから違うっての! この子だよ。春休みに実家に帰らないの俺らくらいだったって」

「あ、確かに」

二人はやり取りを終えると、ほぼ同時に女子の方を見た。すると、その女子は少し困り気な顔をして、手身近な説明をした。

「あ、私これから帰るので、多分居残り組にカウントされてないかも、なんです」

「へえそうなんだ」

女子は切りそろえられた前髪を整え、少し乱れたネクタイを締め直した。

「ってか、破門。早く謝れ」

「えーっ! これは事故だろ!」

「いいから。男が女をはね飛ばしただけ罪なんだよ。ほら!」

辻崎は破門の後頭部をおさえ、無理矢理その頭の位置を低くさせた。破門は軽く抵抗を試みるものの、辻崎の腕力の前でそれは無意味であった。

「痛えっ！ 辻崎痛えっ！」

「破門ちゃんと謝れ」

「あ、いや平気ですよ。そんなことしなくても……」

その女子の声を聞くと、辻崎はバックヘッド型アイアンクローを解いた。破門はまるでギリギリまで水中で息を止めていたかのように、ブハアツと息を吐く。

「優しいね。じゃ、こういう馬鹿には気をつけて」

「あ、はい。こちらこそすみませんでした」

そして破門と辻崎はその場を後にした。破門はやや不満気味に。辻崎はその女子の体を心配しながら。

「なあ破門。さっきの子、どっか痛めたりしてないかな？ 超足細かったじゃん」

「ふん、あれくらいで怪我する方がどうかしてる」

「お前なあ……。少しは礼儀つてもんを知れよ」

「それを言うなら辻崎！ 俺のことを『こういう馬鹿』って紹介しやがって！ お前だって礼儀を知れよ！」

「あれは譲歩。ちゃんとした礼儀だよ」

「どこがだー！」

廊下を動く二つ音源が、女子との距離を広げていく。それを女子は十分確認した上で、一つ独り言を呟いた。

「あつぶねー。術が解けるとこだった」

\*\*\* \*\*

「お前はあっち。池の方」

辻崎はカルマ学園の敷地に設置された池を指さす。

二人は中等部の寮を出て、高等部の敷地内に入り、宿舍の東棟を指していた。ここに至るまで、辻崎は破門の『あとどれくらい?』という質問を何度も聞かされた。

確かにカルマ学園の敷地は広い。教室棟や職員棟、宿舍、実験室、図書館、闘技場、資料保管庫などなど、多くの施設が中等部と高等部にそれぞれ設けられている。旧校舎というのもあるが、今となつては資料保管庫の一部にされてしまっている。

「じゃあ昼飯のときになったらメールしてくれ」

「分かった。破門は、えっと、149号室だっけ」

「そあ……」

「忘れんなよ……」

風が吹き、二人の下に生える芝生が行列を組んで揺れる。そして

二人の元に桜の花びらが舞った。

「……春だなあ」

「……」

「なあ破門。桜が舞ってるのを見ると、俺らが出会った頃のこと思い出さないか……っていねえ！！ 破門！？」

破門はスタコラサツサと歩きだしてしまっていた。正直、辻崎の感傷などどうでもよかったのだ。向かう方向が違ったため、辻崎が破門を追いかけることはなかったが、もし同じ方向なら追いつかれてアイアンクローが発動したに違いなかった。

「これが新しい寮……。何かボロいな」

破門は東棟第一宿舎に着き、寮という看板の立つ、荒廃に近い状態の建物を見上げた。よく見るとガラスの窓にガムテープが規則的に張り付けられてある。

「修正術使えよ。絶対100号室も部屋ないだろ」

木製のドアを開くと、ギギイと鈍い音を発した。木の香りが辺りに充満し、目を閉じればまるで大自然に囲まれているようだが、何しろ見かけがすこぶる悪い。

破門は狭い玄関で靴を脱ぎ、今にも崩壊しそうな靴入れに自分のそれを収めた。ギシツギシツと穴でも開きそうな廊下を進み、両側の部屋プレートを交互に見る。

「001号室……002号室……。宿舎間違えたかな」

破門は149号室なんてこの小さな建物にあるわけないと思った。というより、誰もがそう思うはずだった。

「辻崎のとはけっこう高級っぽかったのに。何だこの扱い。異能力者だから慣れてるだろ、ってかー？」

その時、破門はふと立ち止まった。

「ん？ あれ？」

破門の横には『149号室：破門 愛・千宮 桜』と書かれたプレートがあった。

「俺そんなに歩いたっけ？」

手前のプレートを見ていくと、確かに148、147、146と順をおっている。

「……何か、不気味だな」

静寂たるこの空間が、一瞬お化け屋敷のように感じられた。

破門は若干の恐怖を覚えたが、まあいいやと言いながら、新しい自分の部屋のドアノブを握った。そしてそれを右回りに回し、押し開いた。

「同室のやつは、どんなやつ、だ……る」

破門は絶句した。

「……んだこれ」

そこには、窓から桜が漏れ、しかしながらもその中で爆睡している、とある金髪の少女がいた。

> i 2 0 2 7 2 | 2 5 5 1 <

第一話 金色の桜 (後書き)

破門。「はもん」と書いて「やぶと」と読みます。

辻崎はイケメンです。

## 第二話 金城ウォール（前書き）

一応タイトルは暗号っぽくしてます。

というわけで、勝手に難易度とかつけていこうと思う。  
自己満足なんで、無視した方がいいかもしれません。

今回のタイトル難易度

## 第二話 金城ウォール

八畳の部屋のご真ん中に、小さな金色が一つ。

「……誰だこいつ」

破門は扉の前で立ち尽くし、呆然と寝ている少女を見下ろした。

見覚えのない顔だったが、その少女は自分と同じくカルマ学園中等部の制服を着ているため、生徒であることは分かった。

ただ、まったく見覚えがない。

「金髪は結構いたしなあ……」

破門は背中に背負った大荷物を一旦その場に置き、金髪の少女のところへ近づいた。

「女……だよな」

その顔をのぞき込むと、何ともかわいらしい寝顔だった。真っ白な肌は太陽の光によって、その金髪とともに輝いている。

毛布一枚を巻き寿司の海苔のように体に巻き付け眠っているその姿は、顔からでも判断できるような。

「チビ、だな」

破門には別にマニアックな趣味があるわけではないし、勿論ロリコンでもない。しかしながら、彼女には吸い込まれるような何かを感じ、その寝顔を破門はずっと覗いてしまっていた。

「何て気持ちよさそうに寝るんだこいつは」

その時、桜の花びらが金髪の少女の鼻に乗った。そよそよと風が吹き、その花びらはまるで彼女の鼻をくすぐるよう。

「ハクチツ！」

「おおっ！？ ビックリしたあ！」

突然の嚏くしゃみに破門は肩をすくめて驚いた。その破門の声に反応したのか、直接嚏くしゃみによってなのか、少女はまるで今朝の破門のようにノツソリと、その小さな体を起こした。

「……………」

「何なんだよこいつ……………」

破門が持った、この少女に対する第一印象は、目つきが悪い。それだけだった。

若干沈黙が続いたので、破門は啖呵を切ったように叫んだ。

「お前は誰だ！？」

少女の目は鮮やかな青色で、欠伸による涙もあってかその瞳は寶石のように輝いていた。

「おい。お前はいつたい」

「だれ」

半開きの目つき、素っ気ない言葉、だらしなく散らかった髪の毛。金髪の少女は、立っている破門を見上げ、無機質な声色で質問をした。

「え……。俺は、破門、だけど」

「や、ぶと？」

「そう。破門。同室の」

「……ふうん」

「……で、お前は誰だよ!？」

「……」

少女は玄関の方を指さした。破門は指をさされた玄関の扉を見ると、そこには149号室のルームメイト名簿が貼ってあった。そして、その紙には破門という文字と。

「せん、の、みゃ……さくら？ お前の名前か」

「そう」

「千宮か。千宮ね。ってかルームメイト!？」

破門は今更ながら、ふと気づいたことがあった。それは、なぜ男の自分が女の千宮と同じ部屋なのか、ということ。

だからこそ、一層今までの千宮の淡泊な反応に驚いた。

「ちよつ、おい。寝直すな寝直すな」

「なに」

「少しは変に思わないのか。俺は男で、同室だぞ?」

「……別に」

「別について、お前なあ」

「……」

「何だよ」

「……」

「何見てんだよ」

千宮は嫌な目つきのまま、破門の黒い瞳をのぞき込んでいた。まるで珍しいものでも見たかのように。

破門は千宮の眼力に気倒され、視線をそらした。

「つーか、学校に残ってるの俺と辻崎くらいのはずじゃねーのか」

「……」

「おい、千宮?」

「……」

「……まさかと思うが」

案の定、だった。

「……ね、寝てる？」

目を開けたまま。体を起こした状態で。まるで石像のように。千宮の小さな寝息を聞いて、破門は驚き半分。不信感半分。千宮は破門が目と鼻の先で手を振ってもまったく反応しなかった。

「ちょっとやだ何こいつ！！ 本当に寝てるっ！！ 逆にすげえっ！！」

「……ぐう」

\*\*\* \*\* \*

「まったく、寝てるなこりゃ……」

辻崎は呆れたような顔で携帯の発信履歴を見ていた。

「メールしても応答なし。何回電話しても出ないし。絶対あいつ部屋で寝てるだろ」

時刻は一時を少し過ぎた辺り。辻崎は昼食をとるため、破門に連絡を何度も入れたが、破門からの返事は一向に来なかった。

春休みの間、学校の食堂は開いていないため、二人の食事は自動

的に外食になる。行く店は日によって様々だが、主にファミレスが多かった。

「ここが第一棟……」

辻崎は破門のいる第一棟棟舎の前に立ち、その外見のひどさを垣間見た。よく見ると屋根の方にガラスが集<sup>たか</sup>まっている。

「ひどいな……」

辻崎はゆっくり入り口の扉を開いた。

「本当に149号室まであるのか……？」

靴を脱ぎ、慎重な面もちで廊下に足を踏み入れ、奥の方へ向かって歩き出す。

視線の先にはどこまで続くのか分からない闇があった。昼間なのに、夜の宿舎を歩いている気がしていた。

「こんなに、長いはずがないんだが。宿舎の大きさからして……。ん？ あれ？」

部屋番号の書かれたプレートから一瞬目を離したその時だった。5秒もしないうちにその桁が飛んだのだ。

「150号室……？ さつきまで15号室だったのに……」

辻崎は反転し、150号室の向かいの部屋、つまりは破門のいる149号室に目をやった。

不可思議な状況に頭が混乱していたものの、このことは後々先生

に聞こうと、辻崎は割り切って考えた。

「何はともあれ、着いたからいいが……」

中指の第二関節辺りでコンコン、と音を立てて中の様子を確認する。

「破門ー？ 起きてるかー？」

いくらノックをしても声をかけても、破門が返事をする気配はなかった。

「破門ー？」

辻崎は149号室のドアノブに手をかけ、右回りに回した。すると、案の定ドアが開き、ギギイという音がした。

辻崎が訝しげに中を覗くと。

「……やっぱり寝てんじゃねえか。ってか、この子は誰だ？」

大の字になって寝ている破門の隣で、これまた気持ち良さそうに眠っている金髪の少女が、辻崎の目に飛び込んだ。

その少女は紛れもなく千宮で、破門とは相反して小さく丸まっている。

なぜこんな状況なのかという点。

破門は千宮が寝ているのを見ているうちに、自分も眠たくなってしまったのだった。

「どんな状況だよ。これ」

二人そろって昼寝に興じているその様は、端から見れば兄妹のようだった。

辻崎は寝ている幼児を起こす保母さんのような気持ちで、二人に起きるよう声をかけた。

「起きろー」

「ん……？ んぁ、つじ、さき？」

「そつだよ。もう二時だぞ」

辻崎は破門の足を乗り越え、カーテンの揺れる方へ向かった。

「つたく、窓も開けつぱにして……。桜がこんなに入っちゃまってんじゃねえか……。つて、え？」

辻崎の目に飛び込む、窓の外から見える光景は、あまりにも不思議な、かつ奇妙なそれだった。

「つー!？」

辻崎は体を窓から乗りだし、今見える世界を凝視した。眼下に広がる、少し距離の置かれた地面。頭上の少し上を飛ぶカラス。下から吹き上げる風。

そつして辻崎は確信した。

「破門」

「ん?」

「お前はここに来るとき、階段上ったか？」

「いや、上ってねえけど」

「だよな。俺もだ」

「何。どうした」

辻崎は体をどかし、窓の外を披露するかのようにして破門に見せた。

「……一階じゃないみたいだ」

「……はっ!？」

半覚醒状態にあった破門は、窓から見える景色によって完全に起こされた。

破門は駆け足で近づき、窓から体を乗りだした。疑いの目で辺りを見渡すが、それは確かに現実のものだ。

「……意味わかんねえ」

不可解極まりないこの状況に、149号室の空間には静寂な空気が漂った。

\*\*\*

「む……」

「辻崎。飯冷めるぞ」

破門と辻崎と千宮の三人は、カルマ学校の近くにあるファミレスで昼食を囲んでいた。

辻崎は先の寮での摩訶不思議を調べるため、カルマ学園高等部の図書館から本を借り、テーブルの上に分厚いそれらを広げていた。

「歪曲結界にしては甘いし、現に俺らは閉じこめられていない……。術式も見当たらないし、そもそもテキストが感じられない……。仮に結界だとしても目的が……」

「辻崎？ 早く食べないと俺が食べちまうぞ」

「食べるな。何かの異能力かも……。そうしたら幻術系か……。しかしあそこまで規模が大きい上に複数名を術中に入れるなんて相当……」

「おーい！ 戻ってこーい！」

「うるせえ。もう少し詳しい本を借りてくるべきだったな……。古文書辺りも視野に入れるかな……」

「返事しながら独り言呟かないでくれ！」

破門はマグロが豪勢に乗ったどんぶりを置き、はあと溜息をついた。

辻崎は勉強が大好きなのだ。というより、知の探求心が他の人よりずば抜けている。

「魔術まで遡った方がいいか……。もしかしたらラジオンスペルの類やも……」

その知の欲望は、睡眠欲や食欲、酷い時には女欲よりも優先されることがある。

そのような性格上、優秀な成績をとるのは必然だと破門は思うが、ブツブツ独り言を呟くのは止めてほしいとも思っていた。

「完全に勉強モードだよ……」

「……」

破門はマグロ丼を軽く平らげ、ガラスコップに注がれていたソーダを一気に飲み干した。

「あ、そだ。千宮」

「……」

破門は向かいの勉強バカを一旦放置し、左隣の千宮に一瞥を加えた。

「第一寮ってことは、お前も0組なんだろう？ お前はどんな異能力なんだ？」

「……」

「せん、みや……？」

「……」

千宮は破門の方をチラリとも見ず、ミートソーススパゲッティの麺を一本一本チュルチュルと、吸うように食べていた。

「お、俺の異能力は、これだ！」

「……」

破門は、人のことを聞くには自分から、とても思ったのか、千宮の目の前に、自分の左手を力強く差し出した。

その左手には、多数の『紙』が貼り付けられている。肌色の部分など皆無。白一色だった。

「こいつが俺の異能力、リズボルト！」

一見、ボクサーなどがしているテーピングのように見える。しかし実際には五センチ四方の、大量の紙である。

「俺はこの紙を、操ることができる」

破門は左腕の袖を捲ると、紙は肘辺りまでを全て取り巻いていた。破門は千宮の前でブランデーのグラスを持っているかのように手がかざす。

「こんな風に」

破門の左腕から紙が一枚剥がれ、宙を浮き、手のひらの上で直立のまま静止した。

そしてその紙は、誰も触れていないにも関わらず、折り目がつき、曲がる。

「あつという間に、鶴の出来上がり！」

手のひらで踊った紙は、三秒と経たず鶴になった。破門がテキストを込めると、鶴は独りでに羽ばたき始める。

「紙を操る力、それがリスボルト！」

「ただの折り紙じゃね〜か」

「辻崎、お前は黙ってる！」

破門は立ち上がって辻崎を指さしながら叫んだ。そして、千宮の方を見るが。

「見てない！ 見るよ！ スパゲッティ食ってないで！」

「……………」

「くそおう……。あ、俺手品得意だぜ！？」

「……………」

「むう……。格ゲー強いぜ！？」

「……………」

「これ以上自慢できる情報は……………」

千宮の異能力、という情報を得るのに足るだけの情報を、破門は

考える。するとそこへ、小さな助け舟が出された。

「あんじゃん。ほら。病院送りにしたやつ」

辻崎は本のページをおくりながら、ステーキをつつきつつ、破門に話しかけた。どうも辻崎は勉強モードに入ると行儀が悪くなるらしかった。

「そうだよ！ 俺中等部の時に同級生を四人病院送りにしてやったんだ！ 謹慎処分十日！」

破門は両手をパーにして突き出し、十を表現する。それに対して千宮は少しだけ目を動かすという反応をした。

「俺を下の名前で呼ぶ奴はこういうことになるんだ……」

「愛ちゃん」

「辻崎コリアー！……」

「お、お客様。他のお客様の方もいらっしゃるので」

「っ……」

店員の弱々しい注意に、破門はスゴスゴと退く。テーブルの上に乘せた足を下ろし、飛び回る紙の鶴を着陸させた。

「で！ 千宮！ お前の異能力は！？」

「……」

「俺石頭だぜ!？」

「中身もな」

「辻崎、さつきからてめえ！」

「お、お客様……」

「……テレポート」

千宮が発した言葉に、一旦その場空気が硬直した。無論店員はこのシラケが何なのかはまったく理解できていない。

「て、てれ……?」

「テレポート!？」

辻崎は、辞書並に分厚くアルバム並に大きい本から目を離し、叫びながら千宮の方をガン見した。

「おい辻崎。テレ何かってなんだ？」

「テレポート! 知らないのかよ」

「テレポート? 初耳だけど」

「なあ千宮、本当にそうなのか!? お前の異能力は!」

「……ん」

千宮は麵を啜りながら小さく頷いた。

「辻崎。テレポートって？」

「テレポートつつうのは、瞬間移動だよ。自分を含め物体を、自由なところに空間移動させられる能力だ」

「え。すげえじゃん」

「そーだよ！ すごいんだよ千宮は！ そつそつ出会えないぞ、テレポーターなんて！」

「こんなチツコいのに……？」

破門は千宮を確かに見直し、敬服した。

しかし、最後の発言を千宮は聞き逃さなかった。千宮は辻崎の横に積まれた本に手をかける。

「あれ。急に陰りが、つてのはあっ……！」

辻崎が借りてきたぶ厚い本達は、破門の頭上にテレポートされ、重力に従い自由落下した。

辻崎はそれを見て一言。

「これがテレポート……。すごい」

破門は本が直撃した頭部を両手で覆った。

「いってえっ……。何すんだよ千宮……！」

「……石頭」

## 第二話 金城ウォール（後書き）

破門の異能力「リズボルト」は、イタリア語の「risvoltò」からとつてます。「折り返し」という意味です。「折り紙」と掛けてたりします。

第三話 日常オカレンス(前書き)

今回のタイトル難易度

### 第三話 日常オカーレンス

辻崎は、破門と千宮のいる149号室に赴いていた。というのも、明日が入学式であるのにも関わらず、破門に来るようにとメールされたからである。

「おーい。開けるぞ」

慣れというのは怖いもので、辻崎はもう廊下に並ぶ部屋番号が飛んでも気にしなくなっていた。

辻崎は目の前の扉を開ける。

「うおっ！ 破門が机に向かってるー！」

正確に言うとちゃぶ台だが、辻崎には破門が勉強をしている姿を見て心底驚いた。

その隣には教科書を片手に無言のまま座っている千宮。

「遅えぞ！ 辻崎！」

「お前が勉強とは、雪でも降るんじゃないか……？」

辻崎は畳に足を踏み入れ、ちゃぶ台を囲む座布団の上に座った。そこから見える窓からの景色にも見慣れていた。

「これって、春休みの課題じゃん」

「そーだよ！ 終わってないんだよ！」

「それで俺が呼び出されたってことか」

破門は猫背になりながら、とめどなくシャープペンシルを動かしている。どうやら今やっているのは術式の作成課題であるようだ。

「辻崎先生！　ここの術式分かりません！」

術式とは、簡単に言えばテキストを練り込んだ、円陣をかたどる線である。通常、物体に術式を描き、テキストを送ることで、その術式は込められた能力を発揮する。

「えーと、移動可能範囲50メートルの転移系術式を描き、履歴消去を付加させなさい、って基本中の基本じゃねーか」

「転移系は覚えにくいんだよ！」

術式は基本的にただの円だが、その周りに文字や線などを描き足すと、その術式的能力に付加がなされる。

例えば、物体などをレポートさせる『転移系術式』は、三重円の周りにちょうど八個の『転移系記号』を書き込むと完成である。

「ほら三重円描いて。転移系記号描いて。えっと？　50メートル範囲に設定する。ほら早く」

「うっせ！　まだ記号四つしか描いてねーよ！」

術式を発動させるにはテキストを必要とするが、術式的能力や規模によって使うテキスト量も変わってくる。

「辻崎。履歴消去って何？」

「術式を使った後に、その術式を消去することだよ。後の人に使われないために」

「で、何描けばいいの？」

「一番外側に、七つの四角形。等間隔な」

破門は描いた術式に『五十メートルの範囲内』を表す記号『0』を描き込むと、最外に七つの四角形を描き始めた。

「千宮は何やってんの？」

「……」

辻崎の素朴な質問に対して、千宮はまったく言葉を発しなかった。目も合わせてくれない。

その冷たい対応に対して辻崎は愛想笑いでその場をにごした。

「辻崎！ できた！」

「バカ、四角形は塗りつぶすんだよ」

「うへえ」

破門は鉛をそのプリントに落とした。七つの四角形が黒く染まると、破門のテキストに反応した術式は黄色く輝き始めた。

「できた！」

「教科書見れば楽勝だろ、こんなもん」

「俺攻撃系の術式しか見ねーもん」

「だから駄目なんだよ……」

破門はテキストを送るのを止めると、術式の輝きは消え、ただの円形の線となった。

「よし！ 次！」

「あ、そうだ」

辻崎はふと思い出したように呟いた。

「千宮、なんでお前は家に帰ってないんだ？」

「……」

前々から聞くことは思っていたものの、何かと忘れてしまっていた辻崎は、今聞くことにした。

「……」

「おい辻崎、千宮に質問するときはず自分から、だぞ」

「何だよその決まり……まあいいけど。……俺らは家に帰らないんじゃないくて、家がないんだ」

「……」

畏まった表情で、辻崎は淡々と言葉を並べた。あまり口外すべきことでもないから、手短かに話した。

「俺ら二人は昔、両親に先立たれてな。孤児院で育ったけど、その孤児院も潰れちゃって。行きどころがないところ、ここに入学したってわけだ」

「……」

「お前もそんな感じか？」

「……」

千宮は静かに頷いた。自分達とまったく同じというわけではないのだろうが、少なからず不幸な目に遭っているのは確かだった。

「んな話よか、今はこのプリントだよ！」

「……はいはい」

少々暗い雰囲気になっていたが、辻崎は破門のある意味必死な顔を見て少しだけ安心した。それに加え、千宮が微かに心を開いてくれたようで嬉しかった。

破門が指さした先にあるプリントを、辻崎はのぞき込んだ。

「古文か」

「そお。カルマとかいう奴の日記。一番最初にピアノってあるけど、んな時代にピアノなんてあったのかよ」

「カルマは偉大な人物だ。奴とか言うな。それと、五百年前にもピアノはあつたよ」

「ふーん。ピアノの音が聞こえた、とか意味分からんし。だから何、って感じだけど」

「色々解釈はあるが、一説には彼の異能力が発現したときに彼が聞いたのではないか、というのがあるな」

「発現つて、途中から異能力ができたわけ？ 生まれつきじゃねえのか？」

辻崎は軽くため息をつき、何も知らないんだな、と続けた。

「お前と違って、生まれつき異能力者じゃない奴もいるんだよ。カルマ然りで」

「へえ」

破門は納得すると、再び古文のプリントに取りかかった。するとそこへ千宮が近づき、破門の肩を軽く二回叩いた。

「ん？ どした」

「……時間」

「時間？ 何の……ああーっ！！ 忘れてたっ！！」

破門の顔色は一気に青くなり、すぐに赤へと変貌した。そして即

座に立ち上がり、キッチンへ駆け足で向かった。キッチンはちょうどここからでは見えない位置にある。

「危ねーっ!!」

「ど、どうした破門!？」

「辻崎が変な豆知識挟むからだぞ!!」

「だからどうしたって!？」

「俺のカップラーメンが堅麺じゃなくなっちゃまったじゃねえか!!」

しばしの沈黙が流れる。想像以上に小規模で、小事であつたからだ。

「……そんなことかよっ!!」

「ちくしょう……堅麺が良かったっ……」

破門は悔しがりながらもズズツと、麺を口に運んだ。

\*\*\*

第一寮の前で辻崎は腕時計を見た。足先を一定のリズムで上下運動させ、待ち時間の退屈を紛らわしている。するとそこへ破門が現れた。

「わりい。遅れた」

「もう慣れたよ」

わりい。遅れた。この言葉を辻崎は耳にタコができるほど聞かされてる。これは破門の寝坊癖が疑いような原因だが、辻崎も辻崎で先読みをし、常に集合時間を一時間ほど早く設定しているのだった。

「入学式の日くらい早く起きてもいいと思うが……」

「あ？ 何か言ったか」

「別に。千宮は？」

「……」

破門は体を横にずらし、辻崎に背後の千宮の姿を見せた。千宮は破門のブレザーの端を軽く摘み、さながら母の後ろに隠れるシャイな女の子のようだ。

「なんつーか、破門。お前すごく懐かれてる？」

「かもしない」

破門達はそのままカルマ高等部の体育館へ向かった。

本日は入学式。

見慣れない者も、見慣れた者もいる。

「なあ辻崎。俺、制服のサイズ合っていない気がすんだよね」

「ズボンの位置が低いからだ」

「そーか？」

男子は新しい黒色のブレザーとパンツに身を包み、黒いネクタイをしている。女子も同様に黒のブレザーに黒のスカートとネクタイ。白のラインなど、ある程度の装飾はなされているものの、全体的に黒色が多いのは伝統が故、であった。

「ネクタイもちゃんと締める。腕もまくるな」

「細けえーな」

「ほらお前の左腕みんな見てるぞ」

「見たけりゃ見りゃいーじゃん」

三人は敷地内にあるコンクリートの道を歩き、高等部の体育館まで一直線。道の端には桜が咲き、行く手を彩っている。空は雲一つなく、そよそよと優しく吹く風は、カルマ学校に溢れる自然界の匂いを人々に届けていた。

カルマ魔術学園は一般的な大学並の設備と広さを誇っている。あまりに広いため移動教室などで校内バスが出るほどだ。

「遠いわあ。なあ千宮、レポートで体育館まで飛べねーの？」

「……」

破門は真後ろで裾を引っ張る千宮に話しかけるも、返事は帰って

こなかった。

「おい。ところで……」

「何だよ」

辻崎が破門に体を密着させ、何やら小さな声でヒソヒソと話し始めた。右手を口元に持ってきて、秘密の会話でもするのかのように。

「お前、この一週間どうだった？」

「は？」

「だから！ 千宮との生活だよ！ 色々弊害とかあったんじゃないか？」

きっと破門と千宮の現状を知ったら誰もが気にかけるところである。何せ、男の子と女の子の共同生活なのだから。

「特にはねえかな。あるとしたら会話がほとんどないくらいか」

「え？ 風呂とか、着替えとか、寝るときとか、色々ありそうだが」

「言うておくけど、俺らの寮に個室の風呂なんてないから、ドッキリなことは何も無いぞ」

「えっ！？ 無いの！？ 俺の部屋はユニットバスだったけど」

「……何だよこの差は」

確かに、見るからにボロい破門達の寮は、清楚かつ重厚なイメージのカルマ学園とは不釣り合いだ。ここまでくると一種のイジメにしか思えない。

「寝るときはいつも千宮が窓際。俺が扉側で寝てる」

「……個室とか無いのか？ まさかあの居間だけ？」

「その通りだが!？」

破門は顔をしかめて怒りを込めて叫んだ。周りにいた他の生徒はその声を聞いて破門達から少しだけ引き気味に距離をとった。

辻崎も急な破門の声に少し驚きながらも質問を続けた。

「普段は何しているんだ？」

「寝てるか、ゲームしてるか、くらいだな。あいつ格ゲー超つえーの」

「会話は？」

「ほとんどない」

これが男女の同居かと疑いたくなるほど、二人の生活には沈黙が溢れていた。しかしそんなことよりも破門は疑問に思うことがあった。

「ついまでもそんなんで俺が千宮と同じ部屋なんだよ。意味わかんねえ」

「先生に聞いてみたら？」

「……あっ、その手があったか」

辻崎は、はあとため息を吐きながら、破門とその後ろにピツタリつく千宮に目をやった。千宮は中を舞う蝶を眺めていた。

辻崎はこの先の二人に不安を隠せずに行った。

（大丈夫なのか。この二人……）

### 第三話 日常オカレンス（後書き）

テキストはMPに近いです。

一応原理的なことは決めています。まあその辺は後々。

第四話 新進エンジニア（前書き）

今回のタイトル難易度

#### 第四話 新進エナジー

周り一面に広がるエメラルドグリーンの芝生。所々に生えている桜の木や、芝生を刈ってできたコンクリートの道、それに沿って等間隔に並ぶ細長い街灯。道から覗ける景色は人工物の建物と天然物の自然が見事に重なって、相乗効果的に人の目を輝かせる。

これらの光景を目にした新入生達は感嘆の声を上げ、ここに入学して良かったと心の中で小さく呟く。

「やっぱ見ねえ顔が多いな」

「確かに。中等部まではここだったけど、って奴が今年は多かったからな」

破門と辻崎の、それぞれの黒髪と黒眼はここでは少々目立つ。なぜなら、基本的に黒髪の遺伝子を持つ能力者及び無能力者や異能力者は案外少ないからだ。

「なあ千宮。この中の何人が異能力者だろうな」

破門が後ろを振り向き、千宮に話しかけた。

「……」

やはりと言ったほうがいいのか、言葉のキャッチボールにおける返球は無かった。

出会った頃よりは幾分か打ち解けた気もするが、破門は胃に透明な板がつっかかったような面もちで、破門は再び前を見直す。

気づけば体育館が目の前にあり、中等部のそれよりも遙かに大き

かった。

入学式会場とデカデカと掲げられた看板を通り過ぎ、教員達が並んで立っているところへ近づいた。

「新生は名簿に丸つけてから入場してください」

\*\*\* \*\*

「新生、起立！」

ザツと足を床に踏み込む音がして、カルマ高等部の新生が一斉に立ち上がった。

ただ一人だけを除いて。

「んんっ！ 新生、起立！」

司会がもう一度、その一人のために声を発する。しかし、その者はピクリとも動かない。

「新生、起立！！ …… ああもう、隣の人、起こしてやって」

グッスリと眠って独り座っているその生徒の肩に、隣に立っている生徒の手がかかった。

「あ、あの」

「……ええ？ ん？ あ、ああ」

起こされたその生徒の左手には紙が満遍なく貼り付けられていて、それがより一層彼を目立たせていた。

「はあ……何やってんだよ破門……」

遠くで見ていた辻崎は呆れながら額に手を当て、ため息をついた。普通なら起こすのは辻崎の役なのだが、能力者と異能力者の席を離れているため、その役は他の異能力者に委託されていた。

「ふわあ〜……ふう」

破門は大衆の目を無視して大きく欠伸あくびしながら立ち上がった。破門は、横にいるのはどうせ辻崎だと思って横を見ると、そこにいるのは何やらダルンダルンの制服を着た女子生徒。本当にダルンダルンなのだ。

「……何だお前」

「えっ？ あ、あの」

なぜこの女子生徒だけ異常なまでにサイズの合っていない、ポンチヨのような仕様の制服を着ているのか不思議だったが、おそらくそれは異能力者故であろう。

破門はそう割り切って考えるも、そもそもなぜ自分が肩を叩かれたのかよく分かっていなかった。寝ぼけているのも含めて。

「入学式、で、ですか、ら……起きてない、と」

「え？ あ、ああ。そうか。入学式か……」

「んんっ！！」

普通に私語を喋っているいる破門に対して、司会の教員は咳に黙りなさい、の意を込めた。

「え、では、校長先生の話。油小路校長あぶらごうじょうし、お願いします」

「はあいつ」

異常なまでに高い声がした。校長と呼ばれて、妙に甲高い声の少女が壇上に行く短い階段を上る。

当然、会場はどよめきだす。

何だあれは？ 女の子？ あれが校長？ ほんとに？

「あれ……？ どっかで」

破門は、半覚醒ながらも目を凝らして壇上上がった少女を見つめた。

見覚えがある。どこだったか、どういう状況だったか。今一分からないが、確かに会ったことがある気がする。

「え、校長の油小路ピンクです」

「……あーっ！！ 思い出したぞっ！！」

ザワザワと小さく騒いでいた会場が、一気に静まり返る。

さっき寝てた奴が今度は怒鳴った。破門の周りの人間はそう思った。

「お前っ！！ 確かあん時ぶつかった……！！」

「げっ。高等部だったか……」

ピンクと名乗る校長は今度は低い声で呟いた。

間違いない。彼女は、中等部の寮を出た初日に曲がり角でぶつかった少女。黒髪の、可憐で優しげな瞳を持つ美少女。

それが今は何と。

校長と名乗っているのだ。

「校長かよっ！！ うそだろっ！！」

「え、え〜？ 何のことお？ あ、あたし分からな〜い」

「いやいや、お前一週間くらい前に会っただろっ！」

辻崎も気づいていた。彼女が一度出会った少女であることを。ただ、破門のようにオーバーリアクションはしなかった。できるはずもなかった。

校長に対して不思議なくらいに失礼な口を聞く無神経な破門に、辻崎はもう呆れ返り、立ち眩みがするほどだった。

破門が叫び、問いつめる中、大人の女性の声がそこに割り込んだ。

「校長」

「……なにい？」

「校長」

「……な、なにかなあ」

司会のマイクを奪い取り、緋色の髪をした女教員が校長に語りかけた。声色でも分かるほど、彼女は怒気に溢れている。

「入学式でのドッキリは認めますが、それ以外でのメタモルフォーゼは禁止のほうです」

「……え、ええ〜そうだったけえ」

二人の会話を、破門含め新入生が聞き入った。なぜ入学初日で校長と思われる者が説教されているのだろう、と疑問に思いながら。

「校長」

「……はい」

「校長」

「すみ、ません」

気まずそうな顔をした校長はひとまず謝った。そして、人差し指と中指だけを立てた右手を、自身の顔の真正面に置いた。

すると、端麗な少女の顔に亀裂が入り、そのひびは青白く光りだす。そして亀裂は徐々に増え、ブルーサファイア色の光がその全身体を覆ったところ。

「え〜、校長の油小路 吟斗です」

徐々に光が消え、そこでは少女も消えていた。代わりに、浴衣姿で白髪のお爺さんが立っていた。そしてその老人が吟斗とという名の校長だと。

吟斗はブスツと明らかにふてくされていた。

「はあ……まさかこんなにも早く解くことになるとは」

「校長」

「はい」

「……頼みますよ」

緋色の髪を持つ女教員は、捨て台詞を残し司会にマイクを返した。吟斗はそれを確認すると、目つきを変えて破門を睨んだ。

「おい。その左腕テーピング小僧」

「あ？」

吟斗は壇上の上から破門を見下ろし、マイク片手に文句を言い始めたのだ。

「お前のせいでドッキリ失敗じゃあないか」

「知るかよ」

破門は吟斗の熱視線をそらしながら言った。

「くそう出会い頭はワシの顔に見とれていたくせに」

「はあ！？ 見とれてねーしー！」

吟斗は、生え際が額なのか頭頂なのか怪しい髪を撫で、その白いツツツ頭をさらに尖らせた。そして、しわの入った顔に殊更しわを寄せ、口をすばめて破門に文句を続ける。

「つーか入学式でいきなり寝てんじゃないのう！ ぶつかつた時も眠そうな顔してやがって！ ねむり男か！ ねむ男おか！」

「てめえさっきうつせーんだよ！ そつちこそ何だ、ピンクって！ ピンクじゃなくてお前シルバーじゃねえか！」

破門は、吟斗と女教員の会話に出てきた『メタモルフオーゼ』が、何であるか知らなかったが、変身みたいな能力であるうことは分かっていた。

破門は吟斗に指を指しながら暴言を吐いた。

「このロリコン変態野郎が！」

しかし、吟斗は冷静に。

「いや、ワシは人妻萌えじゃ」

「……いや知らねーよ！ー！」

破門がいつもより高い声を出した、その時だった。緋色の声が聞こえたのは。

「校長」

「……はい」

「校長」

「……すみ、ません」

「あとで職員室に来なさい。その生徒も一緒に」

マイクの、ボコンという音がした。女教員がキレ気味に司会へマイクを投げて返却したからだ。

「お、俺もかよ！」

「ざまーみる！ アリアちゃんの説教はすこ」

「校長」

「……すみません」

\*\*\* \*\* \*

「失礼しました」

「くそっ！ なんで俺まで……」

吟斗はヒリヒリと痛む、赤い頬をさすりながら歩いた。その隣には如何にも不機嫌な破門がある。

二人はカルマ高等部の廊下を共に歩いていた。廊下の床を縦に切る一本の白線を互いの間に置いて。

「いいじゃないか。お前は叩はたかれなかつたんだから」

「いや、普通の先生が校長にビンタってどうなのよ」

アリアという女教員の説教中、破門と吟斗がまたしても口喧嘩を始めたところ、アリアはまったく躊躇なく吟斗の頬を右手で思い切りはたいたのだ。

それからは二人ともとても大人しくなった。

「つてか、あんた本当に校長だつたんだな」

「ああ、そうじゃ。校長だ。校長。校長のはず、なのに……」

普通の教員の尻にしかれる校長なんてこの世にいるのだろうか。

破門は哀愁漂う吟斗の横顔を、ただ見ることしかできなかった。

吟斗は自分で自分の腰を叩き、ふうと息を吐いた。そこには多分に疲労がこめられていることだろう。

「お前さん、名前は？」

「俺？ 破門」

「下の名は？」

「教えるかよ」

「な、なんでじゃ」

校長が下の名前を聞いているんだ。生徒が答えない筈がない。ここまで校長を舐めきつた輩は破門が初めてだった。最も伝統のある

学校の校長ともなればいわんや、のはずであるなのに。

「下の名前、好きじゃねえんだ」

「まあ、名簿でやぶと、と調べれば一発で分かるからいいんじゃないが」

「あ、しまった」

(阿呆かこいつ)

「そんなことより、さっさとクラスに行かんか」

「0組ってどこよ」

「0組!? お前が!?!」

そこまで驚かなくてもいいじゃないかと破門は心の中で思ったが、おそらく吟斗の心情は破門の、吟斗が校長という事実を知ったときの驚きに似ているだろうとも思った。

「そーだよ。場所どこだよ」

「0組はその階段を上って、すぐ右じゃ」

「どうも」

破門はいかにもダルそうに歩いた。ツンツン頭をクシヤクシヤといじり、ネクタイを少し緩めた後、少しだけ小走りで目の前の階段へと向かった。

一段飛ばしで駆け上がった。少し上った辺りで向きを反転させ再

びり始める。

「破門、か」

吟斗は腰を押さえながらそう呟いた。

\*\*\* \*\*

破門は扉の前で深呼吸した。第一印象が大事。遅ればせながら参上するのはなかなか目立つ。面倒な学校生活を送らないためにも、あまり気をてらうようなことは避けたい。

unavoidable ことはしょうがないけれど。どうしても驚いたときは叫んでしまっし、校長に暴言は吐くけれど。

「ふう……よしっ！」

破門は、勢いよく開けるでもなく静かに音をたてずに開けるでもなく、至って普通に目の前の扉を横に流す。

「遅れま」

ポフッ、という音。

なんとベタな。今でもやる奴がいるとは。しかしながら引っかかる奴もいるとは。

破門の髪に白い粉末がふりかかる。刹那、その粉末を発している物体が床に落ち、さらに破門のスポンにまでその被害を広げた。

「ぷっ！ 破門だっせーっ！ んなもん引つかかるんかいな！」

「てんめえ討窪……っ！」

扉が少しだけ開いているなとは思った。思ったけれども、なぜか回避できなかった。破門は黒板消しという名の白い粉末爆弾を拾い上げ。

「おらぁっ！」

「へぶっ！」

討窪めがけてブン投げた。黒板消しは討窪のちょうど顎に当たり、討窪はその場に倒れ込み、椅子がガタガタ倒れる音がした。

「何すんねやこらぁ！」

「ふんっ！」

破門は白に染まった髪を払いながら、0組の教室内を見渡した。教室の中は中等部のときと違って、黒板や教壇のあるところを底とした播り鉢状だった。階段になっており、その小さな階ごとに机が金具で設置、固定されている。

ただ、広い教室の割に生徒が少ない。

「あら、あなたが破門君？」

「え、ああ。はい」

振り向いて驚いた。教壇のところにいるから担任だろう。声に似合わないズンとした佇まい。優しい顔だが首が太い。

一言で言えばオカマ、であるようだ。

「みんなもう自己紹介終わっててえ、あとは君だけなの」

「はあ、マジすか」

「だからあ、今ここで自己紹介をお願いしましょうかしら」

「わかりまどわあっ!」

後ろからの飛来物に反応できなかった。破門は後頭部を押さえながら振り向いた。

「討窪お〜!!」

「へっ! お返しやで!」

金髪で前髪までかき上げてツンツン頭。カンサイ言葉に不良のよ  
うな体たらく。

討窪 うちくぼ 大和 やまと。それが彼の名である。破門とは中等部のときからの縁で、何かと破門につっかかってくる。おそらく黒板消しをセツトしたのも彼だろう。というか彼だ。

「討窪君? あまり騒いじゃいけませんよう」

「いやあ先生。黒板消しを元の位置に戻そうとしたら、変なのがいますしてん」

担任の先生はいかにも優しげだが、それは顔と声だけで、ムキムキの体はその本性を隠しているように破門には見えた。

「あたしの名前はマックス＝トロールよ。よろしくねい」

筋肉質かつ妙に生傷の多い図太い腕が教壇越しで、破門に差し出された。爪には透明マニキュアが塗ってあって正直ミスマッチだ。

破門はその男気溢れる手と握手した。

そして、破門はその手を離して同級生達の座る方へ向きなおした。

「えっと、破門、です。よろしく」

「愛ちゃーん」

「討窪は黙れっ！」

#### 第四話 新進エナジー（後書き）

最近受験勉強が忙しいです。模試もあるし、定期テストもあるし、部活は大会近いし、と、色々疲れますが、明日も張り切っていくたいです！

授業中はフリスクと目薬が必需品です。

第五話 スカフルの雨（前書き）

亀より遅い鈍足更新。

読んでくれたあなたは神様です。

今回のタイトル難易度

## 第五話 スカフルの雨

「下の名前はあ？」

後ろから可愛らしい声が聞こえた。顔さえ見ていなければ破門はその声に妙な寒気を付加せずにすんだのであろう。

無駄に期待のような、怒気のような、暗殺を企てる忍者のような声が、破門の背筋を不気味に浚っていく。

「愛……です」

「愛ちゃん」

「だから討窪は黙れっ！」

ここからは新たに同級生となる者達がよく見えた。

討窪の隣のつり目で茶髪の女子も、確か中等部で同じだったはずだ。千宮は一番奥の窓際にある座席に座っている。

(いろいろな奴がいるな)

どうやって教室に入れたの、つてくらいに巨大な図体を持つ者。

フードを深々と被っていて鼻と口しか顔が伺えない者。

耳を完全に覆い隠すヘッドホンをつけて非常にノリノリな者。

少し猫背気味の、ポンチョのような制服の者。彼女こそ入学式のとときに破門を眠りから覚ました生徒だ。

自己紹介なんて興味ないと言わんばかりの、窓の外を眺める者。つておいこら、そこ。お菓子を食っているんじゃない。

(やっぱり少ないか)

数えたところ、生徒は全員で20名ほどで、中等部のときより半分近く少なかった。

「じゃあ破門君。適当なところに座ってえ」

「あ、うっす」

破門は段差の低い階段を上り、奥へ進み千宮の隣につけた。机は長机で、隣の者と机を共有する形になっている。

「よっ。千宮」

「……」

椅子を引きながら手を軽く上げ、左隣の千宮に話しかける。千宮は無言のまま、睨みを利かせている常の目で破門を確認。金色の髪が太陽光でより一層輝いていた。

「マジ説教ダルかったあ」

「そっ」

「あの校長マジで何なんだよ」

破門が愚痴をこぼしていると、何やら視線を感じた。その視線の方向に目をやると、その先には入学式で隣にいた制服ポンチヨの女子がいた。

なんだと確認すると、次々に他の視線を感じる。

考えてみれば当然のことだ。入学式の時にあれだけ目立っただのだから。

あいつが叫んでた奴かと。校長に暴言を吐いてた奴かと。

「は〜い、みんな集まったわねえ」

担任のマックスが両の手の平を合わせ、ニッコリと笑いながら生徒全員に声が届くようにした。寝ている者は目を開き、お菓子を食らう者はその手を止め、絵を描いている者は筆の動きを止める。

「とりあえず、入学おめでとうございまあすっ」

軽く腰を曲げ、少し屈みながら言った。無論、彼の胸元に集まるのはプリンのような脂肪ではなく岩石のような筋肉の塊で、今にもTシャツが張り裂けそうだった。

「入学試験は無いけど、ここの志望って結構反対されたんじゃないかしらあ？ 何せえ、行事でたまに人が死ぬものね。まあここ十年はそんなこと起きてないしい、我々教員陣も全力で生徒の身を守るからあ、その辺は安心してねい」

(だったら黒板消しからも守ってくれ……)

『カルマの行事は命がけ』そんな世間一般から払拭されない悪評なんかより、破門は、とにもかくにも黒板消しのセッティングを討窪から止めさせなかったことに関して心の中で苦言を呈した。

「カルマがこの学校を築いてもう五百年。結構年数はいつてる物も多いわ。器物損壊とかは気をつけてねい。0組だから特に」

やはり異能力者だけを集めただけあって問題も多いのだろう。変に異能力を行使すると、面倒なことが度々起こる。

「あ、そうだ。クラスの人数が少ないって思った人も多いんじゃない？ 実はね、0組ってクラスメートが徐々に増えるのよ」

マックスは真後ろにある教壇に寄りかかり、肘をかけ、少しカジユアルに話し始めた。

「例年、異能力者は一クラスでえ、学年が上がってもこのクラスは変わらない。でも、たまにいるのよう。他クラスで異能力が発現する生徒が。学校側が正式に異能力者と認めたらあ、この0組に編入することになってるの。一年に大体二、三人は増えると思うわ」

「じゃあ転校生も然りでっか」

「その通りよう」

討窪が手を挙げて質問し、マックスがそれに笑顔で受け答えた。

「あ、話は変わるけどお、この中で寮の人は？」

破門は自分のことだと思い、小さく手を挙げた。辺りを見れば、クラスの半数以上が寮に入る者で驚いた。ちなみに千宮は手を挙げるのが面倒なので挙げていない。

「多分う、寮で不可思議なことが色々あるけどお、気にしないでね」

「あー！ あったあつた！」

破門が声を大にして発言。もう慣れてしまったのか、はたまた飽きてしまったのか、他の生徒の大半は破門の方に注目しなくなった。

「あれだろ？ 何かいきなり二階になつてるとか、部屋番号が飛ぶとか」

「よく知ってるわねえ。原因とか知ってるう？」

「……あれ？ 何だっけ。この間辻崎が言つてたような・・・？」

「あれはねえ、異能力者達のテキストが複雑に絡み合つてえ、奇妙なテキスト周波を形成してるらしいのお」

大多数の生徒がマックスの言い分を理解したが、破門だけは今一理解し倦ねていた。

「それでえ、摩訶不思議な現象が起こるといふわけ」

テキスト周波を知らない破門にとっては何のこつちやであつた。無能力者を除いた個々人には、それぞれテキスト周波の周期が決まっている。異能力者はそのテキストの周期が不規則かつ変則的なのだ。

稀にその一定性のない周期を持つ波が干渉し合つと、テキストを用いない超常現象が起こつたりするといふ。

「まあ要するにね、アタシが言いたいのはあ」

マックスは寄りかかっていた教壇から離れ、たくま遅しさや睦まじさを感じさせる、凜々しい顔つきで、その言葉を約20名の生徒達に放つ。

「異能力者が集まると、『何か』が起こるのよ」

急に改まったような低い声が、教室に響く。しばしの沈黙を抜け、マックスは一息をついてから話を再開した。

「まっ、ともかくこの三年間よろしくねっ！」

マックスは一切曇りの無い笑顔を生徒達に振りまき、そのゴツッ  
い二の腕を高々と挙げた。

「はいつ、じゃあ今日のところはこれで解散ねい。学級委員とか係  
諸々は明日決めるわよ。あ、それと帰りにこの科目選択の紙を取っ  
て行ってねい」

マックスの手には科目を選択するための紙の束があった。マック  
スはそれを教壇の上に置くと、何やら囁きながらそそくさと教室を  
出ていってしまった。

「は、ん、が、く、セール」 今日のはあは、ん、が、く、セール  
」

不気味なマックスのスキップは、ドシンドシンと地を揺らし、破  
門の目に烙印の如く焼き付けられた。

「あれが担任で……」

ある意味畏怖を感じるマックスに、破門はそう呟いた。

\*\*\* \*\*

太陽がサンサンと輝いている。

カルマ魔術専門学校に繁茂する芝生はその光を吸収し、今日も伸びやかにその体を直立させていた。

破門はその芝生群の上を通り過ぎ、コンクリートで固められている場に立った。

「はあ。少し早すぎだな」

破門は近くに噴水を発見し、その周りを取り囲む低い塀に腰掛けた。破門の手には科目選択の紙と、未開封のカップラーメンがあった。

(千宮はいきなりどっか消えちまうし、辻崎のクラスはまだ終わってないし……おやつがてらに食っちゃまうか)

学食で買ってきたカップラーメンの蓋を開ける。そして、スープの粉末とかやくをその中に入れ、満遍なくなるよう少しだけ振った。あとは、お湯のみだ。

破門は飲み干して空になったペットボトルに、噴水周りの水を汲んだ。

(少し汚えけど、平気だろ。あとは、沸かすだけだな)

破門はブレザーの内ポケットに手を入れて、ある物を取り出す。

それは、『加熱用ツール』と呼ばれる球形の物体。微量のテキストを送ることで作動する小型機器で、テキストに反応してその球体自体に熱が生じ、言うなれば速攻性の焼き石だ。

破門は一杯いっぱいまで水が入ったペットボトルに、テキストを送った加熱用ツールをポチャンと落とす。

「ふう……暇だなあ」

破門は湯が沸くまでの間、折り紙でもして時間を潰そうと考えた。破門の左腕から紙が一枚剥がれ、素早く手の上で『熊』が作り出された。続いて『蛙』、『兔』、『金魚』。

破門は、紙で折れない物は無いと自負している。学問を覚える才能は無いが、折り紙の手順を覚える才はあるらしかった。

「おっと、いけね。科目選択の紙だった」

破門はいつの間にか左腕に科目選択の紙を取り込み、『薔薇』にってしまった。

「折り目やばいなこりゃ……」

「へーい、やーぶとくーん」

「うげっ、討窪」

飛び交う紙達の向こう側に、討窪の姿を発見。

すると、破門を取り囲んでいた紙の生き物達が一気に気を無くし、地面に落下したり水の中に不時着したりした。

「今日で会ったが百年目！ 邪魔者はおらへん。勝負や！」

「またかよ……めんどくせーな。今俺はおやつタイムなんだよ」

「そーやって逃げんかいな。へっぴり腰やのう」

「なんでそうなるんだ……」

討窪は玄関から延びる短い階段を下り、破門のいる広場に足を踏み入れた。

中等部の頃からこのように討窪は破門に、何かと勝負を仕掛けてきている。

きっかけは本当に仕様もないことで、当時討窪の好きな女の子が破門に告白した。たったこれだけ。このこと一つで破門は三年近くも討窪に付きまとわれているのだ。

討窪には重大なことで、破門を恨む気持ちも分からなくもないが、破門にとっては迷惑極まりない。

「えーから勝負やつ！ 今度こそ決着<sup>けり</sup>つけたる！」

「うるせーなー。俺はこれからカップ麺食うの。邪魔すんな」

「なんやねんマジこらハゲこら。逃げんなや。入学初っ端から金髪のちっこいのにナンパしよって」

もしや自己紹介の後に千宮にかけた一言のことだろうか、と破門は思った。

「は？ 千宮は関係ねーだろ。ってかナンパじゃねえ！ 元々知り合いだ！」

「どーでしょーかねー？ お前もしやロリコン？」

「てめえ、人の話聞けよ！」

俺はロリコンでもないし、そもそもナンパなんてしてねえ。  
虫酸が走った。まだ、それだけ。

「ちゅーか、折り紙とか女の子かいな。女々しいことしよって」

「……………折り紙舐めんなコラ」

折り紙は最高に楽しい芸術活動だ。何も知らない奴が語ってんじやねえよ。

血管に血がいつもより多く流れた。ただ、それだけ。

「自分の名前。女の子らしくてお似合いやで。喧嘩から逃げるへっぴり腰においてもな」

「討窪てめえ……………さっきから関係のないことをベラベラと……………」

腹の虫がおさまらない。もう、そこまで。

「なあ?」

「……………」

破門は嫌な予感がした。負の感情に満たされている心に、あのワードが入り込むかもしれないと危惧したからだ。

そして案の定なことに、次の一言が、破門の堪忍袋の尾を太刀筋見事に斬り裂いた。

「愛ちゃん?」

「この……やるお……」

破門はペットボトルから熱々の湯を、カップラーメンの中に注いだ。

丁寧に蓋を閉じ、その上に箸を置く。

「……俺は」

「あん？」

「硬麺が好きなんでな」

ネクタイを緩め、腕をまくり、息を吸って。そして、吐いた。

破門は自身で自身の拳を、バシッと勢いよく受け止め、頭に血の管を迸らせながら血眼になって言う。

「二分で片付けてやる……!!」

「へっ！ そーこーへんとなあ！」

破門は討窪の口車に乗っかるところか、討窪に代わってその車を運転する勢いだった。

第五話 スカフルの雨（後書き）

マックスの喋り方うっぜえ。  
書いてて思いました。

## 第六話 骨と身ブレイカー（前書き）

少々長いです。張り切りすぎました。

タイトルは、「ホネトミブレイカー」  
響きはいいと思うんだ。

今回のタイトル難易度

## 第六話 骨と身ブレイカー

春と言えども、まだまだ寒さが残っている。ヒューと吹く風は、ワイシャツの内部へ侵入すると体の体温を奪い、破門と討窪の体を少しだけ震わせる。

討窪の、人工染料による金髪と、耳たぶにぶら下がる銀色のピアスが太陽光によって輝いた。

「討窪。また病院送りにしてやるよ」

「はっ！ そう何度も頭突き喰らうかいな」

少しだけ口元を引き上げて対峙する。間合いは十分。互いの体勢も万全。

「いくでえ！」

討窪は右手の中指と人差し指を立て、印を作った。これこそ、テキストを行使する合図ともいえるのだ。

「高校からは異能力者の規制が緩なったからな。本気でいけるって、もんやで！」

討窪は右手で銃を表現した。そしてその銃口を破門に向ける。

刹那、その人差し指に黒い、ちょうどピンポン玉大の球体が現れた。

はっ！ という討窪の声とともに、その黒球は勢いよく破門へと一直線に向かっていく。

(確か、あいつの異能力は……)

マグネイド。

それが討窪の異能力。

討窪の作る黒球に当たった物体は、討窪の元に引き寄せる。そんな能力だ。

(中等部るとき、知らずに当たって、ちょー引きずられたっけか)

破門は単細胞なりの脳で、昔の経験を思い出した。

マグネイドの長所。マグネイドは発動者がテキストを絶たない限り、半永久的に引き寄せることができる。

そして、短所。

(アイツが打てるのは、五分に一発!)

「よっ!」

破門は右横に軽く飛び、黒球を避ける。ただの一直線攻撃。対してスピードもない。

これで、五分は討窪は無能力者同然。と、思ったその時。

「なっ!?!」

一発目に隠れた二発目が、避けた破門に向かっていった。

確かに今思えば、五分に一発など三ヶ月も前のことだ。成長していても何ら不思議ではない。

「避けられるかいなっ!」

「くっ！」

破門は右横へ何とかもつワンステップ。体をほぼ地面と平行にし、何とか避けられたが倒れることは必至だった。

避けることは避けられた。しかし、そんな少々の安堵を覚えたのも束の間。

「なっ！？ 三発目！？」

「ははっ！」

まさかの三発目。討窪は、黒球が破門に当たることを確信した。倒れ気味の破門。迫る黒球。不可避のように思えた。が。

「舐めんなっ！」

「おっ！」

破門は突差に両手を地につけ、大きく両足をふって側転をした。それはまことしなやかで、着地まで綺麗に流れるような動きだった。破門はそして、華麗に着地を決める。

「やりおるな。でも！」

「う、嘘だろ！」

ここにきて四発目。中等部の時は一発が限界であった討窪もそれなりに腕を上げていたのだ。

ほぼ破門の着地と同時に、黒球は破門の鼻に直撃し、パンツと音

を立てて破裂した。

「いててててっ！！」

破門の鼻が誰かに引つ張られるように伸び、それを先頭に討窪の方に体ごと引き寄せられる。足など、浮いてしまっているのだ。

「ほーれ、いっくでえ！」

破門と討窪の間はあつと言つ間に詰められ、もう破門の目の前には右腕を構えた討窪がいた。

「や、やば、ふじあっ！！」

破門の顔に見事な右リアットが決まる。その時点でマグネイドの効力は消え、破門は討窪のすぐ横に仰向けで打ちつけられた。コンクリートの地面が、破門の痛みを大きくさせる。

「いってえっ！」

「へっ！ そんなもんかいな！」

「……ちっ！ まだまだあ！」

破門は体を少し起こして、左足を討窪の足めがけて振るい、足払いを狙う。しかし討窪はそれを読み、ジャンプしてそれを避けた。飛び上がったことで隙をつくった討窪を破門は確認。左足の勢いそのままに体を立ち上げ、踏み込んで、大きく間合いをとった。

「逃がさへんっ！」

「くそっ！」

すでに破門の目の前に黒球があった。討窪が空中で発射したらしい。

顔めがけてやってくるそれを、破門はギリギリで、捲ってあったブレザーの袖で弾いた。

そして、当たった部位を筆頭に、ブレザーが破門の体ごと引っ張られる。

破門が急いでブレザーを脱ぐと、不気味にも破門のブレザーのみが討窪の方へ、ビュンツと引き寄せられた。

「こんなもんいらんねん」

討窪は破門のブレザーを手にとり、汚いものでも触るかのように提げた。

「討窪」

「あん？」

「気をつけな」

破門はニヤリと笑いながら、印を結び、テキストを集中させる。すると。

ヒュン、と何かが風を切る音。そして討窪の目に飛び込む小さな陽炎。

「は？ 何を、ってうがっ！！ あ、あ、熱っ！！ じゅっつ熱い！」

討窪の頬に何か非常に熱い物体が当たった。フロム、ブレザーの内ポケット、だ。

何かと思い、討窪は自身に直撃した、地面に転がる物体を確認した。そして、それは。

「加熱用ツール……!!」

「さっきブレザーを脱ぐ時、紙を数枚内ポケに忍ばせておいた。んで、てめえがブレザーを取った瞬間、元々内ポケにあった加熱用ツールを作動して、紙を使っててめえの顔めがけてブン投げた」

「……案外やりおるのお。破門のくせに」

「俺をあんまり見くびんなよ」

破門は腕を組み、胸を張り、顎を上げ、痛そうに頬を押さえる討窪を見下ろした。

「ふん、それは」

討窪はヒリヒリと痛む頬に手をあてがいながら、ニヒルに笑った。

「こっちの台詞やで？」

破門はぞっとした。嫌にテキストが背後から感じられたからだ。破門は振り向くと、そこには黒球があった。

「なっ!?!」

「一直線にしか飛ばせない思たら、大間違いやで!」

見事な曲線を描いて飛んできた黒球は、パンツと音を立てて破門の額で破裂。

徐々に、討窪への引力を感じてきた。

「お、おお、おおっ！」

「ははっ！ こっちやこっち！」

「いたたたっ！！！」

例えるなら、額に巨大な風を括りつけた感じだろうか。

無理矢理に引かれるその感覚は、内蔵をヒューっとさせられるアレによく似ている。

討窪は破門から逃げるように駆けていた。破門は嫌が応でも「鬼」の役目だ。

「は、早く止まれチクショー！！！」

破門が叫ぶと、討窪は足を止めた。ただ、止まった場所に問題がある。

討窪が立ち止まった先には、広場を取り囲むように並んでいる、木があった。

「ほっ！」

「やばっ！」

討窪と激突する寸前、討窪は木の枝に掴まりその体を猿の如く木に登らせた。

当然破門の先にあるのは、硬い硬い木の幹だ。マグネイドによる引力は速攻に方向転換することはない。だから。

「ぐあっ！！」

バンツ、と破門の体は打ち付けられる。

破門は額を両腕で覆い、頭部が衝突するのを何とか避けたが、そのダメージはなかなか大きい。

マグネイドが解け、破門の体はフラフラ。意識が一瞬だけ朦朧とした。

「まだやでっ！」

「がはっ！！」

追い打ちの踵落とし。

木の枝に掴まっていた討窪のそれが、破門の頭を真下の土に叩きつけた。幸いにも、木の周りはコンクリートではなかったのだ。

「いってええ！！」

「はははっ！ 甘いで！ 破門お！」

「くそっ！ あつてめ討窪！ 足乗っけてんじゃねえ！！」

討窪はうつ伏せに倒れている破門の背中を、我がもの顔で踏みつけていた。

破門の横を過ぎる、優しい木漏れ日とは相異なるこの雰囲気。破門の眉毛には皺が寄っていた。

「ほんまもんの負け犬やなあ！」

「んだと、コラッ！」

破門はリズボルトを発動させた。左腕にテキストを送り、紙を操る。その紙は一直線に討窪の目元へと飛んでいった。

そして、一辺五センチほどのそれを討窪の目元に二枚張り付けた。

「なっ！ 何も見えへん！」

破門は上手く紙をブラインドに使った。そして。

「どらあっ！！」

「ぐほおあー！」

ブラインドのせいでよろけた討窪は、破門に足を掴まれ、勢いよく倒された。

破門は急いで立ち上がり、仰向けになった討窪の腹を踏みつけた。見上げる討窪を、破門は見下ろした。

「はっ！ 形成逆転！」

「くそお」

「お前が負け犬だな！」

「はあ。やられたで……なんてな」

「ん！？」

討窪は黒球を作り出した。そしてそれを即座に発射した。

「あぶねっ!」

破門は間一髪でその黒い弾丸を、頭だけを動かして避けた。そして、背後でパンツという音が破門の耳に入った。

マグネイドの引力といえど、限界がある。引き寄せられる物。引き寄せられない物。強く固定されている物体に黒球を当てたところで、その物体が動くことはない。

今回もその類に思われた。破門の背後にあるのは樹木だ。マグネイドの引力ごとくで動かされる代物ではない。

そう思った、矢先のことだった。

「がっ!」

破門の後頭部に何かが当たったのだ。それは硬くて、所々尖ってそんなフォルム。破門は背後から直撃した何かを確認するよりも前に。

「せいっ!」

「なっ!」

討窪にネクタイを掴まれ、一気に顔を寄せられた。

そして、鈍い音。

とどこのつまり、頭突き。

「ぐほおー!」

討窪は無謀にも頭突きを繰り返し、痛みを耐えつつも次の攻撃に移る。破門のワイシャツの襟元を掴み、破門の腹に足の裏を当て、一気に破門の体を頭上を通り越して投げ飛ばす。巴投げだ。

「いてっ!」

破門は背中からコンクリートの地面に落ちた。背中を反らし、その痛みを少しでも軽減させようとした。

「痛いのはこっちやで破門お! めっちや硬いやん、頭あ!」

破門は叫ぶ討窪を無視し、その後方にある、後頭部に当たったらしい何かを確認した。

よく見えない。何だあれは?

「え、枝……か!」

「ん? ああ、これか?」

討窪は下に落ちている枝を拾い上げた。

「さっき、俺は枝に掴まっとなら? そんときに軽く折ったってねん」

「はあ……なるほど。だから引き寄せられたのか」

「どうせマグネイド避けられると思ってたからな。俺の狙いは、自分の頭やのうて、その背後のこいつやっとなつちゅーわけや」

木や枝自体は強く固定されているから、ビクともしない。しかし、

ある程度折れた枝なら、十分引き寄せられる。だから、その枝と討窪の間にいた破門に当たったのだ。

頭に対する衝撃だったので、破門にはノーダメージだったが、隙を作るには申し分なかった。

「そして、破門。俺はお前の弱点を見つけたで」

「は？ 弱点？」

討窪は背中を押さえて座っている破門に対し、指を指した。

「自分、連続してリズボルト使えへんやろ」

「……」

「最初からおかしい思ってたんや。リズボルトを使える自分に、マグネイドを避ける必要がどこにある？ 紙で防げばええことやろ」

リズボルトの紙はほぼ無限にある。確かに、たったの紙一枚を犠牲にして防げるのだから、いちいち体を動かす必要などないのだ。

「なのに、自分は避けた。これはつまり、そんな時に限ってリズボルトが使えへんかったちゅーことや。もっと言えば、リズボルトを使うには時間がかかるんや」

討窪が自身の分析を自慢げに話した。討窪が言いたいのはつまり、リズボルトの使用にはいちいち充電時間がかかる、ということ。

「一発目をあんな必死になって避けてたのはリズボルトが使えなかったから。何せ、ちよっと前までは折り紙しとったんやから。その

次のときも、俺に加熱用ツールを当てるためにリズボルトを使用しとった」

討窪は両手で印を結んだ。右手の人差し指を中指を、左手の親指と薬指と小指で掴む。

「俺の分析にやれば、自分がリズボルトを使うのにかかる時間は三十秒程度。自分、さっきリズボルト使ったよなあ！」

討窪の周りには、大きなテキストを感じられた。可視ではないが、オーラというか、雰囲気分かる。

討窪は両の手の平にバスケットボール大の黒球を作りだした。

「これはもう避けられへんでえ！ リズボルトも使えんしなあ！」

「……は？」

「ん？」

「え？」

「え？」

「は？」

破門はポカンとした顔で、討窪を見つめた。

「別に、リズボルト使うのに、そんな制限ないし……」

破門は紙を左腕から一枚剥がし、それで『手裏剣』を作った。

それを見て、討窪は口を開けたまま動かなくなった。

「じゃ、じゃあ何で今まで紙で防がなかったんや!？」

「え……特に理由はねえけど」

「……」

アホやあー、こいつアホやあー、という声が、夕方のカラスの鳴き声の如く、広場に広がった。

「いや、何の説明してんのかなーって思ってたけどさ」

「何つでやねん！ ほんまアホやな自分！ アホ！ アホ！」

「アホアホうるせーよ!」

討窪は大きな黒球を、自身の手前に翳かきした。苦悶の表情を直し、改まって破門を睨む。

「せやけど、これは防ぎようないんちゃうか？」

「あ？」

「いつくでえ！ スプレネイド!」

討窪はその巨大な黒球から両手を離し、右拳で思い切りそれを殴りつけた。

すると、巨大な黒球は破裂。中から今まで通りの小さな黒球が、幾つも発された。その数は、ぱっと見では数え切れないほどに多数

だ。

「全方位攻撃や！」

「うおっ！ マジかよ！」

黒球は一直線ばかりではなく、曲がりくねり、破門の背後にもつけたいた。盾のような物がないとこんな、黒球のシャワーは防ぎきれない。

しかし、破門にはあつた。

全てを防ぐに足る、大きな盾が。

「はっ、盾紙！」  
たてがみ

「なっ！」

シゅルルともの凄い勢いで左腕から紙が剥がれ、破門の周囲を囲んでいた。盾というよりも塀、壁の類だ。

そうして全ての黒球を防ぐ。マシンガンの銃声のようなその破裂音は、破門の一步手前で聞こえた。

「くそっ！ そないな量扱えたんかいな！」

当然紙は討窪に引き寄せられる。破門の盾は徐々に討窪へ向かい、一種の芹壁、横向きバージョンのようになっていた。

迫りくる紙の壁を、討窪は動揺しながら見つめていた。

さっきので、テキストをほぼ全て使い果たしてしまった。しかし、あれだけの量の紙だ。破門とて同じことだろう。討窪はそう思った。

「ともかく、解除せんと！」

討窪は高速で迫りくる紙を、テキストを絶つことで散開させた。紙がバラバラと舞う中、これからどう戦おうか討窪が考えていたところ。

そいつは来た。

「何っ!？」

目の前に、なぜだか破門がいた。

「でええいつ!!!」

「がっ、はあっ!!!」

破門は体を反らし、討窪の額にジャンピングヘッド。討窪の脳は、おそらく岩がぶつかったとでも判断したことだろう。それほどの硬度を以て、討窪を吹き飛ばした。

「な、な、な……」

「へっ!」

「な、何が……」

「簡単なことだよ」

十分な間合いはあったはずだ、と訳が分からなくなっている討窪に、破門は得意げに説明を始めた。

破門は紙で盾を作る中、一カ所だけ穴を開けておいたのだ。そこから侵入してくる黒球を自身の額にわざと当て、紙ごと自分を引き

寄せられるようにした。

「?????そんなで、紙で体を隠して、てめえが能力を解除するのを確認。そのタイミングでてめえに突っ込んだ」

「……マジかあ。逆に、利用されてもうたな」

討窪は仰向けのまま、動かなかった。正しくは動かせなかった。テキストも底をつき、頭突きのせいで意識が朦朧とするからだ。

「ふう。俺のか……ああーっ!!」

口を大きく開き、頭を抱え、破門は突如走り出した。

「忘れてたあー!!」

噴水のあるところに着き、カップラーメンを手取る。

「くそお……硬麺が、良かった」

討窪は疲労困憊しているのに、破門は走れるほど体力が余っている。この差を討窪は苦々しく思った。

ただ、今までの勝負の中で最も高度な戦いだったと、讚美にも似た感情を討窪は抱いた。

「今回も、俺の負けやな」

「うーん、噴水の水は何かジャリジャリすんなー」

## 第六話 骨と身ブレイカー（後書き）

私は一体何時に更新してんだか。朝の四時半です。

ん？ ええ、そうです。徹夜の真っ最中です。ああ、お肌に悪い・・・。  
。。夜更かしは太るともいうしね・・・。

今回は初のバトルでしたが、いかかがでしたか。

第七話 異なる味なるスイートストロベリー（前書き）

久々の更新…

書く時間が無いだけ…

だって一日十三時間勉強してんだから…

知ったこっちゃないですよっ！！

ともかくこのページを開いてくれる方に大感謝。

今回のタイトル難易度

正直解読できる人いないと思う。自分でも意味わからんし…

## 第七話 異なる味なるスイートストロベリー

「噴水の水って、水道水かな」

「知らんがな」

破門はインスタントの麺をすすりながら、少し前方の芝生で伏している討窪と会話をした。

討窪は体をゆっくり起こし、おもむろに黒のブレザーを脱いだ。そしてネクタイを外し、ワイシャツのボタンに手をかける。

「討窪お。まだ脱ぎ癖直ってねーのかよ」

「脱ぎ癖ちゃうわアホ。単に暑いんじゃないボケ。暑いから脱ぐ。当たり前のことやる?」

「そーいづのを脱ぎ癖っつーんだよ。服着ろ!」

討窪の脱衣癖。それはもう中等部の頃からだった。

暑い、と言つてはTシャツを脱ぐ。今日は蒸すなー、と言いつける度にボタンを外す。そして結局寒くても、修行だとか言つて衣服を自分から引き剥がす。

破門にはまったくもって理解をし兼ねていた。最近では筋肉を見せたがっているナルシストのようにも思えてきた。

「走ったせいで汗ダクやで。破門、体拭きたいから紙くれや」

「きしよいんだよ!」

討窪は若干寝始めている金髪を立て直しながら、噴水の周りに座る破門の元へと歩いた。

肌色の筋肉が近づく。そして修飾されている汗の塊。

「おいおいおい！！ 近づくなっ！！」

「紙もらっただけやん。マグネイド！」

「危ねっ！！」

破門は上方にジャンプ。黒球を、今までに無いほど俊敏な動きで避けた。

討窪にとっては遊び半分。破門が困窮するのならそれもまた楽しい。しかし破門は真剣だ。できることなら討窪に関わりたくない。

「待って〜。 やつぶとく〜ん」

「やつぶとく〜ん、じゃねえよ！！ こっち来んな！！」

白昼堂々何をしているんだか。

破門は円形の噴水を挟んで、討窪のいる位置と逆のところに戻り込んだ。噴水である半裸の姿は捉え辛いものの、ある程度の気配で分かる。お互い様子を見て構える。

「てめえ討窪！ また頭突き喰らいたいのか！」

「んなわけあれへんよ。紙をもらえればええねん」

「誰が、んな汚らわしいモンに俺の紙を触れさせるかっ！！」

紙は無限にあるとはいえ、正直そのような用途は願い下げなのだ。破門は左手に持つカップ麺をその場に置いた。一応、少しでも動きやすくするためのだ。

互いに動く軌道は円形。だから駆け引きが必要になる。破門にとっては、討窪が右回りに動いたら同様に右回りに動かねばならない。左回りも然りだ。

しょうもない緊張感が、水の波紋を作る。さて、相手はどう動くのか。

(……あれ？　っていつかこれ、後ろに逃げればいんじゃない？)

後方はひらけてるし、人通りの多い道もある。何より教員棟がある。

破門は気づくのが遅かった。しかし間に合った。まだ半裸の金髪は、気色の悪い作り笑顔でこちらを見ているのだ。

破門はきびすを返し、大股で地面のコンクリートを踏んだ。そして逃走。

「あつ！　ちよー待ちいや！」

「くそつ、何で俺がこんな……。って、ん？」

両腕を素早く振るって逃げている途中、前方に見覚えのある顔を確認。

おそらく女。小柄でロングの金髪だ。そして一際目立つ、大きな瞳。

ただ、頗る目つきが悪い。

「あ、千宮っ！――！」

「……」

破門は両足にブレーキをかけ、少し屈んで千宮の肩に手を置く。普通知り合いが走ってきて、いきなり肩をつかまれたら誰でも驚くものだろう。しかし急なコンタクトにも、千宮は動じていない様子だった。

「テレポートしてくれ！ 今すぐ！ 辻崎ん家でいい！」

破門は振り向く。その目移るは、一見変態の討窪大和15歳。徐々に近づく距離と比例して不安が増す。見れば見るほど醜い。ばい菌のようだ。

「おい千宮はやく！ って……あれ？」

破門と千宮は目を合わず。相変わらずの三拍眼、のはず。太陽で映える青の眼光、のはず。無愛想な表情だけれど肌はピッチピッチの千宮、のはず。

しかし何か違うような。

決定的な違いを見つけた訳じゃないし、そう思う理由もあまり分からない。だけど、なんだ。

「お前、千宮、だよな」

「……」

疑いを言葉にしてみる。しかしいつもの無言返答。雲を掴むような気分の破門は、千宮の肩から手を離さなかった。

「やぶーと！ つつかまーえあぎゃあつ！…！」

最初からこうすれば良かった。破門は左手の紙で巨大な『はりせん』を作るやいなや、討窪の股間に相対速度をもつてして、下からむすび上げるように喰らわせた。

悶絶する討窪。しかし今そんなことはどうでもいい。問題は目の前の千宮だ。

「おい、千宮……?」

ハツとした。

だって、肩にヒビが入ってたから。

そこから青白い光が漏れる。しかしながらその青さには見覚えがあった。

「これは……もしかなくても!」

光るヒビが顔に到達した。なおもその速度は緩めず、首の辺りを一周した。

青い光に討窪も気づき、ポケットとした顔でそれを見上げた。

破門は凝視。そして、その先に見えたのは。

「ぎ、吟斗おーっ!」

「……ふう」

お得意のメタモルフォーゼで化けていた、一応校長。その人だった。破門はその姿を見てひとしきりに絶叫。

「てっめ、何してんだ!? っつか、何で千宮に!」

「はっはっはっ。いやなに、暇だったんです。千宮というのか、あの子は」

吟斗は両手を眉毛辺りにもってきて、日陰を目元に作った。破門より若干小さめのその体には寝間着のような作務衣。そしてサンダル代わりに草履を履いている。

「あ？ どーいうことだ？」

「何やら綺麗な金髪がいるなーと思ったら、その子めっちゃ目つきが悪くての。あまりに印象的だったからちよつとゴピったんだ」

「千宮を……？ というか、お前なんでそんなことしてんだ？ 暇なのか？」

「……暇っちゃあ、暇かのお」

吟斗は少しだけ考えてそう答えた。どうも冗談抜きですることが無いらしい。

本当に校長か？ そういった疑問を抑え、破門は討窪の方を見た。討窪は破門の、校長に対する軽さに少し驚いていた。驚きを越え、ちよつとした敬服の念も感じていた。

「つと、今の内だっ！！」

破門は駆け、吟斗の横を過ぎた。

討窪から逃げるため、というのもあるが、吟斗が先刻見たという千宮に会いに行くためでもある。

今日は入学式だった。だから辻崎と千宮で入学祝いをする予定なのだ。破門は先に千宮と合流して、一緒に辻崎の部屋に行こうと考

えていた。

「あっ！ ちょお待ちい！！ ほな校長さん、失礼しますー」

「ん。またの」

討窪は立ち上がり、吟斗に一礼。そしてすぐに破門が走っていった方向へと足を早める。

追い風が吹いたから、二人はもっと早く走るだろう。

「何だっただ。あの二人は……」

吟斗は下に落ちていた『はりせん』に気づいた。破門がテキストを練り込んだ紙を集積させ、硬化させたもの。

手に取り、眺めてみる。小さな紙が一枚一枚重なって形成されるそれに、紙は数え切れない程使われている。これほどまでに多くの紙それぞれに、テキストを込めるのは至難の技だろう。

しかし破門はそれを平気でやってのける。吟斗はここに、異能力者としての破門を見た。

「やはり遺伝かの……愛子よ」

吟斗は『はりせん』を肩に乗せ、腰を叩きながら歩きだした。

待たんかい破門おー！！ こっち来るなバカ野郎っ！！ そんな怒号と、ズドドドドという足音が微かに、吟斗の耳には届いていた。

\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*

決して人と人が肩をぶつけないような、横幅を大きくとつた廊下。歩いて音も音が立たない、赤いカーペット。横を通り過ぎる、半透明な立方体の明かり。

確かロビーには人間二人分くらいのシャンデリアとフカフカのソファがあった。

すれ違う度に挨拶してくるのはこの寮生か、それともホテルマシンの類か。

「第一寮とはえらい格差だなコレ」

破門はブレザーとネクタイを右手に携え、紙がテーピングの如く貼り付いている左手で、その黒髪をクシャクシャと撫でた。

場違いにも程がある。

破門のようにジャンキーな生徒はこの寮には皆無であった。

ホテルを匂わせる雰囲気。エレベーターガールはいるし、購買部と思しき生徒が荷台を押してチョコやらを売ってる。

第一寮と違って、部屋番号が吹っ飛ぶことはないし、いつの間にか上の階にいた、なんてこともあるはずがない。

「んなことより！　なんでお前付いてきてんの！？」

「えーやん。なあ？　千宮さん？」

「……」

ホテルのような第二寮の廊下を歩く三人。金髪二人に黒髪一人。もちろん討論は衣服を纏っている。若干肌けてはいるが。

「これから辻崎の部屋で飯なんだ！　お前マジ帰れよ！」

「冷たいなあ。俺ら友達やる?」

「友達じゃねえよ! 早く帰れ!」

「ツンデレやねえ。こないだアド変のメール、ちゃんと俺に送ってくれたやん。そないなこととして、友達じゃねえはあらへんやろ」

「面倒くせーから一斉送信だよ帰れ!」

「えーやんかあ。俺も入れてくれや」

「嫌だ帰れ!」

「ちょ自分、語尾のように帰れ言うの止めてくれ! 少し傷つく!」

大声で喋ってるからここではよく響く。紳士な男子生徒と、淑やかな女子生徒達はそれを聞いてちよいちよい振り向いていた。

「つと、ここだ」

破門は辻崎の部屋の扉の前で立ち止まった。

第一寮の部屋の扉は、板に取っ手をつけて、目の高さくらいにガラスの通しがあるだけだ。

対して、辻崎のいる第二寮の部屋の扉はどうだ。

金色の取っ手は縦長で、ちゃんと鍵穴は二つあるし指紋認証もある。薄い黒色が塗られた扉には金のコーディネートラインが施され、すぐ隣にはインターホンがある。

破門は、自分の境遇に軽く絶望しながらも、取っ手を掴んだ。

「辻崎ーっ! わりい、遅れた!」

「インターホン鳴らさんのかいつ!!」

まるで開いていることを知っていたかのように、破門は豪快に扉を開いた。そしていつもの台詞。今回は三十分遅れだ。

「おー破門か！ 上がってくれ！」

部屋の奥から辻崎の声。破門は学校指定の革靴を、踵を使って脱ぎ捨て部屋に乗り込む。そしてそれに付いていく千宮。便乗して討窟も部屋に上がるうとした、が。

「ふがつ！」

大きな紙の手が、討窟を廊下に突きだし、向かいの扉まで一直線に吹っ飛ばした。バラバラと紙が破門の左腕に収まっていく中、破門が吐き捨てるように、一言。

「てめえは道草でも食ってる。二つの意味で」

破門が紙で部屋の扉を閉めようとした。

しかし、妙な引力が扉を開けようとするベクトルになっている。

これは紛れもなく、マグネイドによるものだ。

「ちょ、待てや！ えーやんか飯くらい！」

「お前、マジ、もう、いい加減に！」

「やらせるかっ!!」

「おいっ！ 止めろっ！」

「殺生やで！！」

「離れ、ろっ！！」

「危なっ！！ 尖ってるのは無しやろっ！！」

「扉にしがむなっ！！ ってか、なんでそこで服を脱ぐんだっ！！」

「筋肉うっ！！」

「意味が分かんねえっ！！」

\*\*\* \*\*

居間は広がった。

木に見立てた床には暖房が通り、最新型イオンエコクーラーが天井の端に設置してある。

テーブルの上には鮮やかな自然を生ける花瓶。小洒落た小物置きの上には小さな熊のぬいぐるみがあり、大画面のプラズマテレビの前には白いソファ。近くには金魚を中に飼う、直方体の水槽。

ドアが他にもいくつもあるから、きつと個室へ続いたり、風呂場やトイレに繋がっているのだろう。

「じゃあ入学を祝して、いただきます！」

まず辻崎の声。

「……いただきます」

次に千宮の声。

「……」

そして破門の沈黙。

「いったただきまーすっ！！」

最後に討窪の快声。

ぶっすーとした破門の表情が物語る、彼のふてくされ。なぜここに討窪がいるのか。なぜ同じ釜の飯を食わねばならないのか。

露骨に不機嫌そうな破門に辻崎は気付き、自身の小皿にあった『鶏肉の甘煮マスタード和え』をそっと、破門の小皿に分けてやった。

「ちげーよっ！！ そういうことじゃねーよ！！」

「は？ じゃあ何がそんな不満なんだ？ 俺の手料理とか言ったらぶっ飛ばすぞ」

「どう考えても討窪だろっ！！」

破門は立ち上がって討窪に指を指した。眉をつり上げ、黒目を白い眼孔に浮かせながら。

破門の言動に、辻崎はやれやれと続けた。

「そこまで邪険にするな。一応クラスメイトなんだし。どうしても食べたいってんだから、しょうがないだろ？」

「ざっけんなっ！！ 俺はこいつにどんだけ痛手を負ってきたことか！！」

「あんまり嫌がるようなら、給付金渡さねーぞ」

「はあ！？ あれは俺のもんだろ！？」

「そうだが、一括に渡されたのはこの俺だ。渡す渡さないは俺が決める」

「なっ！ んんんう……」

破門は頭を抱えて沈黙考した。給付金とは、破門や辻崎のような親のいない孤児らに、学校及び世界政府財務系から支給される支援資金である。ほぼそれが元手になって破門達は生きているようなものだった。だからそれが無いと非常に困る。

「……はあーっ。討窪てめえ、それ食ったらさっさと帰れよ」

破門は辻崎の簡単な説得に応じ、その感情を鞘に収めた。

あくまで破門が討窪を邪険にするのに、これといった理由は存在しない。少しだが、いちいち討窪に関して一喜一憂していられないと判断した破門は、妥協の手段を講じることにした。

「ったくよお……」

各々辻崎がつくった食事に手をつけ始めた。

千宮はサラダボールをドレッシング無しでバリバリかじっている。

破門は肉じゃがを口に流し込んだ。

辻崎が律儀に焼き魚の骨を取り分けながら、破門に話しかけた。

「そーいや午前中、校長に会ってさ、なんで破門と千宮が同室なのか聞いてきたよ」

「マジでかつー!!」

「えっ！ 二人って同室なのかいな!」

ああややこしくなってきた、破門は討窪の声を聞いてそう思った。討窪はいつもは薄く伸びている一重の瞼を、大きく見開く。

「あーそーだよ。一緒に住んでるよ! で、理由は何なんだよ?」

前方斜め左からくる、ヒューヒューという古い煽りを避け、破門は辻崎に訪ねた。辻崎は茶碗を置き、少しニヤケてこう言った。

「どつやら、校長の手違いらしい。下の名前が女っぽくてのお、だつてさ」

ゴーン、と擬音が破門の上に落ちこちてくる。そして頭に思い浮かぶ吟斗の、てへ、やっちゃった、な顔。

案の定討窪は手をたたいて大爆笑していた。

「ぶはっ!! だっははははっ!! し、下の名前がて!! あははっ!!」

そんな笑い声すら、今の破門の耳には届かなかった。

破門は、次会ったらブチ殺す、と呪文のように唱え、箸をへし折る勢이었다。

「でも、頼めば変えてくれるらしいぞ。部屋割り」

目の前の般若に、辻崎はそう言った。

破門は言葉に詰まった。じゃあ早速、そう言おうとしたが、なぜだろ言葉達が喉の下辺りでせき止められたのだ。

「ん？ どうした、破門」

破門は今の今まで、部屋が一緒になった理由を知りたがっていたが、その理由の起因は千宮と部屋が一緒であることを嫌がっていたからじゃないはずだった。ただ、知るといふ欲求に従っていただけなんだ。

決して、千宮がどうか、そういう問題じゃなくて。

「俺は……」

そう言いかけて、左横の千宮を見る。相も変わらず鋭い眼光。サラサラのゴールドヘア。小柄だけど、妙な存在感を放っている。破門が知っている千宮なんて、それくらいしかない。出身地だって、生年月日だって、好きな食べ物だって、知らないのだ。これといった思い出だって、ありはしない。

????でも、俺の中では、高校生になって初めてできた繋がりで。

千宮と目が合ったとき、素直に、手放したくないと思った。そしてそれが当然のようにも思えた。

わざわざ自分から縁を切るなんてことはしたくない。

「……………」

変えてもらおう権利は千宮にだってある。だから、千宮が嫌だって言うなら甘んじて受け入れよう。破門の、千宮に対する気持ちはその程度だったが、それほどの程度でもあった。

無愛想な千宮も、自分と同じことを思ってくれてるのかな、そう破門が思っている。

「見た？ ちょ見た？ アイコンタクトしよったで辻崎！！」

「愛コンタクト、だな」

「ほお、上手いこと言うねー」

「黙れお前らあっ！！」

ちよっただけ顔の赤い破門を辻崎は見つめ、つんけんとした彼の態度を撫でるように言った。

「……で、どうすんの？」

正直なところ、辻崎は破門の回答は分かっていた。何年親友をやっていると思うんだ。

破門は最後に自問自答してみる。

千宮と別の部屋がいいのか。

なんて、答えは分かりきっているけど。

暫しの沈黙の先は、非常に掴みやすいから。

「……変えなくていいよっ！！」

「はっ、やっぱな。千宮は？ 変えたい？」

千宮は無言のまま頭をフルフルと横に振った。

「じゃあそついうわけで、変更なしでいいな」

破門からちよつとだけ笑みがこぼれる。何も感じてなさそつな千宮も、一応は今の生活を悪くないと思っている。それがなんだか嬉しかった。

破門は手を拳げながら千宮に言った。

「じゃあ、その、えーつと、これからも、よろしく」

「……ん」

「カポーみたいやーん!!」

討窪の言葉に、ちよつとだけ照れてしまった破門は、照れ隠しも含め討窪の全身を紙で縛り上げた。

第八話 アダルト返し(前書き)

今回のタイトル難易度

## 第八話 アダルト返し

「そーいやさ、辻崎と同室の奴はどーしてんの」

「ああ、不知火しごひなら、気使ったのか知らないけど、他の部屋に行ってるよ」

「ふーん」

破門はプラズマテレビの前にある、真っ白いソファでくつろいでいた。両腕を横長の背もたれに乗せ、ついでに頭もだらしなく乗せそりゃもうこれみやがしに。なんせ、149号室ではまったく不可能なことだから。

食事を終え、すっかり部屋はのんびりモード。千宮は破門の横で一緒にバラエティ番組を鑑賞していた。

「おい討窪っ。前通ってんじゃねえ」

「うるっさいなあ。こんだけ画面でかいんやから見えんことはあらへんやろ」

「何だその言い訳！　ってか、お前何してんだよっ！！」

討窪はテレビの下によくある、透明な扉で閉められた小物入れを物色していた。

どうやらゲーム機を引っ張りだしている辺り、ゲームをしたいよ  
うだ。

「おっ！！　PS3あるやんっ！！　これやろっやあ！！」

豪快に取り出されるは巷で噂のハードウェア。キラリと光黒いフィルムは、丁寧に扱われている証拠だ。しかし討窪は、それにべたべたと指紋を張り付けている。

「おいおい勝手に触るなよ……俺のじゃないんだから」

辻崎が洗い物を終え、エプロンで手を拭きながら三人に近づいて言った。曰く、ゲーム機は基本的に不知火という、辻崎と同室の人のものらしい。

「えーやん。ちょっと借りるくらいさあっ!」

「そうはいつでもだな……」

辻崎がしかして渋っていると、破門の嫌ほどキラキラした目が視界に入ってきた。多くは望まない、だから、な？ 俺もPS3やりたいよー、と眼力だけで語っている。

対して千宮はゲームよりテレビの熱湯風呂に興味があるらしく、目を側め、テレビが見えねえ、そこだけ討窪、と音にならない声を発していた。

「……ちょっとだけな」

「よっしやあーっ!」

破門は突然バケツをひっくり返したように機嫌が良くなり、討窪とともにゲームの準備を始めた。配線がどうたら、コントローラーはどうたら、俺が1Pだとかなんとかか。

「千宮は、ゲームやる？」

辻崎は、少しテレビを見たがっていた千宮を心配するように質問した。

千宮は無言のままコクリと頷き、がちやがちやと並べられたゲームのコントローラーをその小さい手に取った。

「ふう……」

辻崎はエプロンを脱ぎ、それをイスの一つにかける。そしてヘアピンを取り、制服のポケットにしまった。そうして、保護者のような目で目の前の三人を見た。

こんな広い空間なのに、一カ所に集まるといふことは仲が良いってことなのかもしれない。

「だーからー、そこは三本刺さないと意味ないっちゅーねん!!」

「うるせーなー。ゴチャゴチャ言うなら帰れよ」

「ここお前の家ちゃうやろがい!!」

喧嘩するほど仲が良い。誰かがそう言った。

言い得て妙な気もするが、的は得ている。

辻崎は千宮の横にストンと座り。

「俺は観戦に回るかな」

「……」

千宮は意識はしていないのだろうが、辻崎に対して結構な睨みを

利かせている。しかしその視線に伏屈ひせかまりのような情はなく、単なる確認に過ぎなかった。

テレビの画面が切り替わる。その瞬間に現れる高画質という名の感動に、破門と討窪は心を奪われた。

「うほおっ！！ オープニングすげえ！！」

「飛ばせやそんなのっ！！ はよ対戦しようやあ！！」

破門達が行おうとしているのは、現在売れ筋ナンバーワンの格闘ゲーム。一対一の対戦ではなく、多人数でできるパーティータイプだ。

ルールは至極シンプルで、自分の体力ゲージが0にならないようにして、最後まで生き残っていたプレイヤーが勝利だ。

「おっしやー！！ 俺このキャラー！！」

「おい討窪っ！！ それ俺が選ぼうとしてた奴だぞっ！！」

「……」

ある程度の論争と闘争はあったものの、各々使うキャラクターを選択し終わった。

そして対戦開始までのローディングの時間。微妙に静まる居間には、水槽の酸素供給機のコポコポという音だけが響く。

待つこと数秒。画面には三人のプレイヤー。

「いっくでえー！！」

そして、試合開始のゴングが鳴った。

と同時に。」

「……ん？」

何だろう。辻崎の目の前を横切る、白い腕。

右から左へ。そして討窪の頬へ。

流れるように通過する破門の拳は、討窪の右頬にめり込んだ。

「ふぎよおっ！！」

「おっしゃー！！ 行くぞっ！！！」

「待てやコラあっ！！ リアルで殴るのは無しやるお！！ ちょ、ゲーム止めるお！！！」

「うっせー！！ 先制攻撃だっ！！！」

和んだはずの空気が一変。一気にアナーキーな空間へトラベリン  
グした。

辻崎の前をお次は黒球が横切る。ちょうどそれは破門のコントロ  
ーラーに当たり、そしてそのコントローラーが辻崎の前を駆けてい  
った。

そしてコントローラー争奪戦。参加者は破門と討窪。主催者も破  
門と討窪。

「てめ、返せ！！！」

「誰が返すかいなっ！！！」

本来テレビ画面内で行われるはずの戦闘が、現実世界に置き換え

られ、漫画でいう、こう、モアモアとした煙の中での喧嘩が繰り広げられている。

リスボルトで討窪を牽制。隙を見て鳩尾。しかし討窪の渾身の蹴り。

いつまで続くのだろうと辻崎が、兄弟喧嘩でも見ているような気分分に浸っていると。

「おらっ!!」

「いてっ!!」

討窪によって破門が突き飛ばされた。

ソファに尻餅をつく。バランスをとるため破門は腕を支えにしようと、ソファの地に手を踏み込もうとした。のだが。

「……ん?」

手に伝わる感覚は、決して「柔らかい」ではなかった。

むしろ「堅い」。少しゴツゴツしてて、何かちよつと動いている。それはちよつと、鼓動、のような?????

「……」

????千宮の、胸だった。

「わ、わりいっ!! 今肋ウラゴリッっていつちまったかも!!」

「……」

「お、おい?」

「……そこは、胸」

「え……」

破門は少々勘違いしている。

堅いからといって、肋というわけでもない。起状が無くて、一応そこは、胸という分類にあるものであって。

それを気にしている女の子も多いわけだ。

プライドとは言えない。悩みの種とも言えない。ただ何となく悔しい。そんな気持ちが千宮を衝動させた。

即座に破門の腕を掴む。

離せ、ではない。

「お前、貧乳だな」

離れる、だ。

「どわぁっ!!」

三人の目の前から瞬時に破門が消える。それと同時に風呂場の方からザパン、という音がした。

千宮は少しだけ恥ずかしそうに、まな板の胸部へ両腕を持ってきた。

そして、今まで見たことないほどの剣幕で、風呂場の方を睨んだ。しばし待って、玄関に繋がる廊下の方から、咳で噎せ返るような声。

「ゲホッゲホッ……せ、千宮ぁっ!!」

ビチヨビチヨの破門が、ビチヨビチヨの手で扉を開け、ビチヨビチヨのまま千宮達の方へ歩を進めていた。

玄関から繋がる廊下には、その途中の風呂場から水を引きずったような跡があった。

「胸触ったくらいで、ここまでするかあっ!？」

「……………」

破門は水を吸って重くなったブレザーを脱いだ。続いてネクタイを抜き取り、千宮の目つきに負けなくらい睨みを利かせて、三人の元へ近づいた。

討窪は腹を押さえて大爆笑。一方辻崎は、もし浴槽に残り湯がなかったらどうするんだ、と千宮に忠告していた。

破門は千宮に指を刺し、大きく一言。

「触ったところで大して得してないかなっ!？」

「……………」

千宮の怒りの炎はまだ消えていない。破門の無神経な発言によって、酸素を送ったかの如くさらに火の勢いは強まる。

千宮はさっきからうるさく説教をかましている辻崎の腕を掴む。

そしてそのまま、テレポートを発動。

「えっ?」

「あっ!?!」

破門の額と辻崎の額が正面衝突。加えて、辻崎にとっては濡れた

ことで二次災害としても発展。

自由落下の勢いそのままに、辻崎は破門に覆い被さる。

「てめえ辻崎どけっ!!」

「う、うるせー!! あ、頭があ……っ!!」

爆発的に広がる痛みにも、辻崎は悶絶びやく地していた。ただの衝突のはずなのに、毒のように痛みが拡散する。

たんこぶなんて目じゃない。凹んだんじゃないかと。骨の方までいつてるんじゃないかと。辻崎は顔を歪めたまま、思った。

「辻崎っ!! 早くどけえ!!」

破門が辻崎の髪を掴んだその時、ガチャリと、誰かによって玄関の扉が開かれた。

「ごめーん、辻崎、忘れ……も、の」

辻崎の目に飛び込んだのは、ルームメイトの不知火だった。

目と目が合う。

この時点で確定。

二次災害に続く三次災害。

服が肌けた破門に、覆い被さっている辻崎。しかもタイミング悪く、不知火が見たのは、ちょうど辻崎が破門の胸に手をあてがっているシーンだった。

「っ、っじさ……なん……ひっ!？」

三次ではとどまらなかったようで。

#### 四次災害発生。

辻崎達の向こう。つまり、居間の方から覗けるのは、いつの間にか服を脱いでいた、討窪の姿。さらにさらに、ちよっと恥ずかしそうに胸を腕で覆い隠している、千宮の姿。

それに気づいた辻崎は、自分でも血が引いていくのが分かった。

「ほ、ほんと、ごめん……じゃ、じゃあ……！」

「うおおおいつ……！ 待てっ……！ 不知火、誤解だ……っ……！」

辻崎はダツシュで閉ざされた玄関の扉を開ける。破門は何も気にしない顔で、千宮に対するお咎めを再開した。

外から聞こえる、必死な弁明の声。

「不知火、あれはな、誤解なんだよ」

「え、いや、ほんと、俺今日ほかの部屋で泊まるんで……その、こゆっくり乱交を」

「だから違っ……！ あれには訳が」

「うひゃあ。止めてください」

「ちょ、不知火っ……！ 歩くの速いぞ……？」

「い、いやマジ大丈夫だから。あの、辻崎はアレだろ。イケメンだから、女はもう飽きたってやつだろ」

「違ああ……っ……！ 俺は女好きだ……っ……！ 五次災害を引き起こしかねない辻崎の声が、今夜はよく響いていた。」

\*\*\* \*\*

「まだ怒ってるのかよ」

「……」

破門はカルマ魔術専門学校の廊下を歩きながら、千宮に尋ねた。いつものような無言の返答ではない。そのまんまの無視だ。実をいうと、昨日の、辻崎の部屋での一件以来、ずっとこの調子だった。

「貧乳くらいどーでもいいじゃねえか。誰もお前のなんて見ねーだろうし。大きいことが良いってわけでもねーだろお？」

まったくフォローになっていない。むしろ抉るようなドリブルだ。女の子にしか分からない悩みなのだ。それは千宮も例外ではなく、何というか、『有ること』を望むわけでもないが、かといって『無いこと』は願い下げ。

言うなれば、『普通の思い出』のようなものだろうか。決して見せびらかす訳でもなく、しかし大事にしておきたい。で、たまにそれを分かり合える者とその話をしたりする。似て非なるが、そういうものだろう。

「……ふん」

「だから、怒んなって」

微妙な空気漂う二人の間に、辻崎が通った。

まるで、幽霊のよう」。

「お、おお。辻崎。どうした」

「ははっ、どうしたもこうしたも、昨日の誤解解くのに、どれくらい苦労したか……お前に分かるかあ!!」

「うおっ」

叫ぶだけ叫んで、辻崎は廊下の階段を駆け上がった。辻崎のクラスは0組の上の階であるため、一応これでお別れだが、非常に歯切れの悪い別れだった。

「何や何やー?」

破門達が振り向くと、そこには討窪がニヤニヤしながら立っていた。

あんまり関わりたく人第一号に出会った破門は、少しだけ溜息を漏らしたが、結局三人で0組の教室へと入っていくことになった。

破門は0組の扉を横風に払う。

「……相変わらず変な奴多いよな。なかなか見慣れへんよ」

フードの男。ポンチヨのような制服の女。

ノリノリヘッドホン野郎に、朝からお菓子の小太り。

破門のような黒髪もいれば、虹色の髪を持つ女もいる。

机の上で座禅を組む奴はいるし、天井に届きそうなくらいの巨人だっている。

あまり見慣れた風景ではない。

「異能力者の集まりなんだから、仕方ないんじゃないかねーの？」

この集団の中ではヤンキーのような討窪だつて、三泊眼の千宮だつて、左腕真つ白の破門だつて、霞んで見えてしまう。

それだけ0組は色濃く、それこそ昨日のマックスが言ったとおり『何かが起こりそう』なクラスだ。

破門達が並んで席に着いた手前、担任のマックスが元気良くやってきた。

「はあいつ！！ 皆元気い！？」

筋骨隆々な体をくねらせながら、ギャルのような体ていで教壇に立つのは、0組の担任マックス「トロール」。紫色の短髪が、今日も不気味に色を放っている。

「皆、あはようございまあすっ！！ では早速、ホームルームを始めるわ。今日は、一から四限が簡単な学校案内と、クラスの役員決め。五から七限が身体測定と学力検査ということで、進んでいくわ。身体測定では異能力に関しても見るから、なるべく温存しておいてね」

「……ときに討窪」

「あ？」

「学力検査なんて聞いてねーぞ」

「入学案内に書いてあったやろ。見てへんのか」

そういえば、辻崎が言っていたような言っていなかったような。

破門の場合、テストの内容を忘れるのではなく、テスト自体を忘れる。攻撃系術式は得意だからその辺はいつも満点だが、他の分野がまるでダメである。

故に破門は、テスト時間は睡眠時間だ、と考えていた。

しかしあくまで過去形。

なぜなら、辻崎に高校からはちゃんと点数をとるよう言われていたのだ。もしまた0点など取ったら、辻崎必殺ハイキックが飛んでくる。

「マジかー……」

「じゃあ皆さん。科目選択の紙を回収するので、その紙を机の中央に置いて」

破門が頭を抱えていると、机の中央が黄色く輝いた。

これは、転移系固定型術式。三重円に転移系記号が八個。

0組の生徒達が各、科目選択用紙をその上に置き、教壇の方へテレポートさせている。

「やべ、忘れてた」

破門はリズボルトを発動。自身の紙に紛れた科目選択用紙を引っ張り出す。

そして、膠着。

何を書けばいいのか、分からない。だって、科目を知らないから。

「あ、千宮ちよつと待て」

「……？」

破門はとりあえず、千宮が書いたものと同じものを記入しておく  
と考えた。

「選択Aに、先端工学。選択Bに、魔術史。  
系統選択は、火。」

「よし、サンキュー！」

「……」

転移系術式の上に紙を置いた。そして軽くテキストを流す。

「暇が下りて、そして上がる瞬間『間』。その『間』に紙は視界から  
消失。マックスの手元へと送られた。」

「はあい、全部集まったわね。優秀、優秀！ じゃあ次に、クラス  
委員でも決めようかしら？ 毎年推薦だから、ホームルームのう  
ちに終わるし」

「マックスが出席名簿を開いた。学力考査も能力測定もまだ行つて  
いないが、中学時代、及び中等部時代の成績や業績でクラス委員を  
判断できる。」

「この異形なクラスを束ねるに足る、優秀かつリーダーシップのあ  
る者でなければならぬ。」

「マックスが少しだけ考えて、名前を呼ぼうとした、その刹那に。」

「立候補しますっ！！！」

「一本の腕が、拳がった。」

「ほぼ全員がそちらの方を見る。破門達も、もれなくその腕の持ち  
主を見た。」

「性別は、女。」

整った輪郭。キリツと開かれた二重瞼。体の起状は大して無いものの、スラリと全身が伸びていて、姿勢も良い。

『凜』の字がこれほどまでに似合う者はいらるだろうか。

「あら。立候補？ 珍しいわね。何年ぶりかしら」

マックスは少し嬉しそうな顔で、両手を前で合わせた。

そして、他に立候補者がいないのを確認すると、マックスは『凜』の彼女に自己紹介をするよう命じた。

『凜』の彼女が浅い階段を下りる。シャンプーのCMのように鮮やかな黒の長髪は揺れ、コツ、コツ、と足音が教室の隅まで響いた。マックスの横で、教壇に立つ。

横から漏れる朝日に、『凜』の彼女の肌が木霊した。

「じゃあ、自己紹介を……」

マックスが促す。しかし、『凜』の彼女はおもむろに振り向き、黒板と対峙した。

そして、まだ卸したばかりのチョークを手に取り。

「…………え？」

黒板の端から端まで移動しながら、何かを書き殴った。ガツ、ガツ、と手のひらに血管が浮き出るほど、強く。

渾身の力でチョークの粉末を黒板に擦なすった後、チョークは全てに消耗されていた。

もう一度『凜』の彼女は振り向き、0組の生徒の方を向く。そして呆気にとられているマックスを尻目に、叫んだ。

「私の名前は、ひめなたりかこ 姫鉦理香子だっ！！」

バックグラウンドの黒板には達筆で『姫鉦理香子ここに参上!!』  
!』とだけ書かれていた。

「……何だ、あいつ」

破門は手のひらの上に頭を乗せながら、そう呟いた。

## 第八話 アダルト返し（後書き）

「スキルハーツ！」に日本とか中国などの現実世界での国は存在しませんが、漢字という概念はありますのであしからず。

さて次の更新はいつだろう。

## 第九話 麒麟ユース（前書き）

読んでくれる方、ありがとうございます。  
私はそれで十分満足なんです。

今回のタイトル難易度

## 第九話 麒麟ユース

姫鉦の参上にポカンとする0組。素晴らしいほどの温度差がそこにはあった。

「よろしく頼む」

自己紹介というより、宣言に近い。

クラスメイト達に分かるのは、彼女の名前と変な性格だけだ。マックスはダルマ落としを食らわせられているような気分だった。積まれた都合が、姫鉦のハンマーによって崩される。一瞬上の方が浮いて、少ししたら勢いよく落ちてくる。その時の衝撃で、マックスは意識を取り戻すのだ。

「え……他に立候補は、いるかしら？」

静まり返る0組。どうリアクションしていいのか分からず、呆気にとられている状態だ。

しかし、やはりというべきか。流石というべきか。0組の奇人ならではのなのか。沈黙の中から三つほど、大爆笑する声が聞こえたのだ。内一つは討窪のものだったが。

「じゃ、じゃあ、とりあえず、投票といこうかしらね。机の上の術式にタッチして」

破門や千宮の前に現れたのは、『A』と書かれた術式と『B』と書かれた術式。

これは反応系術式。その上に触れることで、特定の信号を受信側の術式に送ることができる。

「賛成は『A』を。反対は『B』にタッチしてちょうだい」

それぞれ術式を指で押す。討窪は速攻でAと書かれた術式をはたいたが、千宮は少々迷っている模様。というより、興味が無いからどっちでもいいと思っっているのだろう。

破門が、どっちでもいいやと小さく呟く。それは隣の討窪や千宮にすら聞こえないほど、小さなそれだった。にも関わらず、姫鉦は破門を方に狼のように鋭い視線を送り、こっぴど叫んだ。

「どっちでもいいだと……？ その黒髪っ！！ 神聖たるクラス委員長の決定に、何だその態度はっ！！」

「はっ？」

「お前だ、お前。左腕テーピング男！！」

「……テーピングじゃねーし」

テーピングじゃねーし、とこれまた小さく呟いたはずだった。しかしやはり姫鉦は、そんな微少な空気の振動すらも知覚し、じゃあそれは何だ、と言ってきたときは、破門も心底驚いた。

破門は姫鉦の異能力は地獄耳だと勝手に判断し、左腕のは紙だと弁明する手前、マックスが二人の険悪なムードを遮るように言った。

「えっー、過半数を越えたので、クラス委員長は姫鉦さんに決まりましたーっ！！ はい、みんな拍手ーっ！！」

拍手をするのはチラとホラ。0組の者は誰がリーダーでも正直どうでもいいのだ。自分が過ごしやすい環境ならそれでいい。

「じゃあ、姫鉦さん。委員長に決まったということで、何か抱負をお願いできるかしら」

姫鉦は腕を組んだ。そして、少しだけ考えて口を開く。

その言葉はとても重々しく異能力者達に響くことになる。

弛んだゴムを一気に引っ張るように、狂おしいほどの、その言葉。

「全員で卒業」

何もかもが黙った。0組だけでなく、小鳥のさえずりさえも。風で揺れる窓の音も。偶然なことに、隣のクラスの騒音も。

姫鉦は良く通る声で続けた。

「我々は三年間をともにする仲間だ。辛いときは支え合い、楽しいときは讃え合う。ここにいる誰一人、欠けてはならない」

0組の者も、マックスも、覚悟はあった。異能力者として生きていくこの三年間。結局のところ無能力者と同じ人間だ、なんて言い訳はできない。

未だ根強く残る異能力者に対する偏見と反感。過激論者は、異能力者は政府に保管もしくは抹殺されるべきだという。

しかし、嫌が応にもさらけ出されてしまっ、その力。自分で自分のそれを憎んでいても向かい合わねばならない。それをプラスにするかマイナスにするかは、異能力者自身なのだ。

一人や二人、挫けることもあるだろう。自分にこんな力が無ければ、と思うだろう。

しかし、それすら受け止めなければならぬ運命にある、0組の者達。

「これから生きていく上で、自分の異能力が障壁となるときもあるだろう。だからこそ私は、このクラスを、0組を、自分が埋もれるための「逃げ道」なんかじゃなく……」

沈黙の中心から、光に繋がる『音』がする。

姫鉦の言葉が、異能力者達の心に深々と突き刺さった。

「家族と思えるような『帰る』場所にしたい。それが私の願いだ。そして、その結果として『全員で卒業』が在る」

姫鉦の真っ直ぐな瞳は、0組の全員をとらえていた。決してブレない、その視線。

異能力者を持っていたせいで差別や迫害された者も、中には必ずいる。例えばそれが今起こったとして、拠り所になるのは同じ異能力者の集まりである0組なのだ。

まるで家族のように共有できる空間。悩みも悲しみも。憎悪も罪悪も。そして、喜びも。

姫鉦は異能力者特有の悩みを理解した上で、『全員で卒業』と言った。誰一人脱落しないよう、願いを込めて。

「以上だ」

タイミング良く、ショートホームルームの終了を告げるチャイムが響いた。

「……は、はあい。ありがとう姫鉦さん。それじゃみんな。学校案内を始めるから、外に出てえ」

少しギクシャクとした声で、マックスが皆を外へと促した。

教室から出る前に、0組の生徒の大半は黒板に彫られた『姫鉦理

香子ここに参上!!!」に一瞥を加えていた。

\*\*\* \*\*

国立カルマ魔術専門学校。略称、カル校。中等部と高等部に分かれ、生徒数は一学年あたり五百名程度。ただ、入学時と卒業時の人数には毎年一致しない。

屋根にはソーラーパネルが設備され、敷地内では優に五十台は越える風力発電機が設置してある。

基本的に敷地は芝生が敷き詰められているが、体育が行われるグラウンドは土である。

校舎は最近新設、改装され、黒の制服と相反して白色が多く使われるようになった。予算が回らなかったために、一部古びたままだが。破門達の第一寮のように。

「でえ、ここが校長室。失礼しまーす」

二十名程度の行列を組み、マックスが校長室の扉にノックして入室した。

扉の奥は、まるで別世界だった。

まず部屋の中心にあるのが、球体の世界模型。全面金色で、非常にゆっくりと、浮いたまま回転している。

次に目に付くのが、部屋の隅から隅まで存外に配置された、電子機器の数々。汚く、塔のように積み上げられたその中には、なぜか冷蔵庫や電子レンジなど家庭電化製品も含まれていた。主には、生徒達にとってはまったく見たことのない物ばかり。

NORE式無輪バイク。無機物性テキスト発生機。自動古文書読解機に、NORE式ツール充電コンセント。先端工業の産物ばかり

でで、一年生にはさっぱりだ。

そして側面にはガラスケースに入れられた、色とりどりの化学薬品。三角フラスコに入っているのは液体のものもあれば、気体のものもある。

「吟斗校長」

マックスが表面上『のみ』はかわいい声を発した。すると、電子機器のゴミの山から、ひょっこりと吟斗が現れた。開発でもしていたらしく、頬は煤で少し汚れていた。

いつもの作務衣のまま、こちらに近づいた。

「おお、よく来たのお」

「……吟斗おお!!」

吟斗の名を叫ぶのは、我らが異端児もしくは問題児、破門愛。破門は行列を飛び出し、吟斗に向かって一直線に飛んでいった。速まる足。振りかざした拳。食いしばった歯を豪快に見せる。

「な、なんじゃ?」

問答無用で破門は吟斗を殴りにかかる。高速の左拳。

しかし吟斗は左手の裏でそれを流すように払う。一步だけ前進。破門から見て左側につけた。

吟斗は自身の左足を振り上げ、前のめりで体勢が不安定な破門に『膝かつくん』。だめ押しに襟元を押し。

あつという間に、破門の背中が地面に叩きつけられた。

「ぐあぁっ!!」

「何なんだ……いきなり殴りにくるなんて」

「てめえっ！！ くだらねー理由で部屋間違えてんじゃねーぞっ！  
」

「……あ、ああ。そういえばそうだった」

吟斗は、てへ、やっちゃった、とおちゃらけて言った。

その時ブチツという音が、確かに破門の頭から聞こえた。

「……ざっけんあっ！！」

破門は自分を跨いでいる吟斗に向かって蹴りを繰り出す。破門のインステップが吟斗のわき腹近くに直撃し、吟斗は横向きに吹き飛ばされた。

「いったいのお」

「これは侮辱だっ！！ 一発殴らねーと気が済まねえっ！！」

おらあと叫びながら破門は吟斗のいる方へ走り出した。

しかし、突如破門の顔面にめり込んだ、堅く、そう堅い拳。高速のそれによって、破門は吟斗のいる方とは逆の方向に吹っ飛ばされる。

スパァン、という音が遅れて聞こえた。

「こ、校長、大丈夫ですか！？」

「お、おお。マックス」

マックスが渾身の裏拳で、破門を電気製品の山へと埋もれさせたのだ。破門は粗大ゴミを荒々しく弾き、所々に絡まる蔓のようなコードを無理矢理引っこ抜いた。

「……いつてえ〜」

「破門君？ 仮にも校長なのだから、礼儀を知りなさいっ！」

「いやワシ仮とかじゃなくて校長なんだけど……」

マックスは両手を腰の横に当て、やんわり怒っているようだが実のところ筋肉は脈動し血管が所々に浮き出していた。

ところで0組の生徒達は破門の破天荒に啞然、圧巻、鳩に豆鉄砲だった。

「まったくもう……」

マックスは破門の元へ歩み寄り、制服の後ろ襟を持って破門をぶら下げ、そのままの状態の説明を始めた。

「え〜皆さん知ってると思うけど、こちらが油小路吟斗校長よ。吟斗校長がカル校の敷地内全域に無限結界を張っていて、外部からの侵入者を防いでいるの」

「ぜ、全域で……っ!？」

討窪が驚くのも無理はない。必然だ。

カルマ魔術専門学校の敷地といえば、一般大学並の大きさを誇っている。さらに建物もそれなりの高さがある。二十四時間休むこと

なく結界を張り続けるなど、常人のなす業ではない。

「はっ！！ どーだかねっ！！ 吟斗のことだから、どーせ手抜きなん……」

フリーッシュな破門にマックスの鉄拳。

破門は気を失い、首をダランと下げて眠ったように静かになった。

\*\*\* \*\*

「じゃあ最後にこれを見てもらおうかな」

マックスが足を止めたのは、カルマ旧校舎の手前だった。

木製の壁面は朽ち、ガラスは全て割れ、屋根にまで蔓が伸びていて、旧校舎の周辺だけやけに芝生の整備がされていない。

まるで雑草のように生える芝生群を軽くかき分け、0組一行は旧校舎へと足を踏み入れた。

「クジラさん。入れそう？」

「む、む、難しい」

女子の同級生にクジラさんと呼ばれる0組の巨人は、図体の大きさからどうも入り口から入るのは困難であった。結局、クジラさんは旧校舎に入ることはなかった。後々分かったことだが、クジラさんはその間カル校のカフェでショートケーキを食べていたらしい。

「うはぁ……雰囲気あんなぁ」

玄関は広がったが、古くさい雰囲気と漂う樹木の臭いによってそこは窮屈に思えた。所々開いたままのげた箱の中には蜘蛛の巣が蔓延り、玄関先の石畳には亀裂が雷の軌跡みたくなってしまうている。

「いつてえ〜」

破門は未だに痛む頭を押さえながら、靴のまま廊下に出た。四十いくつかの足音が、ギシツ、ギシツと不協和音を奏でる。割れたガラスの隙間から漏れる光は、淀んだ空気の軌道をくつきりと映していた。

五分くらい歩いたところで、マックスがとある教室の前で立ち止まった。

「これ、何だか分かる人」

マックスは0組一行に振り向いて、質問を一つ投げかけた。

マックスが指さすその先の先。

廊下の端にぽつんと、まるでポストのように置いてあるガラスのショーケース。

中には、困いガラスの影でぼんやりと霞んで見える、古びた紙。

「カルマの日記です」

「正解よ、姫鉦さん」

律儀に手を上げ、行列の先頭にいた姫鉦が答えた。蛇足だが、破門が一番後ろで大きな欠伸をしていた。

「これがカルマの日記のページ目よ。春休みの課題であったと思

うけど、有名な「ピアノの音」というやつね」

カルマの日記。全十ページ。

わずか十枚しか存在しないが、行方が知られているのはたったの二ページ分しかない。一つはカルマ魔術専門学校に。もう一つは世界政府の本拠地、アイマスト王国の施設に。

「まあ世界文化遺産にも指定されてるものだからね。これは勿論レプリカよ」

白だったはずの紙の表面は年季によって萎び、紙の枠は破ったように存外なそれだった。インクも若干掠れ、簡単に燃えて消えてしまいうさだ。

とはいっても、その外見は忠実に再現された模造品。右隅にはちゃんと『レプリカ』と書いてある。

「まあ本文は魔伝古文でも扱うし、先に進むわよ」

マックスは向かいの扉を開けた。その際の軋めいた音に、何人かは耳を塞いだ。

「さあ入ってえ」

教室の中はこざつぱりとしていた。

今と違って机や椅子が備え付けではないし、床も木目がはっきり分かる木材である。カーテンは閉め切られ、暗闇の中を0組はのぞき込んでいた。

一体何があるというのだ。

「見てもらいたいの、これ」

マックスの人差し指がポウと光を発する。指の末端で火系統の属性能力を発動させることで、即席マツチの完成。そしてその『まるでマツチ』をマックスは天井にぶら下がるランプめがけて投げつける。

そして程なく着火。

微々たる炎を数十倍にも燃え上がらせ、教室全体を照らし始める。

「アア……ア、アア……アア……」

目映いその空間の中で、全員が見たものは。

「彼の名は、螺子むしはずれ。カルマが創り出した、唯一の有機生命体

よ

あまりにも。

異常。

震えるほどに。

怪物。

決して人でないような人。

何か。

破滅的外観。

それ。

「何……これ」

0組のとある女子がそう呟いた。

目の前にあるのは巨大なガラスケース。

そしてその中に、ホルマリン漬けの一人の少年。

ちやうど自分達と同じくらいであろう年齢だ。

しかしながら、見た目があまりにも酷すぎる。

顔面にはいくつもの縫い目。右耳は爛れたように溶けていて、下唇から下の部分が崩壊している。喉の気管から肺に渡っては剥き出しになっており、中心では心の臓物が鼓動。腕は所々不自然な方向を向き、指はそれぞれ八本ずつある。両足は腿の部分がくっついていて、膝から下は肉片をぶら下げながら枝分かれしていた。

「……………アア……………アア……………アア……………」

これでも生きている。皆と同じように。

眼球は白目と黒目が反転しており、黒の海に白の船が浮いているように、あちらこちらと辿々しい視線だった。

「彼は私たちと同じように、異能力者よ。コードは『タブー』」

????? 不老不死の力よ。

禁忌の力を与えられた螺子はずれば、生きているのか、死んでいるのか。いや、生かされているのか、殺されているのか。

心のない体は、果たして自分等と同じなのだろうか。倫理的な見解にまで思慮を及ぼす彼は、決して人でないような人なのだ。

「こんな姿でも生きている。これを生と受け止めるか死と受け止めるかは人の自由だと思っけど、必ず思うところはあるはずよ」

貴重な経験はしておくものよ、とマックスは続けた。

生と死の狭間。それがガラス一枚とホルマリンを挟んで存在する。目を当てることも、螺子はずれの声に耳を傾けることも、いわんや触れることなど、はばかれるほどだったが。

「……キモオ」

その時破門の発言がメガトンパンチよろしく、その場の空気を見事に粉碎する。

それほどまでに、破門の喉のお役人さんは怠惰野郎であつたらしい。

「……や、やぶ、と君？　そ、それだけかしらあ？」

「いやだつて、キモいでしょ」

螺子はずれの口から定期的に漏れる大量の、血。それは一度上の方へ送られ、テキスト還元を施した後、もう一度螺子はずれに供給される。全身くまなく取り付けられた管を通つて。

「さっきから声うつとーしーしよ。早く戻ろうぜ」

マックスは、句を絶つた。

螺子はずれを見て怖じ気づかない生徒は初めてだつたからである。どんなに能力に才能のある奴だつて一度くらいは。

目を疑うものである。

しかし、破門という無神経男はその言葉の通り、神経がまるでなにかのように感じるところは皆無なのだろうか。今年の生徒会長も、一年のときは言葉を失い、目を当てることすらできなかったというのに。

彼はもしかしたら金の卵なのかもしれない。そうマックスが思った矢先、隣の千宮という少女も、汗一つかかずに螺子はずれを凝視していた。

決してそらさず。平気な顔して。

よく見ればその二人だけではない。姫鉈含め何人もの生徒が螺子

はずれに視線を浴びせかけていた。  
マックスの目が『驚愕』から『メタ驚愕』へとシフトした瞬間だった。

「……今年は粒ぞろいかしら」

「あ、あかん。俺もう無理いっ!」

討窪は手のひらを口にあてがい、真っ青な顔色で教室を飛び出した。

これが正常なリアクション。

大丈夫。討窪君はその反応で合ってるわ。一部がちよっと、いやかなり異常なだけ。

さて、あまり吐き気を催されても困るし、そろそろ帰ろつかしらね。

「あっちい。千宮あ、今日銭湯行こうぜー。どーせ辻崎の部屋行けねーし」

「……うん」

「飯はコンビニでいっかあ」

何事もなかったのように出ていく0組を見て、マックスは頼もしく感じた。そして同時に沸き上がるワクワクとドキドキ。

何をやらかしてくれるのか。楽しみだった。

今回に限り、少しだけ破門の背中が大きく見えた。

第十話 猪突チャージ（前書き）

読んでくれる方に最大の感謝をこめて。

タイトル難易度

## 第十話 猪突チャージ

カル校には花畑があり、近くのビニールハウスではメロンをつくっている。また、森林エリアなる域が存在し、主に実戦演習用に使っているらしい。

桜が大いに咲き乱れる。掃除係のおばちゃんは、落ちた桜の花びらを屋外用ギア式掃除機で荒々しくも回収をしていた。

「わりい。遅れた」

その辺りに設けられた多目的ホールに、破門は来た。

しかし勿の論で盛大に遅刻。時計の長針が一周するほど遅れてやってきたのだ。

いつものは辻崎に対して使う常套文句も使ってしまったている。

「遅れたじゃないですよー」

今回「能力測定」とやらを理由に多目的ホールへ赴いた。旧校舎の見学終了後、昼休みを挟んで午後からの能力測定のためだ。

多目的ホール内のある一室。破門がその入り口の扉を開けてまです目に飛びび込んできたのは、白衣を着た桃髪の少女だった。

……少女？

「まったくー。ではー、そこに座ってくださいー」

破門は少女に導かれた。

破門は、ちょうど病院のように向かい合わせになっている椅子の一方に腰掛けた。辺りはメカニックな教室のようなところ。配管が

剥き出しで、さつきから所々で蒼い閃光が壁を這っている。

能力測定は、一人一人その能力に合った検査方法をとる。そのためにまず教員と個別診断を受け、最適な測定の方法を決定する。

「よっこいせ。では診断を、始めますー。破門君ですよねー？」

破門の測定を担当する教員は、今し方目の前に座っているどう見たって小学生としか思えない、少女だった。足だつて床に着いていないし。しかしそれよりも抜群に気になるところは、彼女の桃毛を突き破るようにそびえ立つ、二つの?????

「担当の保健医ですー。よろしくお願いしますー」

?????ネ、ネコ耳……? ?

「よ、よろしく……」

さつきからピコピコ動いているそれは、耳だろうか。いや、違うか。ちゃんと目のすぐサイドに耳あるしな。それに本名は？ 保健医って言われても。

「破門君ー。ちょっと万歳していただけますかー？」

色々不審な点はさて置かれて、またもよく分からないことをさせられた。

保健医は白衣のポケットから球体の機械を取り出した。

それはテキストを送るだけで発動する、便利なツール商品の一つだ。ちなみに破門は加熱用ツールと発光用ツールを持っている。

保健医が持っているのは測定用ツール。静止した対象を三次元のスペックで高速記号化し、シミュレーションと演算を繰り返す。そ

うして対象の骨格、脂肪率、代謝、血液状態身などを把握し、身体検査を済ませるのだ。

保健医は測定用ツールを破門の頭上へと放る。すると測定用ツールは青色の発光し、浮きながら破門の体を照らした。

「はいー。もう手は下げているですよー」

「はあ……」

「破門君、身長百六十九cm、体重六十二kg。少し栄養摂取に偏りがありますねー」

ではこれから能力測定の診断を始めますよー。保健医は椅子に座り直してそう言った。プラプラとぶら下がって落ち着きのない彼女の両足と、ピコピコ動いている両耳が気になって仕方がないけれど。

「破門君の異能力コードは『リズボルト』ですねー。紙を操る能力ですかー」

「……」

「コードバンクで調べてみたんですけどー、どうも今まで『リズボルト』をもった生徒は一人もいなかったんですよー」

コードバンク。

あらゆる異能力が載っている、いわば異能力の広辞苑。大抵の場合はそれに記載されているが、稀に『新たな異能力』も存在するため、全てを網羅しているわけではない。カル校のコードバンクは図書館に設置されており、生徒及び教員の異能力がのっている。

能力測定において、コードバンクは測定方法を決定するのに重要

となってくる。過去に行われた測定方法に則すればそれで済むのだが『新たな異能力』に関しては『新たな測定方法』を考えねばならなくなる。

「紙を操るといったら愛子さんみたいですわねー。名前も愛ですしー」

「愛子……？ 誰のことだ」

自分の下の名前が出た途端、破門は目の色を変えて体の毛穴という毛穴から殺気を放出した。ところが『愛子』という言葉が先に気になった。

「知らないんですかー。では知っておいた方がいいですよー。テストによく出ますしー」

「だから誰なんだよ」

「この学校の創設者、カルマの奥さんですよー」

「……へえ」

破門の『いちへえ』は置いといて、カルマの日記ページ目にそれはのっている。

?????最愛の妻、愛子とともに私は学校をつくった。

愛子という名が出たのはこの一文だけであり、出会いや馴れ初め、子供の有無などは一切不明である。もしかしたらカルマの日記三ページ以降に書かれているのかもしれないが、いかなせん行方が分からないから謎のままである。

「まあそんなことはどうでもいいんですー。早速測定方法なんですかー」

保健医は破門の資料とにらめっこしながら言った。破門の力の測定には何が必要なのか。これから役に立つ使い道を拓くためにどのようなことに留意していけばいいのか。特徴。変則性。破門のテキスト量。

あらゆる情報から保健医は最適な測定をはじき出す。

「リズボルトの場合、収束と発散が必要なんだと思いますー」

「収束と発散……?」

「はいー。紙を収束させれば剣にでも盾にでも、はたまた手裏剣にもなりますー。紙を発散させれば広範囲に渡る攻撃も可能ですー。物を運ぶときにも便利になりますー」

そして、それを使いこなすには緩急が必要だと言った。

単に紙をばらまくのではなく、紙で攻撃範囲や守備範囲を徹底して浮遊させる。単に紙を固めて棒にするのではなく、棒の一面を鋭くすれば剣にもなる。

さらに効率も重要になってくる。

「では収束と発散を測定しますねー」

「え、ちょ待った。意味がよく分からない」

「大丈夫ですよー。ルールに従っていればーそれでいいんですー。あっちの測定室Dに移ってくださいー」

そう言って保健医は椅子から軽く飛び降り、短い歩幅でテクテクと測定室Dの前まで歩いた。そして腕を上方へ軽く伸ばし、鉄の分厚い扉を開いて破門に入室するよう促した。

「どうぞー」

銅像ー。そう聞こえないこともない発音で保健医は言葉を発し、腕をバツクオーライ、バツクオーライと振った。

「……はあ」

破門はこれから何が行われるのか分からないまま、測定室Dに注意深く入っていった。

見渡す限り、広々とした空間だ。机や椅子、パソコンとかの機械類も見当たらない。天井は高く、幾つものライトがこの真っ白な、何も無い部屋を照らしていた。

「んだ、ここ」

破門の音が奥まで響く。反射したそれが破門の耳に入ろうとした直前、バアンと扉が閉められる音がした。

閉じこめられた？ いや違う。それは突如目の前に現れたモニターがそれを教えてくれた。

その画面に移っているのは、ネコ耳だけ。よいせ、よいせ、と愛らしい声が聞こえた後、モニターにピヨコンと保健医が顔を昇らせる。どうやら台か何かを持ってきてそれに乗っいたらしかった。

「はいー。ではこれから測定を始めますー」

「おいおい。アンタはどこにいるんだよ」

「私ですかー。私は隣の観察室にいますー」

「いつの間」……」

「じゃー簡単なルールを説明しますねー。これから飛び出してくるラジコンコウモリを撃墜して行って下さいー」

「ラジコン……？ コウモリ……？」

「死なないように頑張ってくださいねー」

怪我させる気満々のその笑みは、軽く破門の背筋を舐めた。

モニターが消える。

さっきからよく分からねえ。測定方法？ 収束と発散？ 何の話だ。それに死なないようにって、殺すつもりかよ。

正直なところ、ダルい。このまま放棄してもいいかもしない。

「それじゃー測定、始めますー」

声だけが聞こえた。

ルールはコウモリを撃墜するだけ。そんなんで何が分かるんだよ。中等部の時はこんなの無かったし。

やる気が今一沸かない。急に撃墜しろなんて。急にだよ。

「はあーっ……」

ため息一つ、床に敷いた。

突っ立ってても意味がない。不本意でも、ラジコンコウモリとや

らは破門を殺しにかかるらしい。保健医の比喩なのかもしれないが、疲れることに間違いはなさそうだ。

仕方ない、とはこのことなんだろう。

重い首をくねらせて、ポキンと音を立てる。そうして、深呼吸。ダルいけど、まあ、ここに立つからにやあ何かやらねーとな。よし。

「じゃーねー……うしっ!!」

破門は右拳を左手の平で受け止めた。

とりあえず闘魂注入。一応気合い十分。何となくエンジン始動。ともかく、何でもきやがれ。

保健医は破門の目が真剣になったのを確認すると、赤いボタンを一つ押した。その時、破門の後方で気付かれないように小さく天井が割れる。

そして現れるラジコンコウモリ。NOREを使った自動操縦型のラジコンだ。ただ、市販のものと違うのは。

羽に刃物がついていること。

カミソリなんて目じゃない。通販でやっているアルミ缶も楽々切れちゃうあの包丁も比ではない。幾度となく研がれた剣のようだった。

「……」

破門は集中する。

あらゆる気配を感じ取れ。テキストの流れ。空気の動き。僅かな音域。自身の鼓動を除いた辺りの気配。

ラジコンコウモリが高速で動き出す。

刃をライトに輝かせ、剛速球の如く破門の背中を狙う。

そして一瞬の出来事。

「あめえ。そんなんで俺がやられるかよ」

コウモリ真つ二つ。

「おお。やりますねー」

テキストで刀の如く鋭くした紙を操り、コウモリをぶった斬ったのだ。背後だろうと関係ない。感じ取ることができたなら、破門の攻撃範囲はほぼ全域だ。

またしても沈黙が訪れ、次はどこからくるかと考える。

分かる。感じ取る。

右だ。

「ほほー」

右方向からやってきたコウモリ二体を最初と同じように紙で斬り裂いた。その断面からは基盤やらコンデンサーやらが吐き出される。破門は舌で上唇を軽く舐め、左手の関節に溜まった気泡をポキポキと鳴らす。

「こんなもん、かつ!？」

パンッ! と合掌。テキスト集中。そして上から急転直下でやってくるコウモリ三体を正面から切断する。ガシャンと部品が破門の近くに落下してくる。

今のところテキスト消費は少ない。テキスト周波も安定しているから操作に乱れが現れることもない。

使うべきときは使う。使わないときは使わない。これぞ緩急の極み。

「んっ!?!」

はっと気づく。上を見ていたから、下への注意が散漫になっていたからだ。

破門の足首を狙って、二機のコウモリがクロスするように低空飛行している。

突差の判断でジャンプ。それはまるで長縄を飛ぶ感覚に似ている。

「剣紙つるまきがみっ!?!」

左腕の紙を高速で収束させ、それで剣を模造する。白の剣を破門は手にとり顔の前まで持ってきて、翳かざす。

狙うは交点。コウモリとコウモリが重なった、その時だ。

一突きで二機。つまりは一石二鳥。

剣が二機のコウモリをまとめて貫き、地面に刺さった。

破門が着地をしようと足下を見ていたとき、後ろからの気配に感づく。

「うおっ!?!」

左腕に接着する紙を硬化。それで何とか背後からの攻撃を、振り向きざま防いだ。

ガキンツと歯車が軋むような音の後、破門はコウモリの勢いにやられ、後方へと吹き飛ばされた。

しかしすぐに印を組む。片方の人指し指と中指を他方の手でまとめて掴み、テキストを剣紙に送る。刹那、剣紙の真上にいたコウモリは四分割された。

「危ねー」

軽く冷や汗。

「もうウォーミングアップはいいですねー」

皮肉にしかとれない、少女の甘い声が鼓膜を揺らす。

なるほどこれは小手調べか。それに、確かにコウモリは本気で自分を攻撃してくることが、今までで分かった。

次からは、覚悟も伴うわけだ。

保健医からのアイロニーに負けじと、破門は声を張る。

「はっ！ 何でもきやがれっ！！」

「いい度胸ですよー」

ポチツとな。それとな。

気軽に黄色いボタンが保健医の指で底に沈む。

待つことなんてない。だってすぐだから。

絶望するかも。だから覚悟があるんだ。

逃げたい気持ちがあるように、立ち向かう気持ちもある。けれど

その灯火を、これを見てもなお持っていれるだろうか。

「……」

床以外の面が全て開く。そこから現れるコウモリの群。

いや待て。何体いる。視界に入りきらない。

四面楚歌。上もあるから五面楚歌であろうか。

おびただ夥しい。そして騒がしい。

幾千の機体から発せられる機械音は、もう破門の耳を塞ぐ一種の攻撃だ。

巢穴近くの蟻なんかより、カマキリの幼虫の群なんかより、人の小腸の襞なんかより、もっと多くて、気持ち悪いくらい蠢こごめいている。

「大丈夫ですかー」

「……は？ 少ねーなあ。これっぽちかよ」

最後に、がっかりだぜと破門は呟いた。

無論やせ我慢。言ってみたに過ぎない。

しかし倒せない数ではない、かも。テキストを全て使えば『あの技』をもつてして一掃できる、といいな。自信はある、っぽい。

「ふうー」

『あの技』を使う。

破門は左腕を高らかと掲げ、目を瞑った。

体中のテキストを左腕へ。集中しろ。あらゆる知覚を排し、テキストを送ることだけを考える。

嵐は一瞬。

さあ。

見せつけてやる。胸をはる度胸を。本気の覚悟を。

この??????

「桜紙さくらがみ」

?????俺の力を。

## 第十一話 天神メーカー（前書き）

ここで更新を滞らせていただきます。

今まで読んでくれた方、本当にありがとうございます。

復活は2011年3月8日（合格発表の日）です。

今話のタイトル難易度

おそらく今まで一番かっこいいタイトルだ。

## 第十一話 天神メーデー

「おお辻崎やん」

「……何だ、討窪か」

辻崎はベンチでブラックコーヒーを飲んでいた。

コンクリートで舗装された道を歩き、軽く手を挙げた討窪。脱ぎ癖が発動しているらしく、ワイシャツのボタンを豪快に開けて鎖骨付近のペンダントが優しく光っていた。

「昨夜は大変やったなあ！」

「やかましい」

討窪はポケットに手を差し込み、百円玉を自販機に入れた。スカッシュレモンを迷わず選び、腰を屈めて吐き出された缶を拾い上げるように手にとった。

「能力測定は終わったんか？」

「ああ、異能力者と違って時間はかからないからな」

「ふーん。破門はどないしたん？ 今日是一緒ちゃうの？」

「ああ、破門なら多目的ホールだと思う。珍しい力だからな。時間がかかるんだろっ」

討窪はスカッシュレモンの蓋を、伸びた爪を使って開封した。プ

シユツと缶内部の二酸化炭素が溢れた後、シユワシユワと躍起だつ炭酸飲料を喉に流し込む。能力測定で疲れたのだろうか、まるで残業帰りのサラリーマンがビールを飲んだみたく討窪は、ぷはーっと嬉しそうに息を吐いた。

「辻崎、よくブラック飲めるな。俺には絶対無理やで」

辻崎はその言葉を左耳でとらえながらブラックコーヒーの缶の縁に口をつけた。

曰く、慣れれば旨いもんさ、と。

辻崎は立ち上がった。そして大きく背伸び。猫が背を引き延ばすように体を空に向けて立ち上げる。

「んんーっ……はあ、いい天気だな」

\*\*\* \*\* \*

「はあーっ……はあーっ……くっ、はあ……はあーっ……」

汗を左腕で拭った。吸水性抜群のその腕はとめどない発汗にも耐えていた。

「すごいですねー」

巻き起こった竜巻。通過した台風。津波も巻き起こした神、いやいや紙の逆鱗。

まるで爆破テロでもあったかのように、測定室Dは荒んでいた。

「桜紙」を使うところなる。

大量のラジコンコウモリは跡形もなく木っ端微塵になっていたのだ。桜の如く舞った幾万の紙は、あらゆる方向から飛翔し旋回し追撃し。

気づいたらあつという間だ。

それはハリケーンのように激しく、素早く、強烈に空間を飲み込み、敵とみなされた対象は粉々に一匹残らず斬り裂かれた。

どうだ。驚いただろ？ 疲れの表情を笑みに変え、片目だけ閉じてニヒルに笑った。

「はあーっ……はあーっ……はあーっ……」

しかしまあ、やべえなこりゃあ。

破門は全てのテキストを使いきった。疲労困憊しているのに、睡魔が瞼を襲う、そんな感じ。

膝で両腕を支えるも、全身に力が入らず、肩は重く、足は痺れ、さつきから動悸が止まらない。これが限界状態、というものだった。

「はあ……はあ……なっ!？」

突然横からラジコンコウモリが飛んでくる。

ギリギリのところまで致命傷は避けたが、肩を斬られてしまった。

しかし、痛み等よりもまだ続けるのか？ という疑問の方が先に破門の脳を支配した。いやはや殺す気か。死ぬまで続けるのか。

頭に浮かぶ保健医の笑顔が、異常なまでに恐怖を覚えさせる。

「まだ……はあ……くんの、か」

保健医が言うには『新たな異能力』の測定はかなり『酷』らしい。何でも、正確な情報や数値が必要のため限界まで挑戦してもらうのだとか。

それを先に言ってくれ。  
立っている気力すらなくなりかけている破門にはむごい攻撃の連発。

三機のラジコンコウモリが破門めがけて飛んでくる。

徐々に近くなる機体。敗北がもう目の前だった。

破門はそれでも何とか左腕を翳し、荒ぶる喉を抑えて食いしばった。刹那、防きれず吹き出す血流。右肩と左頬の血が、床に滴る。血と汗が混ざり、体中の熱気がエマーゼンシーコールを発している。

「はあ……はあ……まじ、かよ」

\*\*\* \*\* \*

「ところでさ、辻崎は彼女とかおるん？」

「はあ？ 何だよ急に」

空になったスカッシュレモンを手に掲げ、討窪がコミカルに質問をした。対し男同士の恋バナをさほど好んでいない辻崎は、警戒心を強めるように少し引き気味姿勢になった。

「だって辻崎イケメンやん？ 女の一人や二人、おってもおかしくないやろ」

「いねーよ。残念ながら」

「へえ。何か意外やなあ」

シュツと空き缶をバスケの要領でゴミ箱に投げ入れる。  
おや失敗。

取りに行くのも面倒だが、そのままというのちょっとアレだ。だから討窪はマグネイドでもう一度空き缶を自身のもとに引き寄せ、再チャレンジ。

あれ。またも失敗。

「お前は？　そついうのないの」

「なんやあ？　気になるかあ？　どうしても知りたいっていうんやったら教えてやらんこともないでえ？」

「……何か無性に腹立つな」

その時、辻崎は討窪の背後に千宮の姿を見た。遠巻きからでも分かる大きな瞳の青色と金色の髪色は、緑の多い中庭ではよく目立っていた。

辻崎が千宮に軽く声をかけようとする、あちらが先に手を軽く振ってきた。

「破門は……？」

「あつ、千宮も破門の居場所知らないのか？」

「うん」

千宮はいつもの目つきで討窪をチラリと見た後、キョロキョロと辺りに視線を配った。

しかし結局見つからず。

最終的には三人の間で、破門はどこかで寝ているのだろうという結論に達した。

そして『わりい、遅れた』と言ってそのうちやってくるだろうと。

\*\*\* \*\*

「ぐあぁっ!!」

強く背中を地面に打つ。

ただただ防戦一方で、反撃の余地もないように思われる。目の前で浮遊するラジコンコウモリの刃から、破門の血がいくつも滴った。破門は右腕の肘辺りを押さえながら這い蹲る。転倒の際に唇を切ったのか、唇の脇から細い血の道ができていた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「もう終わりですかー?」

いくらなんでも入学早々これはきつすぎる。卸したての制服がもうすでにボロボロだ。刃物のせいで破かれるわ、血が染み込むわ、汚れはひどいわ。

しかし破門の毛頭にあるのは、決して敗北感だとか諦念のそれではない。

むしろ。そう、むしろだ。

別段、勝利の確信も予感もありはしなかった。それでも、負けなと思う強がり似た根性は、疲れ果てた破門の体を突き動かすのだ。

「はぁ……はぁ……諦めるかよ……」

「おやー？」

保健医が異変に気付いた。

監視室の窓が揺れているのだ。

風でもない。どこぞやのいたづらっ子が騒いでるわけでもない。

「諦めねえよ……ぜってえ」

「これはー……」

ピリピリと空気が保健医の肌にしみた。痛いほどに細かい粒子が全身を縛っている。

視界が、急に目映い光を当てられたかのように見え辛くなった。

破門が立ち上がる。

ドロドロに汚れた身を屈ませながらも猫背のまま、頼りない二本の足で体を支える。

「……俺はあー！！　こんなんでっ！！」

破門の叫び声が空間を飲み込む。猛獣にも劣らないその喧噪をひっさげ、稲妻よりも荒々しい気配を纏い、ナイフのように鋭い目つきで睨む。

その視線はどこにも焦点を合わせていなかったが、確かに破門は空間をとらえていた。

「諦めねええええっ！！！！」

テキストが発生。微々たるものでも、体中から温泉のように沸き上がる。

活力と迫力とともに。

「俺を舐めんなあつ!! 誰がラジコンごときに負けるかあつ!!  
! どっからでも来やがれつ!! くるやつ全部ぶつ飛ばしてやる  
ぜっ!!」

急に元気になった破門。

そんなばかな。保健医はそう思った。

だってテキストはもう底をついたはず。テキストは身体エネルギーと精神エネルギーの合成で生まれる。あれだけの大技をしておいて、身体エネルギーも精神エネルギーもあるわけない。にも関わらず、あいつは立ち上がった。

雄叫びをもつて死の恐怖を払いのけた。

間違いない天然だ。天才ではない。うん。天然だ。

「さあつ!! ばつちこおおいつ!!」

破門は両腕を広げた。

空っぽの器をスコップで掘り進め、掘り進め、掘り進め。やっと見つけた石油の在処。一気に吹き出す。地下に潜った体ごと地上へ運び、太陽が見える。

覚醒だ。

圧巻されつつも保健医は期待の意を込め、笑いながら勢いよく青いボタンを押した。

寸後、破門の目の前の壁から巨大なラジコンコウモリが迫り出してきた。ちょうど中等部の体育祭であった大玉転がし。その大玉と同じくらいのサイズだ。ブラックな球体に、羽という名の大鎌が取り付けられただけのロボット。あんなもので斬られたら間違いない。大怪我もしくは死亡だ。

なんだこりゃ、と破門は呟いた。

けれど、問題ない  
なんでもきやがれ。

「よっしやあ……」

破門は左腕の裾を捲り、肘まで余すところなく貼り付けられた大量の紙を露わにした。

そしてサウスポーのように大きく振りかぶり。

「行くぜっ！！ 驚津紙っ！！」

破門が左拳を突き出すのと同時に、目の前のコウモリと同じくらいに巨大な紙の腕が出現。それは加速度的に伸び、一瞬でコウモリの球体を包み込む。文字通り驚掴み。

ズガンと鈍い音を残して、羽のついたブラック大玉を壁に衝突させる。そして紙を分離してその壁に固定した。

「へっ！！」

今のは結構テキストを消費する。結局のところ、テキスト量があっても使うそれも多ければ平均的能力者とさほど変わらない。少し派手に能力を使えばあっという間にテキストが底をつく。

破門は鼻の下についた少々の汗を拭った。

ちよつとの余裕。それは油断を生む。その発生量の分、裏切られたときの反動は大きい。

「なっ！？」

「甘いですねー」

羽と思われる大鎌が球体上を駆け回り、破門の紙を一蹴するかの  
ように斬り刻み、ふりほどく。

そして、ロックオン。

気持ちもそぞろにその黒が破門の視界を支配した。

目と鼻の先。そこにもう、黒の世界があつた。

「ぐっ！！」

吹き飛ばされた。さきほどまでいた位置が一気に遠ざかる。ゴロ  
ゴロと体が何度も前転と後転を繰り返す。

幸い鎌の羽に斬り裂かれることはなかったが、ガードの際に衝突  
した両腕は今のところ痺れて動かない。

顔を上げると、そこにコウモリの姿はなかった。

どこにいった、と考える間もなく辺りの影に気付く。

これは、奴が上にいるということだ。

「危ねえっ！！」

破門は飛び込み前転で緊急回避。一秒前まで自分がいた場所の床  
は砕け、軽く円形のクレーターを形成している。

間一髪。しかしながら、破門はただ避けたわけではなかった。

パンと音をたてて印を結ぶ。テキスト発動。

「貼紙はりがみっ！！」

破門の声とともに球体が動かなくなる。まるで縛られているかの  
ように、身動きがとれていない。

破門はバカにした様に微笑んだ。

「ほほー。避けたときに床に……。なるほどー」

紙が接着剤の代わりに果たしていた。避ける時に真下に絨毯の如く紙を下に敷き詰め、テキストによって紙の性質を粘着性のある両面テープ、もしくはボンドのようなものに変えていた。

ただ『鷲津紙』同様、これも多大なテキストを使う。

「さあて、どーすっかな」

動けなくしたのはいいが、どう始末しよう。

一応破壊するほどの威力を持つ技はないこともなかったが、どうもテキストが足りないかもしれない。中途半端に発動したら失敗の上に疲労で動けなくなる。そうしたら根性うんぬんに関係なく、ゲームオーバーだ。

思慮の上に思慮を重ねる。

しかし、怪訝にもなっていた顔が一気に血眼気味に崩れた。

「なっ!?! 飛ばせるのかよっ!?!」

巨大球体コウモリは、自身の羽を破門めがけてぶっ放した。

風を斬るスラッシュ。凶器と化した上弦の月。ライトの反射で輝く二翼はもう目の前。

「くそっ!! 盾紙たてがみっ!!」

破門は若干麻痺しかけている左手を前に突きだし、その平を羽と対峙させる。そして台風のように勢いよく紙達が巨大な盾を形成する。

ガキン、ガキンと二つの衝撃。一線の火花が幾つも散る。方向を違った二つの羽は破門を過ぎ、後方の壁のやや上の方に刺さった。

しかしそれを確認できるほど、破門に余裕はない。

「まじかよっ！！」

盾と破門の胴体、その中間辺りの床が開き、高速のラジコンコウモリがアツパーのように破門を襲う。

反射神経フル動員でギリギリ回避。頭を後方へ反らす。

それでも羽の射程圏内に変わりはなく、破門の右頬はペンで描いたかのように、一本の赤い傷跡ができてしまった。

「ちっ！！ 下からとかつ！！」

仕返しに、紙をナイフにしてコウモリをしとめた。

噴き出した血を拭う。今ので復活したテキストを使い果たしてしまった。

腕が痛い。袖が血で滲む。心臓が連打している。

疲労困憊。まさにそれだった。

はぁ、はぁ、はぁと息を荒げて。

「うおっ！！」

背後のツインナイフに気付く。

盾紙で弾き、壁に刺さったそれが一度旋回し、再び破門に襲ってきたのだ。

テキストが蘇らない。

紙でもう対処できない。

ならば。それなら。すっところどっこい。

「うほおあっ！！」

アホみたいな声をあげて破門は地面と水平になるように飛び込ん

だ。目指すは切っ先の狭間。生きる可能性。扇風機のウイングに当たることなくビー玉をすり抜けるさせるかのよう。

破門は二つの乱雑に変化する隙間にタイミングよく飛び込み、何とかそれを回避したのだ。

もうこれは奇跡体験。

「はあ、はあ、はあ、あ、危ねえ」

『貼紙』の効力が消えた。

やつが動き出す。帰ってきた羽を備え付け、再び破門を襲いにやってくる。

多分避けられない。止めることも出来ない。

こんなところでようやくとカル校の怖さを渗むように理解した。

そりゃ昔死ぬ生徒もいたわけだ。

破門は目を瞑った。

そして蘇る『あの日の記憶』。度の高い眼鏡をつけたようにボヤケる、その視界。ボケボケの世界で、その目が捕らえたのは一人の男。

?????愛。分かるか。

遠い記憶。家族を知らないけど、いや、家族を知らないから、目の前の男は家族だと思いこんだ。

顔が見えない。そこが頭部なのかも分からない。そもそもこれは俺の視界なのか。それすらピンとこない。

??????腕力。財力。権力。それよりもっともっと大切なこと。

頭の中で言葉が紡がれる。俺の言葉じゃないが、俺の言葉のように近く感じる。

?????それはな。

破門は括目した。そして巨大ラジコンコウモリを睨む。テキストが無いって？ そうかい。だからどうした。やってやる。こんなところで死んでたまるか。

瞬時に巨体が動き出す。一コンマで縮まる距離。ゼロ距離でもなお、破門はバカにしたようににやけた。そして。

「うおおおおらあっ!!」

史上最強の頭突き。

かつてないほどの衝撃。

靡く黒の髪と制服を押し退け、ゴウンという低音が唸る。噛みしめた奥歯。瞑らぬ瞳。踏ん張る両足。全身のあらゆるパーツがその石頭に精力を注ぐ。

刹那、割れたのだ。

大丈夫。

コウモリの方が。

鈍く剥がれたその球体は、ボキンボキンと汚く二つに分かれる。

「はあ、はあ、はあ、へっ!! どんなもんだ……」

ボヤケた男の言葉が、痛くも心地よく胸に響く。

?????諦めない気持ちだかな。

破門は歯を豪快に見せて笑い、胸に拳をドンとあてがった。そして霞んだ記憶にガッツポーズを決めた後。

フラッ。  
そしてバタッ。

第十一話 天神メーカー（後書き）

では。

## 第十二話 ビリペクト（前書き）

久々の更新となります。

読んでくれる方、本当にありがとうございます。

タイトル難易度

何かもう凝りすぎてる

## 第十二話 ビリペクト

黒から白へ、視界の彩色が変わっていった。

しかし強い光で、再び闇へと引き返す。

小さな瞬きを何度も繰り返し、やっとのことで僅かながらに明るさを手に入れた。

「……ん、んん」

ここは……確か、えっと、どこだったか。

「やっと起きましたかー？ もー夕方ですよー」

破門は声のした方へ顔を向けた。

声の主は壁に正座している。

「いやいやそうじゃない。」

破門が横になっていたから、そう見えただけだった。

「えー……あぁー」

若干思い出してきた。

変なコウモリらしき物体を斬って、斬って、斬って、デカイやつに思い切り頭突きを食らわして。

疲労がピークに達していたのか、頭突きによる衝撃のせいか、それともそのどちらでもあるのか。

原因はそれなりだが、結果的にはぶっ倒れたわけだ。

ほらもう傷もこんなに。

はない。

「ん？ あれ？」

破門は自分の体を見た。それはかなり不可解なもので、服は破けているのに、傷口はない。血痕はあっても、出血はしていない。まるでボロ着を単に着ただけ、のように思える。

自分の体の正常さ、ともあれ異常さに気づいた破門に、保健医はそつと声をかけた。

「あーそれはですねー、私が治療したんですよー」

「……治療能力って、こんな進歩していたっけか」

破門は類にあつたはずの傷が無いことを確認しつつ、そう言った。本来、治療能力は傷を完全に癒すためのものじゃない。せいぜい、応急処置程度。大人数で行えば手術並のこともできるが、患者に対する負担も大きい。起きるのに3日はかかる。

「これは治療能力じゃなくて、私のラジオンスペルですー」

「ラ、ラジオ？」

「ラジオンスペル。カルマによる能力創世記よりも前の、古代魔術のことですよー」

「魔術って……」

「まあ詳しくは授業で習って下さいー。さあさ、傷は治ってるんだし、帰宅されたらどうですかー」

破門は生返事をした。

納得しきれないこの状況と、さっきまで殺しにきていたにも関わらず、現在のこのケロッとした対応。

腑に落ちない面もちで、破門は立ち上がった。

「すみませんねー。新しい制服をそんなにしちやつて。事情を話せば、学校側で支給してくれますんでー。これ、その証明書ですー」

「はぁ……」

破門は紙を受け取り、ポケットにしまった。

そして、出口へ向かって歩を進めた。途中途中のコウモリの残骸を足でどかしつつ、一回くしゃみをしてから検査室を後にした。

保健医は、扉が閉まるのを確認して、不敵に笑ってこう言った。

「いい加減出てきたらどうですかー。校長先生」

「……バレてたか」

保健医から向かって反対側の方向で、床の色が、白から茶色へとグラデーションしながら変わっていく。厚みも出てくる。少しずつ盛り上がって、粘土のように人の形をつくっていった。

吟斗は床にメタモルフオーゼしていたのだ。

青白い光が粘土的なソレを包みこみ、中から吟斗が姿を現した。

「いつから気づいてかのう」

「破門君の『桜紙』のときですかねー。ドサクサに紛れていたのが分かりました」

「流石……」

「私の耳を、舐めないでくださいー」

ピロピロ。

吟斗は、じゃあワシはこれで、と言ってその場から立ち去ろうとしたが、保健医はそれを言葉で一時的にくい止める。

「しかし、なんでこんなところにー」

「……猫ば先生の能力測定は度が過ぎますからのう。少しだけ心配したんです」

「……それは、生徒を心配したんですかー？ それとも、破門君を心配したんですかー？」

吟斗は足を止めた。

なかなか鋭いことを聞く。

見た目は子供でも、伊達に歳をくっっていない。

不穏な雰囲気、空気が黙り込んだ。

「……」

保健医は微かながら、何かを察したようだった。

しかしそれについて言及し続けるのもちょっと、アレだ。

回答を待たずに保健医は言葉を紡いだ。

「……だいじょーぶですよー。私のラジオンスペルは『死』をも治せますからー。校長先生もご存じでしょうー？」

「しかしそれは、猫ばば先生の負担も大きい」

「私の『退化』はもうここで止まりましたよー」

保健医は両手を下方方向に広げて、自分の姿を吟斗に見せつけた。

「それに破門なら、戦いへのトラウマも、まったく生じないと思いますよー」

ピコピコ。

死を経験しかけた者は、かなり大きなトラウマを抱えることになる。しかしながらカルマ学園では、中等部から精神訓練を実施しているため、そうなることは少ない。

そう意味も含めて、保健医は「まったく」と敢えて言ったのだ。

「……………そう、か。ふむ……………。まあそれを聞いて安心したよ」

吟斗は振り向いて、保健医に一礼した。保健医も、それを返した。コウモリの残骸を足で払いつつ、一回くしゃみをしてから部屋を出ていった。

似たもの同士。

「……………なんだったんでしょー……………」

ピコピコ。

保健医は独り呟いた。

\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*

「何だあ千宮のやつ……」

破門は第一寮149号室、とどのつまり自分と千宮の部屋にいた。ポロ着を身に纏ったまま。

千宮からのメールを見て、残念がっていたところだった。

「今夜は用事が入った。」という、よもや女子の文面ではないよ  
うなメールが、破門の携帯の液晶に映し出されている。

「大浴場遠いんだよなあ……」

第一寮には風呂が無い。だから自動的にここの寮生はカルマ学園内にある大浴場まで足を運ぶ必要がある。

ただ、至極遠いんだ。これが。

だいたい徒歩二十分。

いつもなら辻崎の部屋に行けばいいものだったが、いかんせん怒らせてしまったばかりだ。到底入れてもらえる思えない。

「はあー……」

実は千宮のレポートに頼っていたのだ。彼女の異能力を以てすれば、「あっ」という間なのだから。

破門は重い腰を起こして、寝間着つまるところ中等部のジャージに着替えた。

バスタオル、ハンドタオル、シャンプーとリンス、洗顔料。一式をプラスチックの桶に入れて、サンダルに履きかえ、扉の方へ向かった。

「さて、と……ん？」

ところで。

ドアノブの下辺りに、うっすら何かを書いてあるのを破門は見つけた。正しく言えば、彫ってある、だろうか。かなり弱い力でなぞっただけ、みたいな。

破門は訝しげに顔を近づけてみる。

「何だこれ？」

網膜の筋肉を引き延ばし、眉毛を「ル」の字にして、凝視した。手で影を作ってみたりして、僅かな溝を映し出そうとしてみる。若干だが、文字が見えてきた。

「み、右……？ よ、四十、五？ 右四十五度、か？」

右四十五度。確かにそう書いてあった。

破門の頭はこれを落書きと判断。暗号っぽくしてみた、なんとなくの記述であろうと解釈し、そのまま見過ごそうとした。

しかし「右四十五度」の下に、興味深い文字、いや溝が。

「大、浴場へ……」

右四十五度。

大浴場へ。

間違いなくそう在る。

破門の脳内会議は散会寸前だったが、議長の破門が破門を呼び止め、再び開会された。

議題は、四十五度って何。意見が飛び交う。

体温じゃね。高すぎだろう。

回数か。何の。

じゃあ角度だ。だから何の。

「四十五度……」

なぜドアノブの下にこんなものが書いてあるのか。わざわざこんな低い位置に書く必要があるのか。

ドアノブ。四十五度。大浴場へ。

「いや、まさか、な」

部屋番号が吹っ飛ぶ寮だ。一階が二階になる部屋だ。

ありえないことじゃない。

半信半疑だったが、破門は静かにドアノブを握り。

四十五度だけ右に回して、前へ押した。

するとどうだ。

目の前に飛び込んだのは、古びたボロ廊下ではない。

「え……ええええ！？」

「お？ 破門やないか。何してんねん。そないなとこで」

破門は、大浴場にいた。

ちょうど受付の前。男と女の暖簾が左右に位置している。

端から見れば、どうやら破門は道具庫から出てきた者のようであるらしい。

確かにそこから出てきたのだけれど。

「う、討窪。ここは、大浴場、だよ、な……？」

「せやけど、だから何してんねん。掃除のバイトか？」

破門は慌てるように振り向いた。

後ろは薄暗い倉庫。カビ臭い。目の前に討窪がいるから、偽物の大浴場ではなさそうだ。

破門は理解をしてきた。

なるほどどうやら、雇同士が繋がるみたいだ。ただ一方通行ではあるらしかった。

「ボケっとしてんなや。入るんやったら、さっさと行くで」

「ん、あ、ああ」

まるでお化け屋敷に入るかのように、破門は注意深く進んだ。恐る恐る前払いの料金を受付で支払う。受付のおじいさんは眠たそうな顔して、釣り銭を渡してきた。

ここまででは順調。

破門の次に討窪が支払う。

「はあ？ 釣りが足らなくてどーいうことやねん!？」

討窪は受付のおじいさんに向かって叫んでいる。何やらお釣りがしっかり返ってきてないようだ。

「先行つてるぞー」

破門は討窪をおいて、暖簾を左手で払いのけた。

ツルツルの床を、木目に沿って進んだ。飲酒禁止とか喫煙禁止などのポスターが、視界の中で奥から手前へ動いていく。

真っ白な壁にシミなどの汚れは無く、清潔感漂う香りもする。

第一寮とは大違い。

「広いなあー」

脱衣所はさながら、プールのそのようだった。ロッカーがいくつも整頓されて並び、窮屈というほどでもない通路。サウナもあるし、個室のシャワーまで完備だ。

しかし、不可解な点が一つ。破門以外に、誰もいない。

「……」

時計に目をやれば、針はちょうど八時を指していた。他の生徒がいたって、何らおかしくない。むしろ混むくらいではないのか。

破門の足音だけが、脱衣所の音響を支配した。引きずるようなサンダルの音が空しく響く。

「討窪早く来いよー」

ちょっとだけ寒気がして、破門は両手でそれぞれ逆の腕をさすった。前かがみになりながら、サンダルを脱いだ。

ロッカーに手を差し伸べ、開けようとした、その時だった。

「ん!？」

寒気なんてレベルじゃない。

それは悪寒だった。

冷たい気配が、電流のごとく背中を伝わり、首の後ろの方で弾けた。

「何だ、これ……」

破門は右を向く。誰もいない。  
後ろを振り向く。誰もいない。  
そして、左の方へ視線をやった。誰か、いる。  
しかし討窪じゃない。風貌からして、カルマ学園の生徒ではない。  
教員、とも違う。

「だ、誰だ」

「アアア……アア……アアア……」

群青色の服を纏い、深々と帽子を被った、その者。  
袖は指の先まで覆い隠し、服全体には不思議な文様が刻まれている。絵ともとれるし、文字ともとれる。

下を向いているため、顔は確認できない。

だが、この声は。

どこかで耳にしたことがある。

「……アアアア……ア……」

「お、お前……」

その瞬間、目が合った。

睨むような奴の目の色は、白目と黒目が逆転していた。  
間違いない。

螺子はずれた。

旧校舎で見た、あの気味の悪い奴。

「な、なんで、ここに……?」

「……アアアアアア!!」

螺子はずれは大きく右腕を振りかざし、一気にその腕を突き出した。

刹那、巨大な青い腕が出現。それは高速で破門まで伸び、破門の体を丸飲みにして、瞬時に壁まで追いやる。

「ぐはあっ!!」

「アア……アアア……」

強く打ちつけられる。

破門の体は壁に固定された。微妙に透けている青色が、離れた螺子はずれと破門を結んでいる。桶が、シャンプーやらをぶちまけた。巨大な五本指が破門の体を締め付ける。

「が、があっ!!」

ミシミシと、体から嫌な音がした。

破門は息が出来るように、首元にかかった指を退けようとした、が。

すり抜けてしまう。

(な、何だコレ……!!)

確かに破門は掴まれているのに、こちらからは掴めない。何度やっても半透明な青色の中に、破門の腕が埋もれるだけだった。

さらなる圧力に、破門は苦しまされる。

「ぐ、ぐうおあっ……」

「アアア……アア……」

目的が分からない。

そもそも、何であいつがここにいる。

あの体じゃ、歩くことすら出来ないはず。不老不死であるから、死んではいないのだろうけど。

(や、やばいぞ……このままだと……!!！)

呼吸が出来なくなってきた。圧力はなおも増していく。ふりほどくことすらできない。

だったら。

「この、やろおおっ!!！」

破門は左腕にテキストを流し込んだ。

紙を手裏剣の形にして、硬化化。思い切り投げ飛ばす。

三つの手裏剣が風を切る。

しかし、螺子はずれの体に届きそうな瞬間に。

「何っ!?!」

手裏剣のもっていた速度が一瞬でかき消され、回転もすることなく地面に落下した。螺子はずれの一步手前で手裏剣は床に突き刺さる。

逃げることもできず、直接攻撃もダメ。

いよいよまざくなってきた。

「が、が、ぐう……」

「アア……アアア……アアアア!?」

突然、螺子はずれの声色が変わった。空いている方の手で頭を押さえ、涎が汚く流れ出てしまっている。

「っ!?!」

「アアアア!! アアアアアッ!!」

奇声を上げるやいなや、螺子はずれの足下はおぼつかなくなった。目玉が飛び出るかの如く強く開眼し、胸に掌をあてがう。そして。

「……消え、た?」

消え去った。その場から。まるで何もなかったかのように。

しかし痛みは確かに現在進行形で在る。お風呂セット一式も散らかったままだ。

破門の脳内は混乱を極めた。

どうやってガラスのショーケースから出てきたのか。何故自分を襲ったのか。何故急に消失したのか。

そもそも、本当に奴は螺子はずれだったのか。

「何が、どうなって……」

「おやあ? 破門ではないか?」

「おおい! 吟斗!!」

破門は一直線に前を凝視していたから気づかなかったが、真横に

吟斗がつけていた。急遽受け取った空気の信号に、破門は軽く仰天した。

「……な、何じゃ？」

破門はヤンキーばりの突っ張り顔で吟斗を睨んだ。

「……てめーの管理がしつかりしてねーからじゃね」

「は？ 何のことだ？」

破門はため息をつき、何でもねーよ、と続け、前方へ歩きだした。サンダルを拾い上げ、散らかったタオルケットやらを肩にかける。

破門の体は、まだ螺子はずれの感触が残っていた。

なんて冷たい。

まるで氷のように、奴に触れられた箇所は冷ややかであった。

「何かあったのか？」

「だから、何でもねーっての」

「手裏剣までつくって、何も無いなんてこと、あるわけなからうが」

破門は少しだけギクツとした。

ただ、いちいち説明するのも面倒くさい。どうせ、そんなわけなからうが、とか言っておアシラわれるのも目に見えている。

破門は紙を分解して、隠すように左腕にしまいこんだ。

「はあ？ 何言ってるんだよわけわかんねえ」

「……そうかの」

若干ピリピリした空気の中、それを斬り裂く特効隊長、討窪大和が駆け込んできた。

「だつはあつー！！ あのオヤジけちくさすぎやろー！！ あら、校長先生やないすか」

星の点描があちこちに飛び交う。さっきの雰囲気とは違って変わってしまった。

討窪は子供のような目で陽気にやっている。

「校長先生も入るんやねー！ ってか！ 一番風呂かいなあー！！ よっしゃ破門、どっちが先か勝負やー！！」

「うっせ！ 討窪うっせ！」

破門の文句など気にせず、それー！！ だなんてある意味羨ましいよ。もう。

破門は討窪に遅れてロッカーを開く。その時、一瞬吟斗と目が合った。

吟斗はニヤリと笑って。

「いやっ！ 一番風呂はワシじゃあー！！」

何だこじ。

バカばっかじゃねえか。

\*\*\* \*\* \*

破門は第一寮に戻り、討窪と別れ、今一四九号室の前にいた。  
ドアノブを握る。  
ガチャと音を立て、番が軋む。

「あれ？ 外？」

第一寮の裏口につながる。

桜が綺麗だった。月明かりに照れされる桃色は透き通り、神々しさを放っている。

いやいやそうじゃなく。

破門はドアを閉め戻した。気を取り直して、もう一度開く。

次は、断崖絶壁。

「う、うはあー……」

ドアを閉める。

一体いつになったら一四九号室に入れるのだろうか。

ホカホカしていた体も、帰りの夜道で随分冷えてしまったし、そろそろ部屋の布団にくるまりたいんだが。

破門は腕を組み、どうしたものか、と考えていた。  
するとそこへ。

「……なにしてるの」

「ん？ あっ！ 千宮！」

廊下の暗がりやを照らすような金髪と、大きな青眼。

千宮はそのそと歩いて、ドアノブを握った。

そして、いつもの部屋に、つながった。

「あ、あれ……あれー!？」

「……………」

異能力者達の夜は更けていく。

### 第十三話 竹屋のファイアー（前書き）

今話から第二章です。やっと物語が動くような、動かないような。

今回のタイトル難易度

### 第十三話 竹屋のファイアー

そこは暗く、狭く、黒い世界。

光はどこだろう。ここはどこだろう。

私は一体誰なんだろう。

化け物のレットテルは生まれたときからあった。

望まぬ力。

誰もが私を恐れ、避け、やがてそれはいたぶりの形で私の身を襲った。

天涯独り身。天性の孤独。

姿形は皆と同じはずなのに、同じように生きているのに、人とは違って、死にたくなかった。

自殺の願望。脈動の放棄。

始めは周りが私の力を恐れていたのに、いつの間にか私の方が私の力を恐れていた。

地獄に似た闇。

入り口も出口もない迷路に迷い込んだ私の行く先なんて、たかが知れてる。幾度となく見た常闇は、私をも包み心の中に侵入した。

見えてたものが見えなくなった。

見えないものは見たくないと思った。

見たくないものしか、私にはないと気づいた。

そこは冷たく、静かな、痛い世界。

光を探すことを止めた。居場所はないと知ってしまった。

自分を知ること諦めた。

誰も気付きはしない私の痛み。気付こうともしない。誰も。

だから、私から遠ざかろうと決めた。そして見つけた孤独の枷。これさえあれば、闇から出なくて済む。

逃げていられる、理由を持っていられる。

迷路の支配は私だけ。誰も近づかせはしない。何もなければいい。思い出などなくてもいい。

死ぬ勇気がないから、生きる恐怖にも勝てない。

これでいい。これでいい。

日が昇って、落ちて。

月が昇って、落ちて。

ここは辛く、苦しく、泣き出しそうな世界。

それが心地いいと私は信じた。

信じるからこそ、信じたくないのだと知った。

\*\*\* \*\*

ここはカルマ魔術学園。当時の名残から、能力学校という名称を使わないでいる。

全寮制。中高一貫。編入も可能。

一般的な大学並の施設と、能力学校としては最古を誇る伝統が特徴である。

また、入学試験はない。そうなると倍率がとんでもないことにな

りそうだが、生徒の死亡率が最も高かったことで有名であり、行きたがる者は多いとは言えない。近年はゼロに止められているが、相変わらず事故等が多い。

「能力を行使するのに必要なのが『テキスト』だ。中等部で習ったと思う」

季節は春。入学式も終え、高等部最初の授業が行われていた。

「テキストの数値からは、三角関数と同様なグラフが得られる。その周期にあたるものが『テキスト周期』。振幅はテキストの効力数値を表す」

流石に新入生だ。誰一人として居眠りなどしていない。

全員せつせと先生の書く文字や図を、ノートに写していく。

「テキスト周期が規則的に一定な者が能力者。不規則な者が異能力者に分類される。またこの分類を、位相という。まあつまり君達の位相は能力者、ということだな」

一組から五組までが能力者のクラスで、六組から九組までが無能力者のクラス。そして零組が異能力者のクラス。という風にカルマ学園では

能力者の位相によってクラス分けがなされている。

「さらに、テキストには属性が存在する。皆知っているように、火、水、風、土、雷、の五系統だな。その属性に関して、詳しいことは選択教科で各々学ぶことになる」

ここは一組。イケメン優等生こと、辻崎がいるクラスだ。辻崎は、頭がくせに顔もいい。運動もできるし優しいし、何より紳士だ。教員陣からの評判も良ければ、期待も辞書なみに厚い。

「でだ、こつからが高等部の授業だ」

中年の教員が、黒板の前をうろろ歩きつつ、髭を撫でながら言った。

教卓の上に、学園共通の教科書を開いたまま置く。

「ユニゾン。能力系統の合成だ」

徐に、教員が両手を前方にかざした。

まず、右掌の少し上で、炎が燃え上がる。黄色い影を教室に張り巡らし、赤色に立ち上る火の塊が生徒達の眼にとびこむ。

そして、左掌には球形の水を出現させた。

「火系統と水系統。混ぜると何系統になるか、分かる奴はいるか？」

「湿系統です」

すつと手を上げ解答したのは辻崎だった。中等部からの辻崎のフアン共はキャツキャツと騒ぎだす。普通でしゃばりは嫌われるが、辻崎の場合はなぜか当然のごとく思われ、まあ辻崎なら、と黙過されていくのだ。

「よく分かったな。一組に十点！ つて、そんな制度ないかー！」

しーん。

ああ、空気が痛い。

「う、ううん！！　で、では、ユニゾンするぞ」

水の球面に、烈火が揺れる。

右の炎は青色のテキストに縁取られ、左の水は緑のテキストに包まれた。

ゆっくり近づけ、青と緑の表面が触れたとき、白い光が教室の端にまで行き届いた。

シンバルの余韻のような振動が、空気の中を駆けめぐる。

「おおおお……」

生徒全員で、おおおお……。

教員の重なる両手には、濃密に込められた蒸気の塊があった。

「これがユニゾンだ。火のテキストグラフと水のテキストグラフのエッジを一致させ、ユニゾンレートに合わせて、って、分らんかこれから説明する。テキストグラフというのは……」

「……あああああつ！！」

突然、ガツシャアン、とガラスをぶちまけて、何者かが一組の教室に乱入。というか特攻。

よからぬ侵入者はランゴロンと机に弾かれ、誰かさんの筆箱とノートを吹っ飛ばし、教卓の横で鈍い音を立てて止まった。

「うつつー……いったいやないかー！！　アホ破門！！」

「ざまーねーな討窪っ！！」

あいつら、と呆れるように辻崎は手で額を押さえた。さも他人のふりでもするかのよう。またいつもの勝負なのだろうけど、周りに迷惑をかけるのは勘弁してほしい。

「ほんならあー!!」

「のわっ!!」

討窪はマグネイドを発動し、破門に黒球を当てた。そして破門を教室に連れ込み、さらなる乱闘開始。

呆気にとられる一組ともどもを置き去りにして、ギアアギアと騒ぎまくっている。

そこへ教員が、冷静に一言。

「これが、雷系統だ」

パシンと一つの拍手が聞こえた。それと同時に、破門と討窪の体は、糸を切られた操り人形のように動かなくなった。

\*\*\* \*\*

冬の寒さは通り過ぎ、春の陽気が世間に漂うこの季節。空は雲一つなく晴れ渡り、パステルブルーにのびた大空に、小鳥のさえずりが優しく響く。

現在カルマ学園は昼休み。他の学校と違って、カルマ学園は昼休みを長くとっている。たいていは三十分ばかりだが、ここでは一時間程度ある。

理由は諸々あるが、主な理由は、立地条件に関係することだ。全

寮制であるため、生徒には家庭から持つてくる、お弁当というものは無い。だから、購買及び学食は異様に混む。ある程度の大きさと規模はあるものの、流石に千人以上はさばききれない。そうになると自動的に混雑や待ち時間を避けて、学園外に繰り出す者が出てくる。しかしカルマ魔術学園の近隣にはファミレスが一つしかなく、そこもすぐ満席になる。以上の条件が重なり、生徒達は遠出しなければならぬ。

だから、昼休みが長いのだ。

「はあー……」

「てめ討窪っ！！ 休んでないでちゃんとやれよ！！」

「……なんで、なんで、なんでっ！ せつかくの昼休みに、掃除せなあかんねえんっ！！」

「おめーがガラス割ったからだろーが！！」

破門と討窪の二人は屋根の上にいた。屋根といつても、ドーム上に広がる、闘技場の屋根だ。闘技場の様相は完全にスタジアムといったものであり、趣や伝統といったものは皆無である。

「ガラス割ったんは破門やないかーっ！！」

「実質吹っ飛ばしたてめーに決まってるだろっ！！」

二人はブラシを片手に今にも殴り合いでも起こしそうに、責任の擦り合いをしていたところであった。

サボタージュすればそれでいい話ではあるが、実のところそうもいかない。破門と討窪の手首には『束縛系術式』という、一種の枷

のような術式がかけられている。これがある限り、屋上から降りようとしても術式が反応して二人を妨げる。

メロンパン状の屋根の上で、小さな口げんかは続く。

「もつとTPOを考えやがれっ!!」

「勝負に乗った破門にも非はあるやろっ!!」

千宮は『飲めるヨーグルト』をストローで吸いながら、二人の姿を見物している。日陰が無いので、いつになく三拍眼は顕著なものになっていた。

「もう、ちゃっっちゃっと掃除した方が早いだろ」

「こんんな広いとこ、終わるかいなっ!!」

破門は大きく手を広げ、空で屋上を包むようにした。

カルマ学園の闘技場はスタジアムと呼べるほどの広さと設備がある。その屋上、というより開閉式の屋根の上は、とんでもない面積をもっている。

高校生二人が、一時間で掃除を完了させるのは至難の技である。

「やるだけやるんだよバカ」

「はぁあーっ!! 破門が蹴らなければ、こんなことには……」

突然、うだうだ文句が垂れるこの空間に、扉の開く音が割り込んだ。

音のする方を破門、討窪、千宮は振り向いた。

「ふん、やはりここにいたか」

「っ!!! 姫鉦……やったっけ？」

そこにいたのは、0組学級委員長の姫鉦だった。

健康的な肌色に、スラリと見事な曲線美。光も透かさない黒髪を揺らし、尖った眼まなこの中には三人がはっきりと収まっていた。

「声が聞こえたものでな。お前らに用がある」

破門は、やっぱりこいつ地獄耳だ、と思っていた。闘技場は基本的に立ち入り禁止であるから、人が寄りつかない場所である。しかもその屋上から声を聞き取るなど、常人には不可能だ。

破門の懸念も察さず、姫鉦は携帯電話を取り出し、三人にけしかける。

「学級委員長として、0組全員の連絡先を把握しておきたい。三人とも携帯を出せ」

「なんや、そないなことならお安い御用やで」

一番姫鉦の近くにいた討窪が、率先して姫鉦の要望に対応した。討窪はシルバーフォームの携帯電話をポケットから取り出す。

「俺が破門と千宮の分も送ったるわ」

「ふん。悪いな」

討窪と姫鉦は互いに携帯電話の先端を合わせ、赤外線通信を済ませた。姫鉦はカチカチとアドレス帳をいじり始めると、何かかに気

付いたらしく、早まる手を止めた。

「破門……下の名前、愛、というのだな」

「っ!!」

プツリと、その時だけ時間が止まったようだった。

破門の黒い殺気が地を這うように流れ出る。静電気を帯びたかのように、破門の黒髪はバラバラに逆上がりをはじめた。

「てめえ姫鉦とかいったか。俺の下の名前を呼んでんじゃねえ」

「何故だ？ 良い名前だと思うぞ」

「どっかがっ!!」

こんな、女みtainな名前など大嫌いだ。聞くだけで虫酸が走った。破門は、いたであろう両親をひどく恨む。

「愛。慈しみ、親しみ、大切に想う心。私は本当に良い名だと」

「黙れえっ!!」

破門は血管を迸らせながら、できる限りに大きな声で姫鉦の発言を遮った。眼球には、赤い稲妻のような充血が浮かび上がっている。姫鉦は、ふう、とため息をして。

「貴様には愛の欠片も感じないな」

「黙れと……」

「愛の名を持つならば、名付け親の気持ちをもっと汲み取って」

「言ってるんだあっ!!」

破門の堪忍袋の緒が切れた。破門は左腕を大きく引いて、一気に手のひらを姫鉦に向けて突きつける。同時に紙が腕を形作り、姫鉦に向かって迫りゆく。

「ちよ、ちよ、破門っ!？」

破門と姫鉦のちよとど間にいた討窪は、慌てて横っ飛びしてその巨大な腕を避けた。

しかし、姫鉦は避ける気配も見せず、仁王立ちのまま。

ふん、と鼻で笑い。

右手を紙に向けた。

「甘いな」

直後、ドパン、と破裂するような音が響く。

紙の腕は散り散りに舞い、原型などもう途方の果てだった。勢いを失い、リズボルトの効果が消えていく。

破門は驚いた。

「なっ!？」

「まったく……。短気な異能力者ほど、質の悪いものはないな」

破門は一瞬、風系統の能力かと思ったが、どうやら違うらしい。

風系統の本質は「斬る」である。しかし破門が紙を介して感じた

ものは「斬る」ではなく、どちらかというところ「弾く」。  
火は「燃やす」、水は「潤す」、土は「割る」、雷は「痺らせる」。  
「弾く」はどれにも当てはまらない。

「少し教育が必要だな」

姫鉦が右腕を前方に翳す。

一気に、舞う紙達が空洞状の軌跡をつくる。  
破門の視界に穴が開く。その先に見えるのは姫鉦の右掌。  
しかしそれではもう遅かったのだ。

「ぐおおっ!!」

体の芯まで衝撃が貫いた。首に大きなGがかかる。目玉が飛び出しそうなの、そんな感覚に見回れる。

破門の体は後方大きく吹き飛ばされ、天の井の上を転げ回る。一転二転に止まらず、破門はドームの外に放り出された。

「くっ!!」

破門はリズボルトを使ってもう一度腕を形成。スタジアムの端にしがみついた。

「急になんなんや……」

「……」

ポカンとする討窪と千宮を差し置いて、姫鉦はニヤリと笑った。  
破門が紙を収束させながら戻ってきた。

「ちいつ……!!」

「どうした？ 愛」

「こ、こんのやるおっ!!」

完全に挑発されて、破門の腹が全員起立のごとく立ち上がる。姫鉦に向かつて一直線に疾駆する。

「斬紙っ!!」

左腕の紙を発散させ、姫鉦の四方八方をそれらで囲む。全包围攻撃に加えて、追い打ちを叩き込むつもりだった。

「破門本気やんか……」

姫鉦は足を踏み込んだ。俊足で前方で駆け出し、囲んでいた紙のマークを振り切る。

紙が先まで姫鉦のいた場所に突き刺さった。破門と姫鉦が向かい合って、互いに距離を縮める。

「鷲津紙っ!!」

「ふん」

紙の腕を避けるため、姫鉦は前斜めに大ジャンプ。破門のちょうど上空につけて、破門に向けて掌を突き出す。そして、例の「弾く」を飛ばす。

「ちっ!! 盾紙っ!!」

亀の甲羅のような紙の盾をつくる。パァンと轟音を散らして、紙の層が弾け飛ぶ。今回は何とか防げたようだった。

次は破門のチャンス。

姫鉦は空中にいるため、回避自体が困難な状況だ。よし、と破門は印を組んでテキストを引き出す。先に使用した斬紙を再び姫鉦に向けて射出した。

「ふっ……まだ甘いな」

着地手前。

紙が地面と水平な方向で、姫鉦に襲いかかる。しかし、当たることはなかった。

姫鉦が着地したのは地ではなかったからだ。

「何っ!?!」

姫鉦が降りたのは、掃除用ブラシの上だった。ブラシの棒の部分を縦にして地面に突き刺し、その上に着する。紙はその棒の部分に突き刺さっていくばかりで。

(そっぴや、吹っ飛ばされた時、俺のブラシは消えてた……!!  
いつの間に……!?!)

姫鉦が印を組む。

直後、キーンと音がして、破門の体がぐらついた。

「な、何だこ、れ……」

頭が揺れる。吐き気もする。姫鉦の姿がブレる。討窪の声が遠く

聞こえる。

テキストが乱れ、紙達が力を失っていく。

姫鉦が何かしやがった。

「やはり本体をたたけば、こうなるか」

姫鉦はモップの上から「弾く」を飛ばす。

破門はどうすることもできず、またしても吹き飛ばされる。

綺麗になったばかりの制服がもう泥だらけだ。

「くっ!!」

破門の体はひきづられるように移動した後、俯せの状態で停止した。

なんて無様。自分から喧嘩を引っかけといて、惨敗とは。

姫鉦はよく通る声で、けれど単に大きい声というわけでもなく、破門に話しかけた。

「異能力者たるもの、もっと冷静に行動するべきだ」

「……ちっ」

姫鉦は腕を組み、破門に向かって歩き出す。

「異能力者を危険視している者もいる。そう短慮であれば、生き辛くなる一方だぞ」

偉そうに説教してんじゃねーよ。この言葉は喉に押し止めておいた。

それは短気であることの証明になってしまいう上に、姫鉦にそれを

察せられるからだった。

「これから三年間『家族』として共に協力していくんだ。いつ我々が戦争にかり出される分からない。そのような姿勢では死にいくよ  
うなものだ」

「……」

破門の目の前、というか上の方に姫鉦がつけた。

スカートの中にブルマが見えたが、ちっとも嬉しくなかった。

「私の異能力コードは『マエストロ』。波動を操る力だ」

なるほど。

「弾く」は単なる波動で、破門が起こしたふらつきは音という波を操って耳から脳へ攻撃していた、というわけだ。

「破門の異能力コードは何という」

「……ルト」

「ん？」

「リズボルト！！ 紙を操る力だっ！！」

破門は顔を背けるように、照れるように、叫んだ。

拳を交えて芽生えた友情か。いや違うな。

ただ『家族』ってという言葉が嬉しかっただけなのかもしれない。  
よくは分からないけれども。

「そうか」

姫鉦は破門に手を差し伸ばした。  
破門はその手をとるか、少し迷ったが、渋りながらも掴んだ。

「これからよろしくお願いする」

「………けっ、よろしく！」

昼休みは、まだまだ終わりそうになかった。

## 第十四話 孤独の枷（前書き）

少しエグイですが、まあこつこついうのも書く必要があるんだと思います。

## 第十四話 孤独の枷

「あああーもうくったくたやあ」

「余計な邪魔も入ったしな」

「……」

破門と討窪は昼休みのみならず、放課後まで屋根掃除をやらされ、疲労困憊のまま闘技場を後にした。それに飽きもせず千宮もよく付き合ったものだった。

「コンビニ行くか、千宮」

「……うん」

「何や、学食行かれへんのか」

「今夜は定休日だろうが」

「あ、そか」

外はすっかり暗くなってしまった。太陽は西の空へ沈んでいき、微かなオレンジと夕闇のパープルが溶けるように混在している。

星は雲に隠れ、ぬるい風が少しだけ吹いていた。

この時間に出歩いている生徒は少なく、破門達三人から見えるのは木や芝生、ハイテクな設備だったり、外灯だったり。人影はあまり見受けられない。

こんな時ふと、破門は螺子はずれのことを思い出していた。  
急に襲いかかって消えていったあいつ。

「……なあ破門？」

「……」

「破門？」

「ん？ あつ、ああ。な、何だ？」

「何ポケットとしてんねん」

「いや、何でもない」

討窪は破門の顔色を伺った後で、また何かを話し始めていた。  
こいつがいると沈黙がなくていい。  
度が過ぎる、ということもあるが、まあそれはその時ってことで。

「おつ、姫鉦からメールや」

討窪が制服のポケットから携帯電話を取り出す。

『思いの外0組のアドレスを手に入れられない（< > ;）知  
ってる限りで、他のメンバーのアドレスを教えてくださいm（| |）  
』  
『m』

「………ほお………なんや意外と普通の女の子っぽい  
やん。もっと業務連絡みたいなん来ると思ってたわ」

破門と千宮も討窪の携帯の液晶をのぞき込んだ。

確かにそれは否めない。初めて携帯に触れたおっさんのようなメルだろうとは三人とも思っていたが、その辺は普通であるらしかった。

「知ってる言うたら、御角みかくがあるやん」

「え、ああ……そういえば」

討窪と破門の視線が同一直線上に並ぶ。

そして討窪はニヤニヤと笑い出して、千宮のそばにつけた。次に千宮の肩に手を置いて。

「知つとるか？ 破門な、中等部するとき、その御角みかくってやつに告られてん」

「ス、ストオップ!!」

千宮は表情を少しも変えず、破門を見た。そして、そう、と呟くだけで、特にこれといったリアクションは見せなかった。

破門にとっては、恥ずかしい過去でもないが、あまりその手の噂は広まってほしくない。御角の面子に関わる問題であっても、恋愛沙汰は自分の沽券にも関係する。歯がゆく、どうもこうもないわけである。

「ほんまもつたいたいなことしたもんや。なあ？」

「その話は止めるといつも言ってるだろうがっ!」

「なんで？ 誇ってええと思うねんけど」

「違うんだよっ！ 誇るとか誇らないとかの話じゃなくてっ！ えーあー、えっと、あれだよ。え、あ、も、もあーっ！！」

「どわあっ！！」

誤魔化し。かまし。猫だまし。

大きな両手の紙でパァン、と。

討窪は仰け反って、そのまま芝生に尻餅をついた。

「うっさいわっ！！」

「黙れっ！！」

討窪は指で耳に栓をし、理不尽な言動に腹を立てる。

一連の件を終えたと思ったのか、千宮は一人で道を歩きだした。

それを破門は視認してすぐ千宮を追いかけた。ちよ待ちいや、と討窪もそのすぐ後を駆けた。

三人で、まあ実質二人で騒ぎながら、やや歩くこと十五分。コンビニに到着した。

カルマ学園内にはコンビニもある。ここにしかない弁当や菓子等があるため、学食もさることながらこちらもそれなりに盛況しているのだ。

三人は入店する。

「唐揚げ食べよかなあ。チャーハンにしよかな。あつ！ 麺類もええな」

「うるせえ討窪」

お日様はさようならしているのに、なぜ討窪はこつも活発なんだろう。ハイエナかよ。破門は独りごちてそう思う。

千宮はお菓子コーナーにおわして、トッポにしようかポッキーにしようか悩んでいた。ぶつちやけたところ愛らしい。小さくしゃがんでいる姿勢が可愛らしくて仕方ない。

「さあて、と」

破門が、比較的隅の方に位置する紙パックの飲み物コーナーまで差し掛かった辺り。

少し見覚えのある姿が、そこにあった。

「……ん？」

カルマ学園の制服と仕様は同じだが、形が微妙に違って。ポンチヨみみたいな、カップみたいな、少しだぼついたそれ。

パステルブルーの髪色に、精気が抜け落ちているかのような白い肌。

「お前……」

破門は瞑想、黙思、沈思黙考して、カオスに広がる記憶の破片を紡いでいく。

えー……っと。

確か、結構最近見たような……。

あっ！

「入学式の時のっ!!」

彼女の瞳に破門の人差し指が浮かぶ。

「……え、あ、あの……えっと」

入学式の際に破門の眠りを覚ました彼女だ。

何度が知覚はしたものの、名前すら知らない。

しかしどうやら互いは互いを認知できているようだ。

入学式で起こしてきた奴だ、と、入学式で起こした人だ、とで。

「んー？」

しかし今は、そんなことより気になる点があった。

それは彼女がカゴに入れているパン類だ。パンの種類じゃなくて、その量。五、六個はある。

そもそもパンだけでカゴを使う者も少ないだろうし。

「お前大食いなんだな」

女の子にそんなことを聞くのもどうかと思うが。破門の無神経は顕在だった。

彼女は俯いて、何も言うことはなかった。照れるわけでもなく、嘆くわけでもなく、ただ、ただ、床と向き合っていた。

そして無言のまま、パンの入ったカゴを落とした。滑り落としたんじゃない。意図的に手を離れたのだ。

「っ……！」

彼女は早歩きで、破門と目を合わせることもなくその場を去った。

破門が彼女を目で追うも、すぐにコンビニの棚のせいで視界からはずれてしまった。

討窪も千宮も彼女には気付いていない。

破門の前に残るのは、カゴとパンだけだった。

「……………！？ ……………ん！？」

一部始終を見ていたコンビニの店員が、破門を見て、やっちゃったな、だの、それは無いよ、だの、もっと言葉を選べよ、だの。冷たい視線を破門に送るばかりだった。

頭をかく破門。

ときに、千宮が呟く。

「……………うん、トップにしよう」

\*\*\* \*\* \*

ちょうど、教室棟の裏口。

「ちよつとルイカア。パンはあ？」

眉毛は薄く、髪色はブラウン。女子高生なりの化粧と短く整えたスカート。強面の、いかにもヤンキーと思しき女子生徒が苛立ちながら言った。

彼女の名前は忌村桐子。

忌村の周りには、他に二人ほど女子生徒がいた。こちらも同様に不良風情だ。

「……………」

「おいっ！ 黙ってちゃ分かんねえだろ！？」

ルイカは顔を俯けたまま、口を開かなかつた。今にも泣きそうな表情で、忌村の吐くヘドロのような言葉を受け入れていく。裏庭に、甲高い声がうねり続ける。

「パン買ってこいつつたよなあ!？」

「っ!!！」

忌村は、ルイカの薄青の髪を鷲掴みにした。そして顔を一ミリほどまで近づける。

忌村の幾重もの香水がルイカの鼻を突き刺した。黄色い歯が剥き出しになる。

「てめえ舐めてんのかこらあっ!!！」

「ひっ!!！」

女とは思えない言葉と声色でルイカを責め立てる。無論、責任どうこうはルイカに発生するものではない。これが理不尽という。

忌村は強くルイカの髪を引く。何百個の痛点がルイカの頭部を襲う。

「……………これは、おしおきが必要かあ？」

忌村がそう言うと、後ろの二人はケラケラと笑い始めた。不気味な笑みが月明かりに反射し、どくろのピアスがキラリと光る。

カバンから取り出されたものは……………。

「さあして……………」

銀にかがようカッターナイフだった。

「今日はどこにすっかなあ……………」

キャハハハ、と槍のような笑い声がする。黒色に塗られた爪を備える忌村の手が徐々に近づく。

涙をこらえ、ルイカは唾を飲んだ。

「や…………やめ……………」

次第に大きく見えてくる銀色。今にもアヘリそうな忌村の顔面。興奮という砥石が彼女らのドスを鋭くさせた。

一人がルイカを押さえる。もう一人がルイカの袖をまくる。そして。

「あっ！！ あ、が……………」

「あははははっ！！」

尖った先端が白い皮膚に突き刺さる。

ゆっくりと。ひたすらにゆっくりと。

血球がにじみ出た。暗がりだったため、流れる血は、黒を呈しているように見えた。

ルイカは悲痛に顔を歪める。

「うう…………ぐ、あああ、が……………」

「声出すなよっ！！」

「ふぐつ!!」

ルイカの袖をまくっていた女子生徒が、ルイカの腹部を膝で蹴飛ばした。痛みは背中まで貫いた。

カッターナイフは腕から手のある方向へと移動していく。ルイカの細胞を無理矢理に引き裂きながら。

「うう……」

「泣いてんじゃねえよっ!! 汚ねえな!!」

\*\*\* \*\*

ルイカは地面につくばり、痛みに震える体を抱きしめた。

「明日はちゃんと買ってこいよ。そーだな、明日はおにぎりコンビにあるだけ買ってこい」

「……」

「返事はあつ!?!」

伏したルイカに忌村はつま先でキックをくらわせる。ルイカは吐きそうになったが、ここ最近はストレスで何も口にしていない。だから吐くものはない。

それでもこみ上げる胃液を、ルイカは必死に飲み込んで。

「……はい」

「よし、じゃ、また明日な」

死体のようなルイカを残して、三人は去っていった。  
ピクリとも動かずルイカは俯せ、六つの足音が消えるのを待つ。

「……………うっ」

涙が、止まらなかった。

「うっっ……………うっ……………」

このいじめは、中等部から続いていた。  
ルイカと忌村は元々ただの同級生同士だった。普通の付き合いと、普通の認知があるだけ。決してどちらが危害を加えるでもなかった。むしろ、ルイカは恐れられているくらいだった。それは彼女の異能力に起因し、その点で言えば「普通」の認知とは言い難いかもしれない。

「うっ……………くっ……………」

恐怖は徐々に形を変えた。  
ルイカの性格が暗い、というのもあったからだろう。  
いじめとしての、恰好的だったのだ。今まで恐怖していた相手の上に立つ、という一種の快感が忌村達の背中を押したのもある。  
あの時からずっと、ルイカの涙は濁ってきていた。

「はあ……………はあ……………」

涙が芝生に伝う。血が大きな制服にシミをつくる。髪が土に汚れ

る。

手首に課せられた薄い腕輪。これがルイカの異能力を物語っていた。

ちょうど、切り傷が癒えてくる。血が固まるよりも前に、開いた皮膚が紡がれていった。

「こんな……こんな力のせいで……」

ルイカは自身の腕輪を眺める。

これが自分の力を制御してくれている。

しかし、まるで自分の異能力を象徴しているようで、憎かった。

ひたすらに、恨んだ。

「ううっ……ひっ……」

なんで私だけ……？

いつまで耐えればいいの……？

思えば思うほどに胸は締め付けられ、涙腺が震えた。

今すぐにでも、こんな力は放棄したかった。

いや、むしろ。

こんな命。

「くっ……」

ルイカは静かに立ち上がった。

今まで以上に黙り込んだ世界の端っこ。助けの手は見えない。それがあることすら分からない。

至る場所を知らない痛みが、いつまでもルイカの心臓の周りをさまよった。

「……」

体の外傷は完治した。

それが本当にルイカの神経を逆撫でした。

切歯扼腕を繰り返す毎日。見つめるのは無限の天空ではない。手を伸ばせばそこで止まる、大地だった。

力を解き放てば忌村達は瞬殺できる。「冗談ではなく、瞬殺だ。しかしそうしないのは、自分に勇気がないからで。それを知っているから、なおのこと腹が立った。

「っ!!！」

ルイカが立ち尽くしていると、横から足音がした。

一つの外灯が、その姿を照らす。

ピエロのような仮面。そして黒装束。

こちらの方を向いて、立ち止まっている。

「あ、あなた……は？」

「君が、ルイカちゃんだね」

籠もった声がする。声色からして女。

その黒装束はルイカをルイカと確認して、ゆっくり手を差し出した。ちょうど、相手の手を招くようにして。

「なん、で、私を……？」

「君の力が欲しい」

「っ!!！」

ルイカは驚くとともに、怯えた。  
突然現れたところで、何を言っている。  
ルイカにとつて黒装束は見知らぬ人物。しかし黒装束にとつては  
ルイカはどうやら既知の人物らしい。

「あの、え、あ……」

「うーん……」

突然黒装束が自身の服の端を持ち上げた。  
そこに覗ける暗黒から、一本の剣が飛ぶ。弓を引いたかのような  
スピードで、ルイカまで一直線。  
瞬きもできない間で、ルイカの腕に突き刺さる。

「ああっ!!」

「……ふむ」

黒装束はルイカには聞こえないような声で、貫通しないか、と呟  
いた。

ルイカの激情は限界まで達していた。

また、傷つけられる……。

何もしていないのに……。

もう一人のルイカが、顔を見せ始めていた。

「やはり君の異能力は素晴らしい」

「……う……い」

痛みと怯えが、鬱憤にひき殺された。

ルイカの目が青から赤に変わっていく。額に迸る血管は稲妻のようだった。眉の皺は乾いた地割れのようにだった。

腕に刺さった剣を勢いよく引き抜く。血が飛び散った。

「……うるさ……い」

「ん？」

震えた体が空気の塵を揺らす。

破壊の衝動。

知らない自分を、自分の体で感じた。理性の絶壁。

喉の奥から体内の臓器全てが飛び出しそうだった。

「あああああああつ！！！！ うるさあいいっ！！！！」

「……これが『枷負い』か。いい感じに不安定だな」

ルイカの体からテキストが溢れ出す。

闇の中に二つの赤い眼光が浮かぶ。口内から冷たい息が漏れる。薄青の髪が逆立ち、牙が表に出てきた。

「ううううううっ！！！」

「そっちがその気なら、こっちも実力行使だ」

黒装束は両手を組んだ。指の間に指を埋め、互いに握り締める。

すると両手の間から青い光が漏れる。それを確認し、右手をルイカに差し向ける。その掌には輝く術式。

「はっ！！」

黒装束は眼前に人形を召喚した。その人形はひどく見栄えが悪く、木製の人型人形に汚い布を巻いただけである。

その人形に、黒装束はテキストの糸を各関節に繋いでいく。気味の悪い操り人形の完成。

「小手調べといこうか」

糸で操り、人形の口を豪快に開かせる。そしてその中から数本のナイフを発射する。鋭い切っ先はルイカとの距離を縮める。

しかしルイカは臆することなく向かい合い、思い切り地面を踏みつける。直後、岩石の塊がルイカの壁のようにせり立つ。

梃子の原理から、地面が抉られたのだ。

「ほっ……」

数本のナイフが持ち上げられた岩に突き刺さる。

黒装束が次のモーションに移ろうとした。  
が。

「なっ！？」

ルイカはもう後ろにつけていた。

「がっ！！」

渾身の裏拳が仮面を破壊する。仮面をバラバラに飛び散らせながら、黒装束の頭を先頭にしてその体が吹き飛ばされる。首の向きが

無惨にも回転し、あり得ないくらいに伸びきっている。  
即死、と思われた。

「っ!!」

それでも人形は動いてきた。

手首からナイフを突き出し、振り向きざまルイカにそれを振り下ろす。ルイカはそれを腕輪で受け止め、カウンター。思い切り人形の顔面を殴り飛ばす。

バアン、と音をたて、粉々に木と化した人形の頭。それでもなおのこと人形の体は動いてくる。

「ちいつ!!」

ルイカは人形のちょうど腹部を掌で押すように吹っ飛ばす。人形は関節をグニャグニャにしながら、さきほどルイカが起こした岩の壁の前で止まった。

赤い閃光を引っ張って、ルイカの俊足は彼女の体をもつ人形の元へと運ぶ。

破壊しても向かってくるなら。

ルイカはそう考えた。

そしてそれを行動に変える。

つい前に人形が発射し、岩の壁に突き刺したナイフ。これを引き抜き、人形の各部位に突き立てる。

一瞬のうちに終わらせた。

これなら、人形は身動きがとれないはずだ。

「……」

「……やるねえ」

「っ!!」

突然、黒装束の声が聞こえる。

ルイカが音源を特定する間もなく、奴は木の影から姿を現した。

とつさにルイカは確認する。攻撃した黒装束。首の骨まで折ったはず。しかしその疑問は左方で倒れている黒装束を見て晴れた。

つまり、あれも人形。

本体は最初から隠れ、様子を伺っていた。

「まだ戦い方に理性が見られるが、まあいいだろう。今回のところは」

「があっ!!」

間合いはゼロで埋まる。拳は仮面と一ミリ未満。音が遅れてやってくる。

しかし、ブウンツと空ぶった。黒装束は消え失せたのだ。

「最後にもう一度言う。私は君の力が欲しい」

雲に包まれた夜空から、声がする。

「君が……」

ルイカの目の色は、青に戻っていた。

「必要だ」

ぬるい風が強く、吹き荒れた。



## 第十五話 断腸のグリーフ（前書き）

大学生一年目、色々忙しく執筆にあてる時間がありませんでした。理系はやっぱり忙しい！

言い訳かもしれませんが、執筆時間が少ないことは確かです。でも頑張るので、どうか見てやって下さい。お願いします。

## 第十五話 断腸のグリーンフ

「えー、と。初めまして」

0組の教壇にとある男性が立っていた。肉付きが悪く、百八十はあろうかと思われる身長。高い、というよりは、長い、と言った方がしっくりくる。

薄緑色をした髪に、長い長方形の眼鏡。白衣の下もまた、白いワイシャツで、若干猫背気味なのが気になる。

「魔伝歴史学を担当する、花札はなふだウノ助うのすけです。これから一年、よろしくお願ひします」

ウノ助は丁重に挨拶をした。

そう言い終え、お辞儀した後、顔を上げて彼と目が合ったのはごく少数であった。

0組に真面目な者は少ない。まともな者も少ない。まともでないから、真面目でない、ともいえる。

「ぶっ……花札とウノて」

討窪は端の方で密かに笑いをこらえていた。

ちなみに破門は早くも爆睡。健やかに寝息をたてて顔面を伏している。

「えつと実は僕、研修生でして、少々ふがない面もありますが、皆さん同様、新しい環境で頑張りたいと思ってます」

蒼白の顔面に笑みを浮かべ、ウノ助は眼鏡をかけ直す。

では早速、と続け、ウノ助は細長い五指で魔伝歴史学の教科書を手に取った。

ページを一枚めくる。

0組初めての授業が幕を開けた。

しかし破門は眠っている。

ウノ助が喋り始める。

しかし破門は眠っている。

「えーまず、魔獣の区分からですが……」

破門は眠っている。

\*\*\* \*\* \*

「ああー……疲れた、なあー……」

「寝てただけやないかっ!!」

破門は両腕を天高く、ピンと伸ばして体を反らせた。確かに五分前かがみで寝ていたなら。という話である。

ウノ助の授業が終わり、何人かがダルそうに立ち上がる。ウノ助も緊張が解れたのか、ふー……と息を吐いて監督教員がいる方へ歩み寄ろうとしていた。

と、その途中に。

「……」

「あ、君」

「……えっ？ あ、わ、私ですか……？」

道すがら、ウノ助はとある女子生徒に話しかけた。  
その女子生徒とは。

「えっと、ルイカ、さん、だね」

「え、あ、あの」

「名簿順だから、合ってると思うんだけど……」

ルイカは一呼吸置いて、ウノ助と目を合わせず静かに頷いた。一  
抹の疑問と不安を抱えながら。

ウノ助はルイカの大きな瞳を見ながら優しく笑った。

「何か、ずっと下向いてて、元気なさそうに見えたから……」

「……そ、そう……ですか」

「体調が優れませんか？ 保健室行きますか？」

「い、いえ。そういうの、じゃ……ない、です」

どうにもこうにも言えない、言葉に詰まっているような表情をルイカは浮かべた。

それを察したのか、ウノ助は次に用意していた言葉を喉の関所で押しとどめ、口角だけを上げた。

「……無理はしないで下さいね」

「……」

ルイカは口のチャックをしっかり隅まで止め、少しだけ、本当に少しだけ首を縦に振った。むしろ揺れた、の方が正しいかもしれない。

ずっと、ウノ助は立ち去る。ルイカは両肩に首を埋めるようにして固まっていた。

そんな二人のやりとりに教室の連中が気づくはずもなく、二人の交わした言葉達は溶けるように薄れていった。次の授業なんだったっけー、学食って何時からー、などなど、一人では作れない言葉の中に。

\*\*\* \*\* \*

ルイカは放課後の廊下をトボトボと、独りで歩いていく。まるで浮いているかのように、一步一步が弱く静かに、空虚に、その足跡は廊下の上に敷かれ、直ぐさま消えていく。

頭を垂れ、前髪のせいで前方がよく見えていない。それでも不思議と、部活だ委員会だなんだで犇めく廊下では、人とぶつかりはしなかった。

ただ。

不思議「外」な奴もいるわけで。

「だから、俺おわっ！！」

「きゃっ」

ルイカが廊下のコーナーに差し掛かった辺りで、まるで漫画のよう  
うに、二人は腕同士を衝突させた。

「いってえ〜……誰だよ……つてお前!! あの時の!!」

「……え、あの」

ルイカを「あの時の」と称し、人差し指を突きつけてきたそいつ。  
正しく、そう、左腕紙製テーピング野郎。もとい破門愛。

「ん? 知り合いか?」

「知り合いも何も辻崎! こいつ入学式のときの!」

破門はルイカを今度は「入学式のときの」と称し、辻崎に伝達を  
はかった。

ところで人気に溢れる廊下で声を荒げれば、注目も集まってくる。  
通る者は皆とりあえず破門、辻崎、ルイカの三人を見てから通り過  
ぎる。立ち止まっている者すらいた。

「……とりあえず破門、この子に謝れよ」

「はっ!? また俺かよ!?!」

破門はメタモルフォーゼで美少女と化した吟斗にぶつかった、あ  
の一件のことを思い出しながら言った。

早く、と急かす辻崎に少々渋りながらも、破門はルイカに謝ろう  
として、ルイカの目を見た。

黒の眼光と青の眼光が交差し、パチンと静電気でも起きたかのよ

うに感じた。

「はぁ……えっと、っておい!？」

ルイカは多少の無駄もなく立ち上がり、そそくさと破門の横を走り去ってしまった。恥ずかしさからなのか、真意はつかめないが、逃げたことは確かである。

撫でるような風が破門を横切った後、無音が異様に痛々しかった。

「に、逃げられた!？」

「お、おう……逃げられた……な」

一応破門とルイカの関係は知り合いの部類に入るはずで。よもや目も合ったのに無言で走り去られるようとは。

破門は半信半疑の面もちで辻崎を見る。辻崎は何も言わず、鼻から息を吐き出した。

「辻崎、これも俺が悪い……のか？」

「さぁ、どうだろうな」

一方でルイカの背中中は小さくなっていき、突き当たりの角を曲がった時点で破門と辻崎の視界からは消失した。

ルイカは走りながら、涙を拭き取っていた。

なぜ涙がこぼれるのか、ルイカ自身まったく分かっていない。怯えているともとれる。悲しんでいるともとれる。恥ずかしがっているともとれる。

「……ひっ……うう、ひっ……」

別段憂いてるわけではなかった。単に眼球から流れる液体を袖に染み込ませているだけで、そこに感情が含まれていることはない。少しだけ走り疲れて、速歩きのようになってきたところ。ルイカが顔を上げようとすると。

「きゃっ!」

「おっと」

ルイカはまたしても誰かにぶつかった。しかし今度はまるで「壁」のようだったのだ。

「だ、大丈夫ですか？」

「え、あ、あの」

「……あれ、君は……確か、ルイカ、さん？」

その「壁」は、ウノ助であった。

ゴボウのような見た目とは裏腹に、がっしりとした筋肉がルイカとの衝突に耐えていた。

「……」

「平気ですか？ 立てますか？」

ウノ助は蜘蛛の巣のように広がる五指をルイカに差し伸べた。向けられた手のひらに、ルイカはそっと手を重ねる。

その時、少しだけ腕輪が見えたが、ウノ助はまったく気にしてい

ない素振りです。

「前方には十分注意しましょうね」

「……あ、はい」

くいつと、いとも簡単にルイカは立ち上がった。  
今度は逃げなかった。怯えることもなかった。  
ウノ助は破門とは違ってもの静かで、上品だ。「いつてえ」など  
とは言わない。

「す、すみません、でした」

ルイカは、慣れない発声をしたあと、首だけを縦に軽く一振り。  
お辞儀のつもりだった。

ポンチヨのような制服を揺らし、ルイカはウノ助の横を通り過ぎ  
る。穩便に済まそうと。何事もなかったように振る舞おうと。

ルイカの背中がウノ助の背中と向き合う。  
寸後、ウノ助は振り向いて。

「えっと！ 僕は教員棟の第七研究室にいるから！」

少しだけ大きい声で、ルイカを引き止めるように言った。

「何かあったら、是非来てくださいね！ 力になりますよ！」

「何かあったら」。

その言葉がルイカの胸に突き刺さる。

ウノ助はルイカが何か悩み事を抱えていると思ったのだ。そして  
本気でルイカのことを心配しているようだった。でなければ、今の

ようなことは言わない。

一抹の不安と期待が、ふてぶてしくもルイカの心を曇らせた。  
信じていいのか。  
疑っていいのか。

答えに困惑したルイカは何かを言うでもなく、ただ、振り向いた。

「……っ」

眼鏡のレンズがあっても、ウノ助の瞳はエメラルドグリーンで、太陽によく映えていた。ルイカが目を合わす。

しかし、すぐ目を反らし、体を向き直して、小走り気味にその場を後にした。

「……ふう」

ウノ助は上げた腕を静かに下ろした。

\*\*\* \*\* \*

「たあーくよ！」

野太い男子の声がある。その男子生徒の隣には他の男子生徒数名いて、ちょうどコンビニから出てきたところであった。

「おにぎり無いかとどーいうことだよっ！？ なあ！？」

「マジでもうさあ……誰だよー」

「今ってこんなに不況だったかー？」

外はほの暗く、外灯がチラホラ点き始める頃。口々に吐かれる愚痴が、夕焼けの曇り空へ昇っていく。

芝生の中を通る一本道。カルマ学園の生徒は大抵そこを順路として歩いていく。

その道からはずれたところに、木々が生い茂る森林区域がある。生徒の戦闘演習用に使われることもあれば、魔獣の飼育場所としても用いられる。

「……はあっ……はあっ……はあっ」

その森林区域の中、男子生徒達の言葉も聞こえないような場所に、ルイカはいた。

大量のおにぎりを胸いっぱい抱えながら。

「……はあっ」

ルイカが食べるわけじゃない。これは忌村による命令である。でなければ、こんな他人に迷惑かけるような、店員に変な目で見られるような行動に出たりはしない。

ルイカは忌村が集合をかけた場所へ向かおうとする。

「……なん、で」

おにぎりが全く重くない。

それは彼女の異能力「枷負い」のせいだ。

カルマがまだ生きていた魔術創世期。その時代に存在した魔獣の血が、ルイカには流れている。身体能力が抜群に優れ、過度ともいえるほどのテキストを有する。

「……わたし、が」

普段は枷を両手首、両足首の計四力所に装着している。その忌々しい枷を隠すため、カルマ学園に申請して、制服の形態を変えてもらっていた。

ボサボサの髪のまま、ルイカは俯き加減に歩を進める。

「……うっ……ひっ……あっ！」

ルイカは何かに躓いた。どうせ鳶のようなものだろうが、ルイカにとつてそんなことはどうでもよかった。

おにぎりがぶちまかれる。又かるんだ地面のせいで、三角の包装が泥を帯びる。

「……」

ルイカは倒れたまま、まるで死体のように動かなかった。  
絶望と悲哀が背中にのしかかり、ルイカを立ち上げようとしない。

(もう、どうにでもなれ……)

神様まで自分を見放したと思った。

骨抜きにされたかの如く、力が入らない。

動いているのは心臓だけだ。

心臓はあっても、心はない。

(このまま寝ようかな……それで、もう起きなければ……)

その時だった。

「おーいルイカア」

忌村の声がした。

ルイカはとつさに顔を上げた。

「なあに寝てんだよおい。あーあーあー、おにぎり汚れてんじゃねえか」

忌村はドスの聞いた目でルイカを見下ろす。忌村の後ろにつける女子二人も、あざ笑うかのように、いや、あざ笑いながらルイカを見る。

ルイカには、彼女らが死神に見えてしまっていた。

「んー……今日な、火系統の能力演習だったんだよ」

忌村が手を前に出す。ブレンダーのグラスを持つような形にしてテキストが忌村の周りに発生する。

そして一瞬黄色く光った後、忌村の掌に火の玉が浮かぶ。

「こいつでその濡れた服、乾かしてやるよ」

「い、いや……」

不気味な微笑み。甲高い笑い声。細く尖った指先。

忌村の全てが、ルイカの全てを壊していく。

たまらなく、ルイカの瞳から涙がこぼれる。震えた腕は、どうしても動かなかった。

「やめ……」

「ほづらっ!! 行くぞっ!!」

口角を上げたまま、忌村は腕を一気にふり下ろそうとする。炎がゴォツと音を立て揺れる。くらったらひとたまりもない。

しかし、ルイカの元に届く寸分前のことだった。

「ん!？」

忌村の手とルイカの顔面の間に、大きな隔たりができたのだ。その場に居合わせた四人は何事かと思っただが。彼女らの前にあつたのは。倒れた樹木だった。

「な、何だ? 急に……うおっ!!」

「きゃっ!!」

さらに木が倒れ始める。

一つ二つなんてもんじゃない。十本は軽く倒れるようである。バキバキと轟音をまきながら、根本から折れていく太い幹。

ルイカは目を疑ったが、確かに木は倒れていく。忌村達はそれを四苦八苦で避ける。おにぎりはとうにぺちゃんこだった。

「くそがっ!!」

「ちよつと何なのよこれ!？」

倒れたルイカの元にも木は降ってくるが、いかんせん当たること

はなかつた。当たつてたかもしれないが、ルイカは今の状況が上手く飲み込めず、それに気づいていないだけかもしれない。

あたり一面の木々が一通り倒れたところで、木のラツシュは止まつた。

「はあ……はあ……なんだあこりやあ。ルイカ！ てめえの仕業か！？」

忌村がルイカに牙を向く。鬼のような形相で、乾いた声を張り上げていた。

「違う」とルイカが言おうとしたその時、忌村達の後ろの方で声が聞こえる。

それは、どこか聞き覚えのある声で。

「うーむ……やはりこの技は軌道修正が難しいな」

姫鉦。そう彼女の声だった。

忌村達もそれに気づいたらしく、ちつ、と舌打ちをした。

泥だらけで倒れたルイカを取り囲む今の構図。他人に知られたら多少厄介だ。

忌村達はそう理解し、そそくさと姿を消した。

「むっ？ そこに誰がいるのか？」

稟と張つた姫鉦の声に、ルイカが我に返る。

倒れて積まれた木のおかげで、まだ姿は見えていない。

姫鉦は目の前の木を蹴り飛ばした。

「……誰も、いないか」

カラン、と姫鉦の蹴りで割れた樹木が転がる。  
殺風景だった。

つぶれたおにぎりは残っていたが。

(あの声は、ルイカだな)

姫鉦の「誰もいない」という発言は、この場には、という意味であつた。

彼女の地獄耳が足音を捕らえる。息づかいからルイカ、とも断定できた。

それに続いて忌村達の足音。「次は覚えてる」だの「ルイカめ」だの、愚痴もすっかり聞き取っている。

そうして理解する。

非常に好ましくない、ルイカの状態。

「これはー……ふむ」

姫鉦は、目を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2411/>

---

スキルハーツ！

2011年10月6日20時44分発行